

永明寺山古墳

永明寺山古墳

2016.3

茅野市教育委員会

茅野市教育委員会

永明寺山古墳

2016.3

茅野市教育委員会



1 永明寺山古墳全景（北西側上空から）

巻頭図版 2



1 永明寺山古墳全景（南西側上空から）



2 永明寺山古墳全景（上空から）



1 2号刀鏢の銀象嵌文様



2 馬具



3 耳環ほか

序 文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むことができます。

当市には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡や駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡があるだけでなく、「縄文のビーナス」や「仮面の女神」の愛称で親しまれている国宝に指定されている土偶を保有しています。こうしたことから、「縄文の里」として全国にその名を知られています。

また、茅野市は諏訪大社上社前宮があるばかりでなく、諏訪地域では最も多い60余の古墳を有することから古代諏訪の発祥地とも考えられる地でもあります。

そのような中、永明寺山公園墓地の拡張が計画された造成地の一角で、未周知の古墳が発見されました。発見当初から当局との協議の中で、古墳の重要性が理解され、現地に復元整備されることを前提に学術的な発掘調査が行われることになりました。

発掘調査は平成25年度に行われ、この過程で石室から出土した直刀の鏝に銀象嵌文様のあることが判明し、長野県下でも例の少ないことから、古墳とその出土品は大いに注目されることとなりました。

昨年度は、金属製品の保存処理なども行われ、ここによりやく発掘調査の成果を報告の運びとなりました。本書が今後大いに活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と保存復元にご理解とご協力を賜りました関係者の皆さま、調査に従事された作業員の皆さまに心からお礼を申し上げます。

平成28年3月

茅野市教育委員会
教育長 牛山英彦

例 言

- 1 本報告書は、茅野市永明寺山公園墓地の区画増設事業に伴い実施した永明寺山古墳の発掘調査報告書である。
- 2 本古墳は、今回の公園墓地区画増設事業に伴い新たに発見された無名の古墳であり、「永明寺山古墳」と命名し、登録した。茅野市の遺跡台帳では、348番目となる。
- 3 発掘調査は茅野市教育委員会の直営事業とし、平成25年度に試掘調査と発掘調査及び古墳保存復元工事、平成26年度に鉄器保存修理、平成27年度に報告書の作成作業を行った。
- 4 試掘調査は小池岳史・塩澤恭輔が担当し、発掘調査は小林深志・塩澤恭輔が担当した。
- 5 発掘調査の土層観察については、小山正忠・竹原秀雄1995『新版標準土色帖』による。
- 6 発掘調査・整理作業にあたり、以下の委託業務を実施した。
 - 防護柵設置工事：宮川建設株式会社
 - 基準杭設置測量業務委託：株式会社両角測量
 - 空中写真撮影：東京航業研究所
 - 石室内三次元計測作業委託：株式会社共同測量社
 - 古墳復元設計委託：株式会社嶺水茅野支店
 - 金環他保存処理委託：株式会社文化財ユニオン
 - 鉄製品保存処理委託：株式会社吉田生物研究所
- 7 遺物等の整理作業は酒井みさを・大勝弘子・武居八千代・立岩貴江子が行い、委託業務以外の遺物実測は鶴飼幸雄・小林深志・酒井みさを・塩澤恭輔が行い、トレースは鶴飼、写真撮影は小海清明が行った。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。
 - 鶴飼幸雄 第4章第2節・第3節・第4節・第5節、第5章第3節、第6章
 - 小林深志 第1章第2節、第2章第1節・第2節・第3節2・4、第3章第1節、第5章第1節
 - 塩澤恭輔 第1章第1節、第2章第3節1・3、第3章第2節、第4章第1節、第5章第2節
- 9 調査から報告書作成に至る過程で以下の方々、並びに各機関のご指導・ご協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である（順不同・敬称略）。
 - 長野県立歴史館 原明芳、西山克己、白沢勝彦 長野県埋蔵文化財センター 若林卓
 - 諏訪市教育委員会 児玉利一
- 10 本書に関する出土品及び諸記録は茅野市教育委員会文化財課が管理し、茅野市尖石縄文考古館で保管している。

目 次

巻頭図版

序文

例言

目次

第1章 古墳の位置と環境	1
第1節 古墳の位置と地理的環境	1
第2節 茅野市域の古墳	1
第2章 調査の経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の組織	10
第3節 調査の経過	10
1 発掘調査	10
2 遺物の保存修理	11
3 成果の公開と普及活動	11
4 古墳の復元	12
第3章 古墳の構造と遺物の出土状況	13
第1節 古墳の構造	13
1 墳丘・外護列石・周溝	13
2 石室構造	14
第2節 石室内遺物出土状況	15
第4章 出土遺物	17
第1節 土師器・須恵器	17
1 石室内出土土器	17
2 墳丘及び外護列石外出土土器	19
第2節 武器	20
1 直刀	20
2 刀装具	25
3 刀子	25
4 鉄鏃	27
第3節 馬具	35
1 鉸具	35
2 辻金具	35
3 鉾付金具	35
第4節 装身具	37
1 耳環	37
2 勾玉	38
3 切子玉	39
4 白玉	39
5 ガラス玉	39

第5節 石製品	39
1 砥石	39
第5章 考察	41
第1節 石室からみた永明寺山古墳の築造年代	41
第2節 石室内遺物の出土状況からみた埋葬の特徴	41
第3節 永明寺山麓古墳群釜石小群における鉄鍬の変遷	43
1 永明寺山麓古墳群釜石小群	43
2 永明寺山古墳の尖根鍬の分類	43
3 尖根鍬の形態変化	44
4 尖根鍬の変遷と組成	44
5 折り曲がった鉄鍬	45
6 釜石古墳と一本樞古墳の鉄鍬	45
7 釜石小群の鉄鍬の変遷	47
8 平根鍬の評価	47
第6章 調査のまとめ	48
1 永明寺山古墳の年代と被葬者の埋葬時期	48
2 永明寺山古墳の性格	49
3 復元整備された永明寺山古墳	50

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	永明寺山古墳位置図 (1:50,000).....	2
第2図	永明寺山古墳周辺の遺跡と茅野市の古墳分布 (1:30,000).....	3
第3図	永明寺山麓古墳群釜石小群の3古墳の位置 (1:2,500).....	4
第4図	永明寺山古墳の地形とトレンチ配置図 (1:100).....	7
第5図	墳丘トレンチ土層断面図 (1) (1・2・3トレンチ) (1:60).....	8
第6図	墳丘トレンチ土層断面図 (2) (4・5・6トレンチ) (1:60).....	9
第7図	永明寺山古墳平面図 (1:100).....	13
第8図	永明寺山古墳石室平面・側面図 (1:80).....	14
第9図	永明寺山古墳石室内遺物出土状況図 (1:30).....	16
第10図	土師器・須恵器 (1:3).....	18
第11図	須恵器 (1:4).....	19
第12図	直刀 (1) (1:4).....	21
第13図	直刀 (2) (1:4).....	22
第14図	直刀 (3) (1:2)・刀装具 (1:2)・(1:1.5).....	23
第15図	刀子 (1:2).....	26
第16図	鉄鏃 (1) (1:2).....	28
第17図	鉄鏃 (2) (1:2).....	29
第18図	鉄鏃 (3) (1:2).....	30
第19図	鉄鏃 (4) (1:2).....	31
第20図	鉄鏃 (5) (1:2).....	32
第21図	鉄鏃 (6) (1:2).....	33
第22図	鉄鏃 (7)・鉸具 (1:2).....	34
第23図	辻金具・鉾付金具・石製品 (1:2).....	36
第24図	耳環 (1:1.5).....	37
第25図	勾玉・切子玉 (1:1.5).....	38
第26図	白玉・ガラス製白玉・ガラス製小玉 (1:1).....	40
第27図	釜石・一本榧・永明寺山古墳の石室 (1:100).....	42
第28図	永明寺山古墳の尖根鏃の鏃身部形態.....	44
第29図	釜石古墳の鉄鏃 (1:3).....	45
第30図	一本榧古墳の鉄鏃 (1:2).....	46

表目次

第1表	鉄鏃観察表.....	51
第2表	装身具一覧表.....	52

写真図版目次

- 巻頭図版 1 永明寺山古墳全景（北西側上空から）
巻頭図版2-1 永明寺山古墳全景（南西側上空から）
2-2 永明寺山古墳全景（上空から）
巻頭図版3-1 2号刀鐔の銀象嵌文様
3-2 馬具
3-3 耳環ほか
- 図版1-1 永明寺山古墳全景（北西側上空から）
1-2 永明寺山古墳全景（南西側上空から）
図版2 永明寺山古墳全景（上空から）
図版3-1 永明寺山古墳全景（南側上空から）
3-2 永明寺山古墳全景（東側上空から）
図版4-1 調査前の古墳（東側から）
4-2 古墳の位置とトレンチ（東北側から）
図版5-1 試掘調査の状況（東北側から）
5-2 試掘調査1トレンチ
5-3 試掘調査2トレンチ
図版6-1 試掘調査4トレンチ
6-2 試掘調査5トレンチ
6-3 試掘調査6トレンチ
図版7-1 発掘調査全景
7-2 石室入口部検出状況
図版8-1 石室・外護列石検出状況（南西側から）
8-2 石室・外護列石検出状況（東側から）
図版9-1 石室正面
9-2 石室内から望む開口方向
図版10-1 石室内遺物出土状況（南東側から）
10-2 石室内遺物出土状況（北西側から）
図版11-1 石室内奥壁部遺物出土状況
11-2 石室内入口部東壁下遺物出土状況
11-3 石室内中央部東壁下遺物出土状況
図版12-1 耳環・鉄鏃出土状況
12-2 玉類・鷓目金具出土状況
12-3 石室入口部土器出土状況
図版13-1 古墳保存復元工事（1）
13-2 古墳保存復元工事（2）
13-3 古墳保存復元工事（3）
13-4 古墳保存復元工事（4）
13-5 保存復元された永明寺山古墳
図版14 土師器・須恵器
図版15 直刀
図版16 1号刀・2号刀の銀象嵌文様
図版17 直刀のX線写真
図版18 直刀の関付近及び刀装具
図版19 刀子・馬具・石製品
図版20 鉄鏃 1
図版21 鉄鏃 2
図版22 鉄鏃 3
図版23 鉄鏃 4
図版24 耳環・切子玉・勾玉・白玉・ガラス玉

第1章 古墳の位置と環境

第1節 古墳の位置と地理的環境

本古墳は茅野市役所から北へおよそ1kmの場所にある、茅野市ちの永明寺山公園墓地内に所在する。永明寺山は霧ヶ峰火山塊の南縁を形成する標高1156mの花崗岩質閃緑岩を基盤とした山である。山中には所々で花崗岩の大きな岩が露出しているのを見ることができる。古墳が位置するのはその永明寺山の南縁に突出する小丘陵の山腹で、両隣の尾根の間からは茅野駅から市役所一帯の市街地を一望できるほか、右手には上川の沖積地から守屋山麓一帯にかけて、左手には八ヶ岳西南麓まで望むことができる。さらには天候が良ければ遠くに富士山を眺めることができる。

本古墳のすぐ下には釜石古墳が、同じ沢沿い下方には一本榎古墳がつくられており、永明寺山一帯の古墳の中でも標高875mは最上部の古墳となる。古くからこの一帯には永明寺山麓古墳群と呼ばれる数多くの古墳が平坦部から中腹にかけての沢筋に存在し、本古墳もその一つに含まれるものと考えられる。現在ではその多くが失われてしまっている。

墓地が造成される以前は耕作地であり、近くの住民によると耕作をしていたときには縄文土器も拾えたという。その後墓地造成工事により開発されたが、古墳発見時は松林であった。

第2節 茅野市域の古墳

茅野市域には、現在60余の古墳が知られている。その中には、名前は知られていても、既に現地で確認できない古墳もあるが、それ以外にも永明寺山麓やその下方に広がる市街地の開発によって消滅した古墳はさらに多いと考えられる。

茅野市の古墳については、藤森栄一氏は「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」（藤森1939）において花崗岩の岩山の傾斜面に立地する永明寺山腹、礫多き河原の沖積地に立地する上川河床、ローム層の高台に立地する長峰台地、安山岩山脈の緩傾斜面に立地する守屋山麓（原文は守矢山麓）の四墳墓群に分け、それぞれの性格について述べている。

宮坂光昭氏も、『茅野市史』（宮坂1936）において茅野市の古墳を永明寺山麓古墳群、上川河床古墳群、長峰台地古墳群、守屋山麓古墳群の4群に分けているが、茅野市の古墳を立地により4群に分けている点などは、藤森氏の分類を踏襲したものといえる。

宮坂氏は、永明寺山麓古墳群をさらに矢穴古墳を中心とした小群、釜石古墳を中心とした小群、上原地区の山麓にある小群の3つの小群に分けている。永明寺山麓の古墳はすべて後期古墳で、すべて尾根に挟まれた谷に立地している。それぞれの古墳の立地している谷からの視野は意外と狭く、そこから望む風景が異なっている。

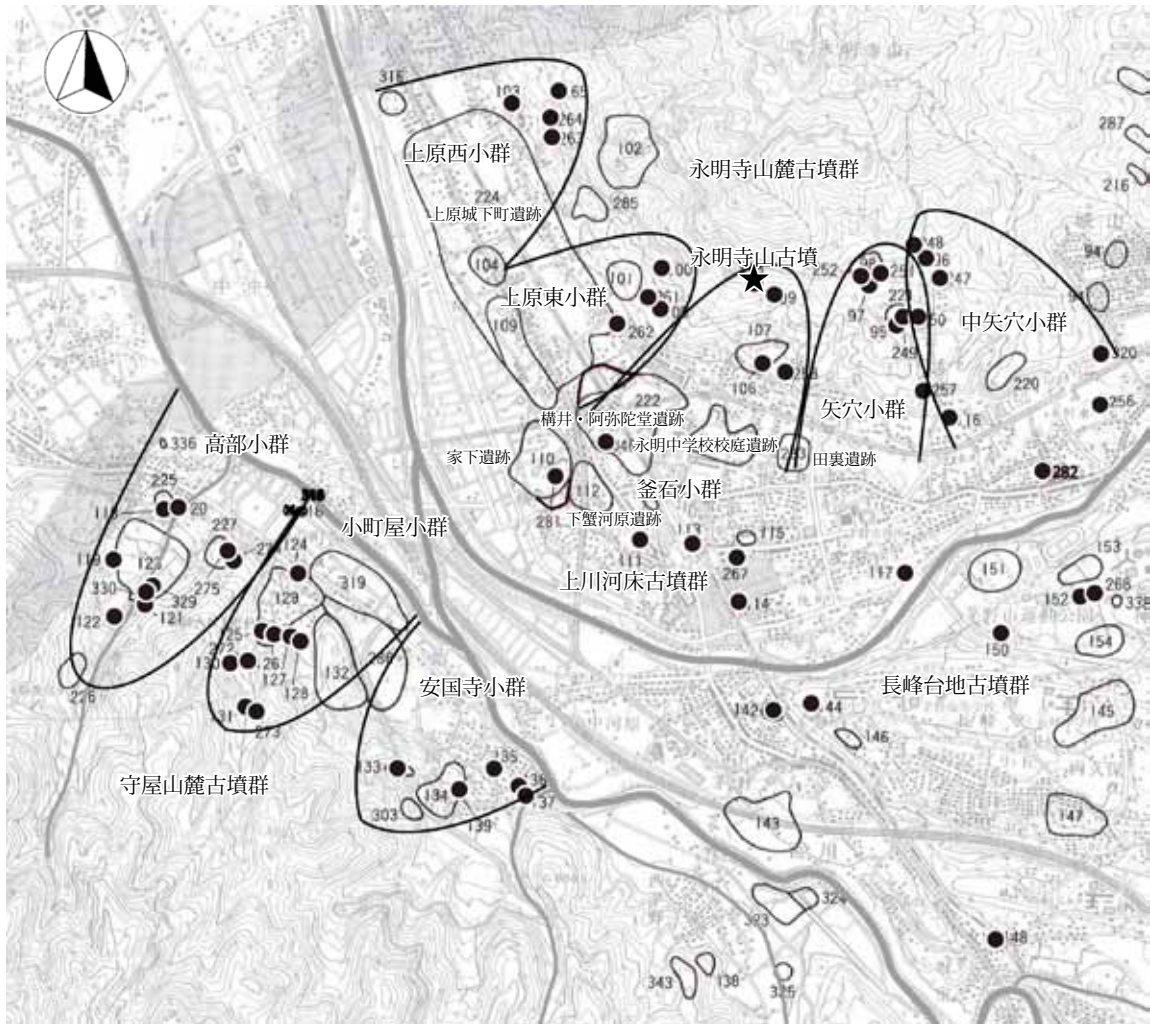
古墳が築造される場所は、被葬者の支配する領域を望むことのできる場所と考えられることから、矢穴古墳を中心とした小群は、尾根を挟んで中矢穴小群と矢穴小群の2小群に、上原地区の山麓にある小群も上原西小群と東小群の2つに分けて考えるべきであろう。このように古墳の築造された谷からの視野を考慮すると、永明寺山麓古墳群は、第2図のように5つの小群とすることができる。

守屋山麓古墳群も、南から安国寺小群、小町屋小群、高部小群の3群が茅野市域にあり、さらに諏訪市域に入り神宮寺小群、大熊小群の5小群から構成されている。なお、高部小群とした中に狐塚1号古墳と2号古墳があるが、尾根の頂部にある前期古墳で、諏訪一円を望むことのできる立地となっている。

今回調査を行った永明寺山古墳は、未周知のものであったが、宮坂氏の永明寺山麓古墳群中の釜石古墳を中心とした小群に含まれるものである。この小群のある谷からは、現在の茅野駅を中心とした範囲を望むことができるが、この範囲には構井・阿弥陀堂遺跡がある。この遺跡は市街地にあるため、発掘調査が十分に行われていないが、縄文時代から平安時代まで続く代表的な集落であり、釜石小群の被葬者は、この集落を拠点とする集団のものである可能性が高い。この小群には、第3図に示した一本榎古墳の他に沢口古墳とギンザラゾウス古墳があ



第1図 永明寺山古墳位置図(1:50,000)



第2図 永明寺山古墳周辺の遺跡と茅野市の古墳分布 (1:30,000)

ることになっている。ギンザラゾウス古墳は一本樫古墳と同一古墳との説もある。また、沢口古墳は、現在は地点を確認できない。なお図中、釜石古墳に隣接して一本樫古墳の文字が見えるが、発掘調査終了後に移転して復元したためである。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成24年になって、永明寺山公園墓地の一角の民有地であった山林に、新たに墓地を造成することが計画された。造成を担当する市民課から、埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあったが、当地は遺跡に登録されていない場所であった。しかし、この公園墓地のある谷には、茅野市内でも有数の遺物の出土を見た釜石古墳、さらに下方には一本樫古墳があることもあったので、念のため現地に赴き確認を行った。しかし、一帯はアカマツの林となっており、ササなどの下草も茂っていたため、遺物の採集もできず、遺跡であることを確認することができなかった。

平成25年の4月になり、樹木の伐採が終わり、雪も解けたため、再度現地を訪れたところ、径が1 m以上もある大きな花崗岩が地表に集中して現れている個所を発見した(図版4)。さらに、その南直下から土師器・須恵器も採集したことから、古墳の可能性が高いと考えられた。

そこで、これが明らかに古墳であるのか、古墳であった場合にはどのように保護措置を行い、墓地造成との調整を図ったらよいかを見極めるため、まず試掘調査を行うこととした。



第3図 永明寺山麓古墳群釜石小群の3古墳の位置 (1:2,500)

試掘調査

試掘調査は、平成25年4月16日から開始した。まず、どのような地形の中に立地しているかを確認するため、地形図を作成し、花崗岩の礫が3点ほど集中する箇所を天井石の中心と仮定し、ここを中心に放射状にトレンチを設定し掘り下げを行うこととした（第3図）。掘り下げ前の周辺の標高は、875m～877mである。

また、調査区の下段がすでに墓地となっていることから、土石の落下を防ぐための防護柵を設置する工事を並行して進めた。

調査区内には、伐採したアカマツの根が随所にあり、それを避けるようにトレンチを設定したため、不規則なものとなった。

試掘調査の結果、中心からそれぞれ5.5mほどのところから径50cmほどの礫が積まれた状態で確認された。また、斜面下側の天井石と推測した礫の両端から石室の側壁にするために積んだと考えられる大礫も出土し、古墳で間違いないであろうとの結論を得た。

試掘調査の結果からは、長い年月の間に、古墳の天井石から上の墳丘が流失し、天井石の一部が割られて持ち出されていた。また、外護列石の外側にあったと考えられる周溝も、周辺からの土砂の流入によって埋まって、平坦になっていった様子がうかがえた。

本古墳の築造された永明寺山は、全体が花崗閃緑岩で形成されている。場所によって鉱物の集まり方や結晶の大きさなどさまざまであるが、全体として風化が激しく、長石類が粘土化して柔らかくなり、崩壊をしている崖や露頭が多い。このため当地の花崗閃緑岩は土木用の砕石に利用される。また、黒みがかった捕獲岩があるため、墓石などの磨いたものには不向きで、石垣や階段、門柱などに使用された。

本古墳のある周辺も、風化して砂質化した花崗閃緑岩が堆積しており、それに混じって風化を免れた礫が所々に散見される。このことから、古墳の築造に用いられた石室や外護列石に用いられた石材も、ほとんどが花崗閃緑岩である。

試掘調査を開始し、古墳である可能性が高くなった直後から、墓地造成の担当課である市民課とは、古墳の範囲については造成計画から外すことで調整を行っていたが、どこまでを保存し、どこまで墓地造成を行うかについては未調整であった。そこで、試掘調査の目的を保存する範囲を確定する調査に切り替え、トレンチを外護列石と考えられる礫の外側に広げていった。また、現状で保存する場合、周辺が墓地造成されてしまい、将来的に発掘調査を行うことができなくなる状況を考え、十分な発掘調査と、古墳の復元工事も墓地造成と同時に終わらせることとなったため、そのための予算積算を行うための事前調査としても位置付けられた。

外護列石外側の、周溝に堆積したと考えられる砂質土は、乾燥しているときは非常に硬くよく締まった土質であるが、一旦水分を含むと非常に軟質となり、流れ出してしまう性質を持っている。各トレンチに堆積している土層も、色調や含有物によって何層にも分層しているが、埋没するまでにはそれほど時間を要しなかったのではないかと考えられる。

以下に、試掘調査の概要を記述する。

1号トレンチ（第4図、図版5-2）

石室天井石からは、東側にあたる。外護列石とその外周にあたる部分を調査した。外護列石の外側では、1.5mほど掘り下げ、13層に分層できた。13層が地山となる。外護列石に近い11～12層の層境で、須恵器や須恵器の破片が出土している。

トレンチの中央では、12層に掛かる位置で外護列石の一部が崩落したと考えられる礫が出土していることから、かなり早い段階での崩落であったと考えられる。トレンチ東側での周溝の立ち上がりは確認できなかった。

なお、トレンチ土層説明中に地山とあるのは、古墳時代の地表面、あるいは古墳築造時に掘削を行ったもので、それ以下に古墳時代の人々の手が加わっていない最下層の土層を言う。このため、古墳築造以前の人々の痕跡が残されている可能性は残されている。

2号トレンチ（第4図、図版5-2）

石室天井石からは北西にあたる。外護列石の内側と外側あわせて19層に分層できた。14層から18層が古墳築造時に盛土された土層である。いずれも締まりはあるが堅緻ではなく版築された様子は見られない。

外護列石の外側は、2層から13層に分層される。13層まで掘り下げたのち、古墳の築造が行われたと考えられる。周溝の外側については、立ち上がりを確認できなかった。

3号トレンチ（第4図）

石室の中心となると考えられるところから4mほど間をおき、北側にトレンチを設定したが、石室の奥壁の後詰にあたる礫から外護列石までとなった。表土も含め、7層に分層できたが、このうち4・5層が石室から外護列石を覆う土層、6・7層が墳丘築造の際盛られた土層と考えられる。

4号トレンチ（第4図、図版6-1）

当初、外護列石のありそうな箇所を対象に北側の掘り下げを行ったが、確認できなかったため、石室側に向かって拡張をしていった。

外護列石の外側は13層に分層された。9層以下には、土師器・須恵器等の遺物が含まれる。石室と外護列石の間のうち、13～15層は墳丘築造時に盛土された土層であると考えられる。

5号トレンチ（第4図、図版6-2）

石室から南西に延びるトレンチで、石室と外護列石の間、外護列石の外側で、あわせて29層に分層している。

上層の4～9層は墳丘および外護列石の外側までを覆っており、外周や石室上の墳丘が流れ込んできた土層である。

石室と外護列石の間に見られた土層のうち、19～27層が古墳築造にかかわる土層で、いずれも硬くよく締まっている。最下層の27層には、わずかであるが、炭化物粒子も含まれている。18層は、古墳築造時に削平してあらわれた面と考えられる。

外護列石外側の10～18層は周溝に堆積した土層であるが、10～14層が外護列石の一部崩落にかかわる土層で、15層が外護列石下の土層の流出によるものと考えられるものである。12～16層からは、古墳時代の遺物が出土している。

6号トレンチ（第4図、図版6-3）

4号トレンチと5号トレンチの間に設定した。東側で外護列石と考えられる礫を検出したため、その西側を掘り下げていった。埋土は17層に分層できたが、このうち、16層が古墳築造時に削平され現れた面であると考えられる。

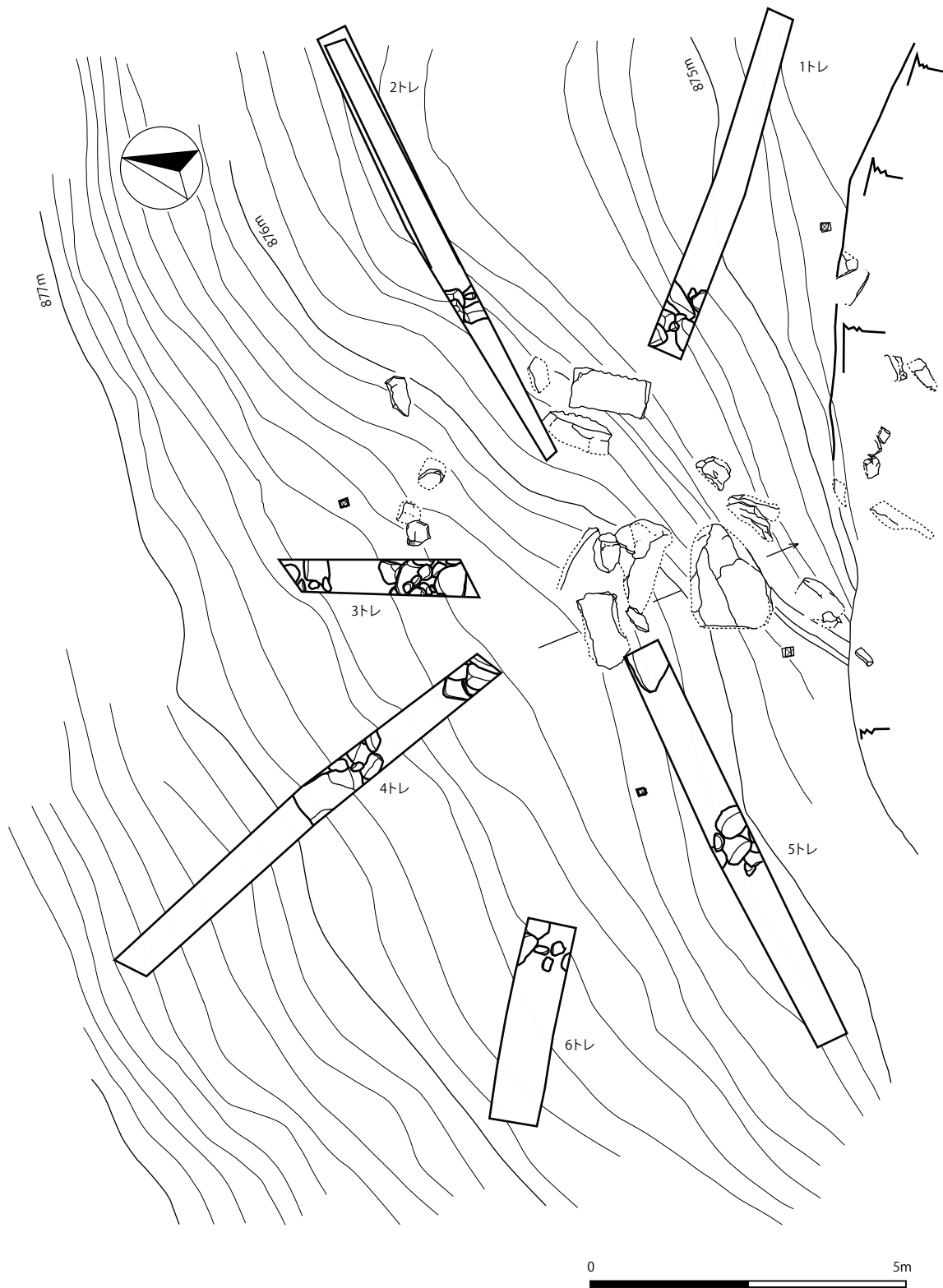
外護列石と考えた礫も、他のトレンチで検出される礫の積み方と異なっていることから、外護列石の一部が崩落したものである可能性もうかがえた。これについては、発掘調査時にやはり崩落した礫であることを確認している。

分層した土層のうち、9～11層からは、古墳時代の遺物が出土している（第11図-16）ことから、外護列石が崩落した時期がこれに近いことを示している。

今回の墓地造成地内には、本古墳の東側に、もう一個所花崗閃緑岩がまとまっている個所が認められた。こちらについても、古墳である可能性があると考えトレンチ調査を行ったが、古墳とは確認されなかった。

今回の試掘調査により、墓地造成用地のうち、古墳部分とその余地を含めた約360㎡が対象から外されることとなり、保存を目的とした発掘調査と古墳復元工事が行われることとなった。

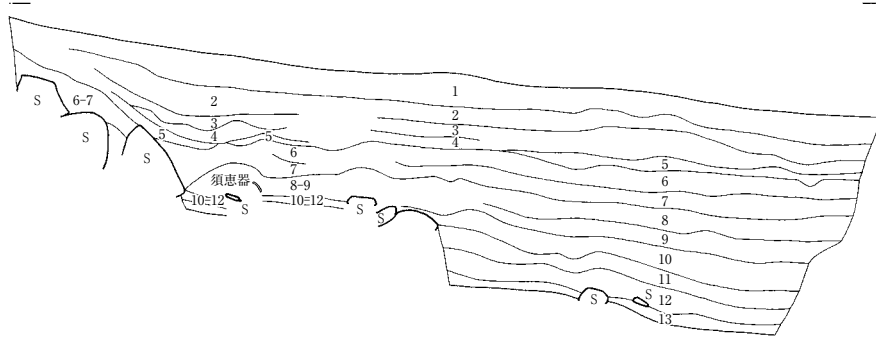
本古墳は、今回の公園墓地区画増設事業に伴い新たに発見された無名の古墳であり、試掘調査後「永明寺山古墳」と命名し、登録した。茅野市の遺跡台帳では、348番目となる。



第4図 永明寺山古墳の地形とトレンチ配置図 (1:100)

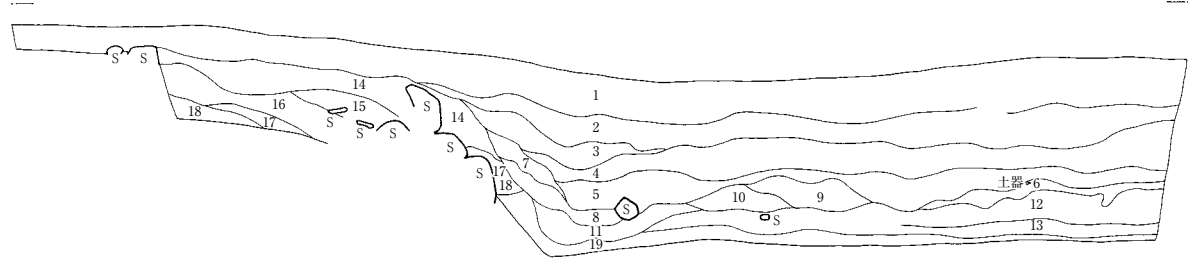
875.20

1 トレンチ北壁



876.00

2 トレンチ北壁



876.70

3 トレンチ西壁



1 トレンチ北壁

- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 表土、堅緻
- 2 10YR4/3黄褐色砂質土 粒子細かく締り弱い、1~5mm大の礫を大量に含む
- 3 10YR3/2黒褐色土~10YR3/3暗褐色土 粒子細かくシルト状、1~2mm大の礫を少量含む
- 4 10YR4/3黄褐色砂質土 粒子粗くあり均一でない、1~5mm大の礫を大量に含む
- 5 10YR4/3黄褐色砂質土~10YR3/3暗褐色土+10YR2/1黒色土の混在土層 1~5mm大の礫を少量含む
- 6 10YR2/1黒色土 堅く締りあるが堅緻でない、10YR4/3黄褐色砂質土塊および10YR3/3暗褐色土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大炭化物1%、1~5mm大の礫を大量に含む
- 7 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅緻でない、10YR4/3黄褐色砂質土塊および10YR3/3暗褐色砂質土塊1mm~1cm大15%、1~2mm大炭化物1%、1~5mm大の礫を少量含む
- 8 10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅緻でない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大15%、1~2mm大の礫を少量含む
- 9 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 8層よりも堅く締りあり、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大20%、1~2mm大の礫を少量含む
- 10 10YR2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大30%、1~5mm大の礫を大量に含む
- 11 10YR1.7/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大15%、1~2mm大の礫を少量含む
- 12 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅緻でない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大15%、1~5mm大の礫を大量に含む
- 13 10YR1.7/1黒色土 堅く締りあり、地山と考えられる、1~5mm大の礫を大量に含む

2 トレンチ北壁

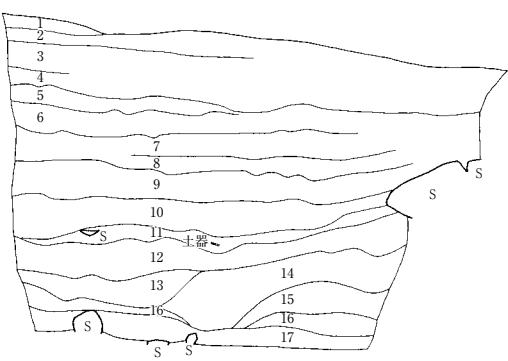
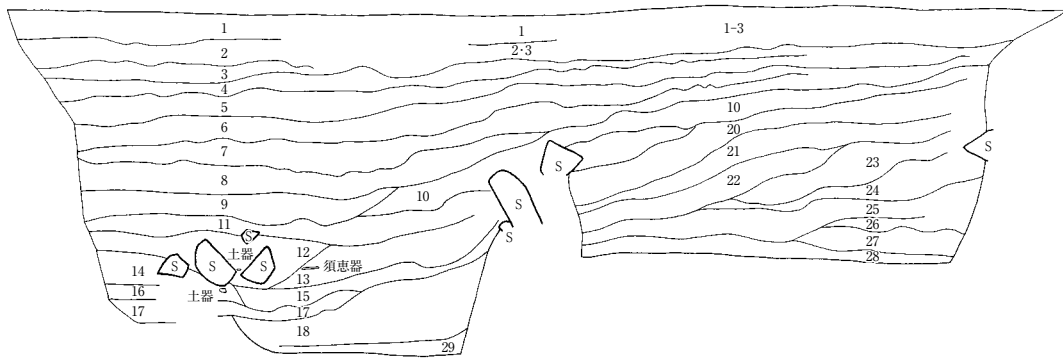
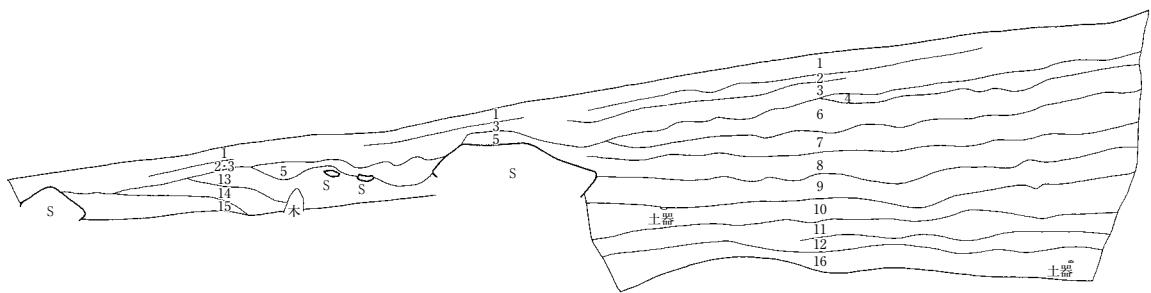
- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 表土、堅く締まる、1~7mm大の礫を大量に含む
- 2 10YR4/3黄褐色砂~10YR4/4褐色砂 1~5mm大の礫を大量に含む
- 3 10YR3/2黒褐色砂質土 粒子細かい、シルト状、水成堆積か、やや粘性あり、1~2mm大の礫を少量含む
- 4 10YR3/3暗褐色砂質土 粒子細かい、シルト状、水成堆積か、1~2cm大の礫を少量含む
- 5 10YR4/3黄褐色砂質土(シルト状)+10YR4/4褐色砂 2層に類似、1~5mm大の礫を大量に含む

- 6 10YR2/1黒色土に10YR4/3黄褐色砂質土が斑に混在する、1~2mm大の礫を少量含む
- 7 10YR3/1黒褐色土 粒子細かい、シルト状、粘性あり、1mm大の礫を少量含む
- 8 10YR2/2黒褐色土 粒子細かい、シルト状、粘性あり、粒子細かい黄褐色砂質土が斑に入る
- 9 10YR2/1黒色土に10YR4/3黄褐色砂質土(シルト状)塊1~2cm大が斑状に入る、1mm大の礫を少量含む
- 10 10YR2/2黒褐色土に10YR4/3黄褐色砂質土(シルト状)塊1~2cm大が斑状に入る、1mm大の礫を少量含む、炭化物1~5mm大1%
- 11 10YR2/1黒色土 粒子細かい、シルト状、粘性あり、1mm大の礫を少量含む、炭化物1~5mm大1%
- 12 10YR2/1黒色土 漆黒色土、締りあるが堅緻でない、1~5mm大の礫(黒褐色の細砂・白色砂粒)を大量に含む
- 13 10YR1.7/1黒色土 漆黒でない黒色土、1~5mm大の礫を大量に含む
- 14 10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅緻でない、地山土とみる漆黒の黒色土塊2~5cm大が斑に入る、1~2mm大の礫を少量含む
- 15 10YR2/1黒色土 締りあるが堅緻でない、1~2mm大の礫を少量含む
- 16 10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅緻でない、10YR4/3黄褐色砂質土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 17 10YR2/1黒色土 締りあるが堅緻でない、10YR3/3暗褐色土塊1mm~1cm大3%
- 18 10YR1.7/1黒色土 締りあるが堅緻でない、10YR3/3暗褐色土塊1mm~1cm大3%
- 19 10YR1.7/1黒色土 漆黒、堅く締りあり、1~5mm大の礫(花崗岩白色砂粒)を大量に含む

3 トレンチ西壁

- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 表土、堅緻
- 2 10YR4/3黄褐色砂質土~10YR3/3暗褐色砂質土
- 3 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR4/3黄褐色砂+10YR1.7/1黒色土 混在土、水成堆積か、1~2mm大の礫を少量含む
- 4 10YR2/2黒褐色土 堅いが堅緻でない、1~2mm大の礫を少量含む
- 5 10YR1.7/1黒色土 締りあるが堅緻でない、1~2mm大の礫を少量含む
- 6 10YR2/1黒色土+10YR3/2黒褐色土 堅いが堅緻でない、10YR4/3黄褐色砂質土塊および10YR3/3暗褐色砂質土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 7 10YR1.7/1黒色土+10YR2/2黒褐色土 混在土、1~2mm大の礫を少量含む

第5図 墳丘トレンチ土層断面図(1)(1・2・3トレンチ)(1:60)



- 10 10YR2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、墳丘盛土の崩落土とみられる、10YR3/3暗褐色土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 11 10YR2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、黄褐色土塊は墳丘に近いほど多い、黄褐色土塊1mm~1cm大15%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~1cm大15%、1~5mm大の礫を少量含む
- 12 10YR1.7/1黒色土 締りあり、古墳時代後期土器器坏出土、10YR3/3暗褐色土塊1mm~1.5cm大7%、1~5mm大の礫を少量含む
- 13 10YR1.7/1~2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、黄褐色土塊は墳丘に近いほど多い、黄褐色土塊1mm~1cm大15%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~1cm大15%、1~5mm大の礫を少量含む
- 14 10YR2/1黒色土 締りあるが堅くない、暗褐色土塊1mm~1cm大25%、1~5mm大の礫を少量含む
- 15 10YR2/2黒褐色土~10YR2/1黒色土 堅く締まる、11層に類似するが10YR4/3黄褐色土塊が多い、10YR4/3黄褐色土塊1mm~1cm大25%、1~5mm大の礫を少量含む
- 16 10YR1.7/1~2/1黒色土 堅いが堅緻でない、古墳時代後期土器器坏数点出土、暗褐色土塊1mm~1cm大15%、1~2mm大の礫を少量含む
- 17 10YR1.7/1黒色土 締りあるが堅くない、粒子細かい、1~2mm大の礫を少量含む
- 18 10YR2/2~3/2黒褐色土 全体的に堅緻、10YR4/3黄褐色土と10YR3/3暗褐色土が斑状、1~5mm大の礫を大量に含む
- 19 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅くない、10YR4/3黄褐色土塊1mm~1cm大15%、1~2mm大の礫を少量含む
- 20 10YR2/1黒色土 締りあるが堅緻でない、10YR4/3黄褐色土塊1mm~1cm大20%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~1cm大20%、1~2mm大の礫を少量含む
- 21 10YR2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、10YR4/3黄褐色土塊1mm~1.5cm大20%、1~2mm大の礫を少量含む
- 22 10YR2/2黒褐色土 12層より堅く締まり部分的に堅緻、10YR4/3黄褐色土塊1mm~1.5cm大15%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~5cm大10%、1~5mm大の礫を少量含む
- 23 10YR2/2黒褐色土 全体的に堅く締まる、10YR4/3黄褐色土塊1mm~2cm大25%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~1.5cm大20%、1~5mm大の礫を少量含む
- 24 10YR2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、10YR4/3黄褐色土塊1mm~1.5cm大15%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 25 10YR2/1黒色土+10YR4/3黄褐色土 全体に堅緻、1~2mm大の礫を少量含む
- 26 10YR1.7/1黒色土 堅緻、黄褐色土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 27 10YR1.7/1+2/1黒色土 堅緻、黄褐色土塊1mm~3cm大15%、炭化物1~5mm大以下、1~5mm大の礫を少量含む
- 28 10YR1.7/1黒色土 漆黒 1~5mm大の礫を大量に含む
- 29 10YR3/3暗褐色土 1~5mm大の礫を含む

4 トレンチ北壁

- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 表土、堅緻
- 2 10YR3/3暗褐色砂質土 粒子細かくシルト状
- 3 10YR4/3黄褐色砂+10YR3/3暗褐色砂質土 炭化物1~2mm大1%
- 4 10YR4/3黄褐色砂質土 水成堆積か
- 5 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR4/3黄褐色砂+10YR1.7/1黒色土 混在層、水成により4層と同時堆積か、1~2mm大の礫を少量含む
- 6 10YR3/2黒褐色土 締りあるが堅くない、墳丘近くに10YR4/3黄褐色砂質土塊1mm~1cm大15%、炭化物1~5mm大1%、1~2mm大の礫を少量含む
- 7 10YR2/2黒褐色土 堅く締りあり(特に墳丘近くが堅い)、墳丘近くに10YR4/3黄褐色砂質土塊または10YR3/3暗褐色砂質土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 8 10YR2/1黒色土 堅く締りあり(特に墳丘近くが堅い)、墳丘近くに10YR3/3暗褐色砂質土塊1mm~1cm大10%、1~5mm大の礫を少量含む
- 9 10YR1.7/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 墳丘から離れるに従い黒味弱くなる、墳丘近くは堅く締まりあり、墳丘近くに10YR4/3黄褐色砂質土塊および10YR3/3暗褐色砂質土塊1mm~1cm大20%、1~5mm大の礫を少量含む
- 10 10YR1.7/1黒色土 須恵器・土器器出土、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大10%
- 11 10YR1.7/1黒色土 堅く締りあるが堅緻でない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大10%、1~5mm大の礫を少量含む
- 12 10YR1.7/1~2/1黒色土 堅く締りあり、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大25%、1~5mm大の礫を少量含む
- 13 10YR2/2黒褐色土 10YR4/3黄褐色砂質土塊1mm~1cm大5%、1~2mm大の礫を少量含む
- 14 10YR1.7/1黒色土+10YR2/2黒褐色土 堅く締り所によって堅緻、10YR4/3黄褐色砂質土塊1mm~1cm大5%、1~2mm大の礫を少量含む
- 15 10YR2/1黒色土+10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅くない、黄褐色砂質土塊1mm~1.5cm大10%、1~5mm大の礫を少量含む

5 トレンチ北壁

- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 表土、堅緻
- 2 10YR4/3黄褐色砂質土 締りあるが堅くない、所によりシルト状細粒子あり、
- 3 10YR4/3黄褐色砂(粘性)+10YR3/3暗褐色砂質土 水成堆積か
- 4 10YR2/1黒色土 堅く締りあり、黄褐色砂および暗褐色砂塊1mm~1cm大10%、1~5mm大の礫を大量に含む
- 5 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅くない、黄褐色砂および暗褐色砂塊1mm~1cm大15%、1~5mm大の礫を少量含む、炭化物1~2mm大1%
- 6 10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅くない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大15%、1~5mm大の礫を少量含む、炭化物1~2mm大1%
- 7 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 8層より堅く締りあるが堅緻でない、暗褐色砂質土塊1mm~1cm大20%、1~2mm大の礫を少量含む
- 8 10YR2/1黒色土~10YR2/2黒褐色土 締りあるが堅くない、西側ほど黒味弱く10YR2/2黒褐色土となる、10YR3/3暗褐色土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む
- 9 10YR2/2黒褐色土~10YR2/1黒色土 堅く締まるが堅緻でない、黄褐色土塊は墳丘に近いほど多い、10YR3/3暗褐色土塊1mm~1cm大20%、10YR1.7/1黒色土塊1mm~1cm大10%、1~2mm大の礫を少量含む

第6図 墳丘トレンチ土層断面図(2)(4・5・6トレンチ)(1:60)

第2節 調査の組織

発掘調査は茅野市教育委員会事務局 文化財課および尖石縄文考古館が実施した。組織は下記のとおりである。

①調査主体者 教育長 牛山英彦

②事務局 生涯学習部長 小池冲麿（平成26年3月まで）
木川亮一（平成26年4月から）

③文化財課・尖石縄文考古館

鵜飼幸雄（文化財課長・尖石縄文考古館長 平成26年3月まで）

守矢昌文（文化財課長・尖石縄文考古館長 平成26年4月から）

小林深志（文化財係長）

小池岳史（考古館係長 平成26年4月から）・功刀 司（尖石史跡整備担当 平成27年7月31日まで）

山科 哲 大月三千代 塩澤恭輔 鵜飼幸雄

④調査担当 小池岳史・塩澤恭輔（試掘調査）

小林深志・塩澤恭輔（発掘調査）

小林深志・塩澤恭輔・鵜飼幸雄（整理作業・報告書作成）

⑤試掘・発掘調査参加者

補助員 牛山矩子 酒井みさを 大勝弘子 武居八千代 立岩貴江子

作業員 赤羽千雲 後藤信一 宮坂 功 柳沢省一

第3節 調査の経過

1 発掘調査

- 7月9日（火） 本日より本調査に入る。まず、重機により、古墳西側の外護列石の外側から表土剥ぎを行う。
- 7月10日（水） 石室の天井石を巻くように覆っているカラマツの根を取り除くため、チェーンソーでの除去を宮川建設に依頼し、根除去作業のために根を掘り出す作業を行う。
- 7月11日（木） 両角木材により、石室に係るカラマツの根の除去を行う。重機による表土剥ぎ終了。
- 7月12日（金） 石室の裏込めの礫を中心に、検出作業を行う。
- 7月18日（木） 本日より作業員はいる。
- 7月19日（金） 西側の外護列石の輪郭が確認できる。
- 7月23日（火） 外護列石の検出に努めると同時に、カラマツの根の除去を行う。
- 7月25日（木） 重機による東側の表土層除去及び廃土作業を行う。
- 7月26日（金） 作業員による掘り下げは中止し、重機による廃土作業を行う。
- 7月30日（火） 東側の外護列石の検出作業を行う。長野県立歴史館西山克己氏に来跡していただき、今後の調査方法について指導いただく。
- 7月31日（水） 石室入り口部分の清掃と写真撮影を行い、浮いた礫を取り除く作業を行う。外護列石の検出作業を行い、ほぼ終了する。教育長、生涯学習部長視察。
- 8月1日（木） 午後より市長・副市長の現地視察。
- 8月21日（水） ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行う。午後、石室内の掘り下げ。入り口部分と奥とが貫通となる。
- 8月22日（木） 石室北西隅より直刀出土。水晶製切子玉4点出土。鵜飼課長、市民課吉田課長来跡。
- 8月23日（金） 礫の補正測量。石室では、北西隅の直刀が2本となる。北西隅からも直刀が1点出土。
- 10月7日（月） 現地説明会と石室内三次元測量のため一旦調査を中断する。
- 10月10日（木） 現地説明会に先立ち、報道向けに説明会を開催する。

- 10月19日（土） 現地説明会を開催し、100名を超える参加。
- 10月25日（金） 古墳出土の直刀6本について、X線写真を撮影するため、長野県立歴史館へ。鏝2個と切羽1個に象嵌のあることを確認する。
- 10月28日（月） 本日より、石室内三次元測量を開始。11月1日（金）まで。
- 11月7日（木） 古墳出土の鏝の象嵌について、記者発表を行う。
- 11月20日（水） 本日より復元工事のために、古墳天井石を外す作業に入る。その後東側側壁外側の掘削を行ったところ、側壁は、厚さ30～40cm程の平板の礫を立てて使用しており、外側からの土圧により内側に張り出してしまっていることが分かった。当初は、天井石を外して一番上の段だけを積み直す作業を計画していたが、石室内へ張り出している礫が内側へ崩落する危険があることから、側壁に使用しているすべての礫を積み直すこととする。
- 11月27日（水） 前底部に崩落していた天井石を除去したため、掘り下げを行い、若干の遺物の採集を行う。入り口付近より、須恵器片の他、耳環が1点出土する。
- 11月28日（木） 復元した石室に天井石を載せる作業を行う。

2 遺物の保存修理

永明寺山古墳からは、土師器や須恵器などのほか、直刀や刀子、鉄鏃をはじめとする武器、辻金具などの馬具等多くの金属製品が出土している。また、装身具では、勾玉、水晶切子玉、白玉、ガラス玉の他に金環等も出土している。

遺物の取上の過程で、直刀は非常に保存状態がよく、しっかりしていることが観察された。また、鏝には銀糸と思われるものが見られたため、象嵌のある可能性が考えられた。そこで、今後の保存処理の方法を指導してもらうため、10月25日には長野県立歴史館に直刀6本を持ち込み、エックス線写真の撮影をお願いした。すると、直刀は、鏃はかなり出ているものの、非常に残りがよいこと、鏝3点について、象嵌のあることが判明した。

最も出土が多かった鉄鏃は、束ねて副葬したままの状態であるのか、数本から十数本がまとまっており、浮き出た鏃によって接合したような状態で出土した。そのため、一本一本に別々の遺物番号を付して、取り上げることができない状態であった。

また、辻金具や鉾付金具は、金銅装が施されている個所が見受けられ、そこに緑青が浮き出ている状態で出土した。

これらの金属製品については、平成26年度になって、国庫補助金を得て、株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託し、一部については、実測図作成と写真撮影も併せて委託した。保存処理に当たっては、象嵌部分の研ぎ出しも行うこととし、委託事業の保存処理の仕様に、象嵌の研ぎ出しについても加えることとした。

また、金環類については、調査を行った平成25年度中に、市単独事業として株式会社文化財ユニオンに保存処理を委託し、完了している。

3 成果の公開と普及活動

—平成25年—

10月19日（土） 市民対象の現地説明会。

11月7日（木） 直刀銀象嵌について、記者発表。

—平成26年—

1月25日（土） 尖石縄文考古館ロビーにて、『永明寺山古墳速報展』。2月23日まで。

2月11日（火） 諏訪考古学研究会遺跡調査研究発表会にて永明寺山古墳について事例発表。

2月21日（金） 長野県埋蔵文化財センター「信州の遺跡」第4号内で最新の古墳時代発掘調査事例として紹介。

- 4月12日（土） 永明寺山ふれあいの森を創る会総会にて調査成果発表。
 - 4月22日（火） 市長、副市長、古墳見学。
 - 5月9日（金） 明小学校6年4部社会科授業支援として解説。
 - 5月16日（金） 永明中学校2年3部社会科授業支援として解説。
 - 5月19日（月） 市議会全員協議会、古墳見学。
 - 5月24日（土） 長野県考古学会総会にて遺跡報告事例として発表。
 - 6月5日（木） 永明小学校6年1部課外授業支援として解説。
 - 7月6日（日） 墓地見学会に合わせ、市民対象の古墳見学会。
- 平成27年—
- 4月17日（金） 八ヶ岳総合博物館にて、企画展『永明寺山古墳展』。保存処理を終えて当時に近い状態となった刀や鉄鍬といった鉄製品と調査の様子を展示。6月28日まで。
 - 5月9日（土） 八ヶ岳総合博物館にて、企画展に伴う発掘調査担当者によるギャラリートーク開催。

4 古墳の復元

試掘調査の段階で、調査終了後に古墳を復元することとなった。その復元工事の設計には、予算積算段階で、周辺がすでに墓地として造成されていることや、当地の土質が砂質で、乾燥しているときには非常に固くよく締まっているが、一旦水分を含むと非常に柔らかくなり、流れ出しやすいことを考慮し、石積みを多用し、下段の墓地に土砂を流出させないことに重点を置いた設計とした。

発掘調査の所見では、外護列石のレベルが斜面の傾斜に沿って石室開口部と奥壁側とでは2mほどの高低差があることから、周溝といっても全周するものではなく、開口部の左右に向けて墳丘や斜面に降り注いだ雨水が斜面下に流れる構造となっていたと考えられた。

古墳の復元設計にあたっては、設計を茅野市建設課に依頼したが、その設計のための詳細地形測量を株式会社嶺水茅野支店に委託した。また、復元工事にあたっては、周囲の墓地造成がすでに始まっていたため、土砂の搬入・搬出や石室の復元に造成工事の重機を共有することで費用の削減に努めるため、その施工業者である株式会社カネトモと随意契約を締結した。

石室天井石より上の墳丘がすでに流出してしまっていることや、周辺がすでに墓地として造成されており周溝の外周が不明であることなどから、築造当時の形をそのまま復元することは不可能で、当地にこのような形の古墳があったというイメージでの復元とした。

古墳の復元にあたっては、重機を用いて一旦天井石を外し、側壁として積まれた礫も積み直すこととした。

一部、天井石が割られて持ち出された部分については、墓地の造成工事で大量に出る礫の中から適したものを利用することとした。

側壁として使用されている礫は、奥壁脇の上段に用いられていた礫が、横積みした状態で検出されたため、他の礫も同様の積み方をしていると思われたが、石室の解体作業を行ってみると、礫を縦に積んでいるものが多かった。発掘作業中、側壁の中ほどのところが石室内側に張り出して、横断面がX字状になっていたが、これは復元時の解体作業で外側からの土圧で張り出したものであったことが分かった。こうした礫を積み直し、側壁外側にコンクリートを流し込むことによって、崩落防止とした。

墳丘の高さについては、外護列石の外周から石室天井石を覆うように土盛りをし、自然な傾斜を持つように設計したところ、天井石の上部から2mの高さとなった。墳丘頂部までは、石室開口部から4.4m、奥壁側の外護列石下からの高さは、2.4mの高さとなる。

外護列石が築造当時、表面に現れていたかどうかについては、試掘調査のトレンチ断面からは判断ができなかったが、崩落を防ぐため、土で覆うこととした。公開にあたり、案内板を設置したが、外護列石があることがわかるよう、調査時の外護列石が現れた状態で行った空中写真測量の撮影写真で示した。

石室開口部は、閉塞石でふさぐことなく、石室内を観察できるようにしたが、天井石の落下を防ぐとともに、石室内に立ち入らないようにするため、ステンレスの枠に門扉を取り付け、施錠をすることとし、必要に応じて中に入れるようにした。

復元した古墳の外周と周辺は、土砂の流出を防ぐため、芝貼りとした。

第3章 古墳の構造と遺物の出土状況

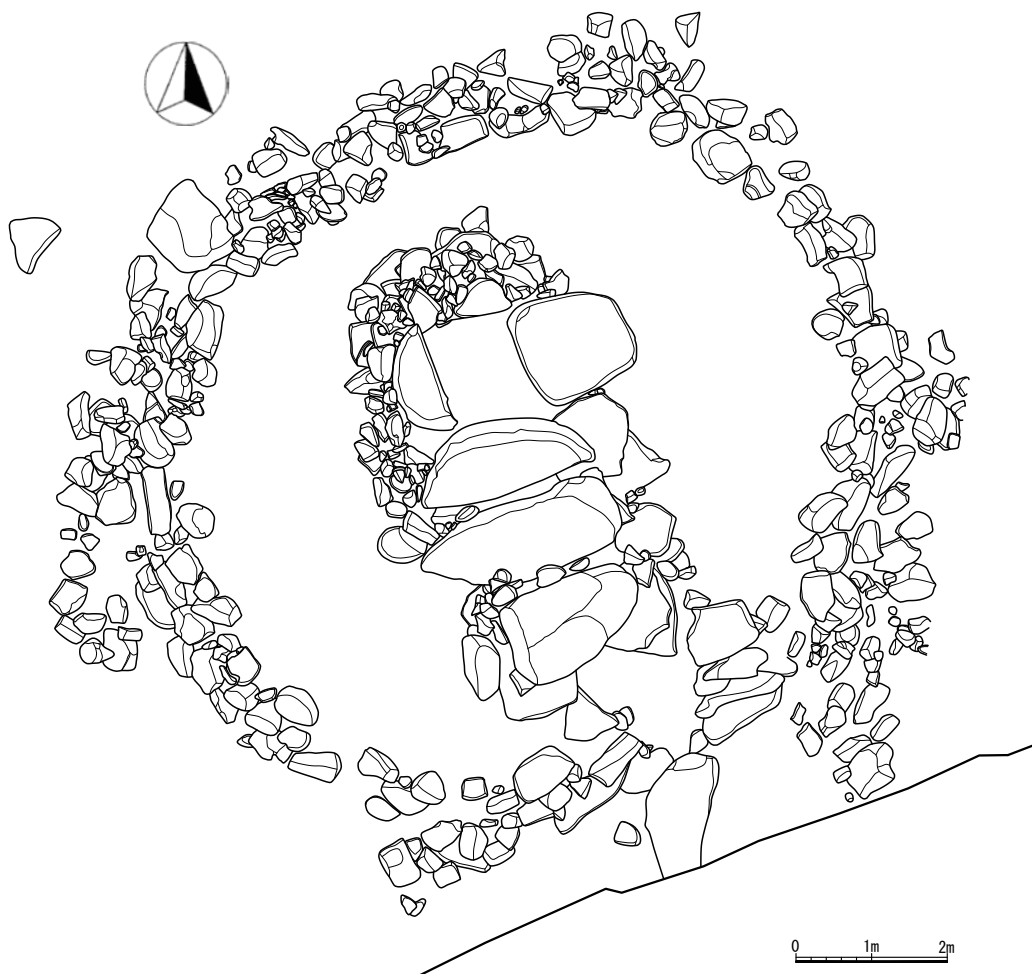
第1節 古墳の構造

1 墳丘・外護列石・周溝（第7図）

石室外側に盛られた土は、何層かに分層できる、それぞれよく締まっているが、たたきしめたような状態でなく、いわゆる版築が行われていた様子は見受けられない。墳丘の外周に積まれた外護列石から、径10mほどの円墳になると考えられる。墳丘の高さは、石室の上部が流出しており、推測するしかないが、石室を覆い、屈曲しない円墳を想定すると、石室の天井部から、さらに2mほど高くなると考えられる。

墳丘の高さは、石室開口部底面からは、4.4m、奥壁側外護列石下部からは2.4mほどとなる。

外護列石は、周溝に崩落した礫の量を見ても1m足らずである。墳丘全体を覆うような、葺石はない。外護列石のレベルを見ても、斜面上部と開口部付近とは2mほどの高低差があるので、斜面の自然地形を利用しながら墳丘を形作り、外周の土を盛り上げていったと考えられる。



第7図 永明寺山古墳平面図（1:100）

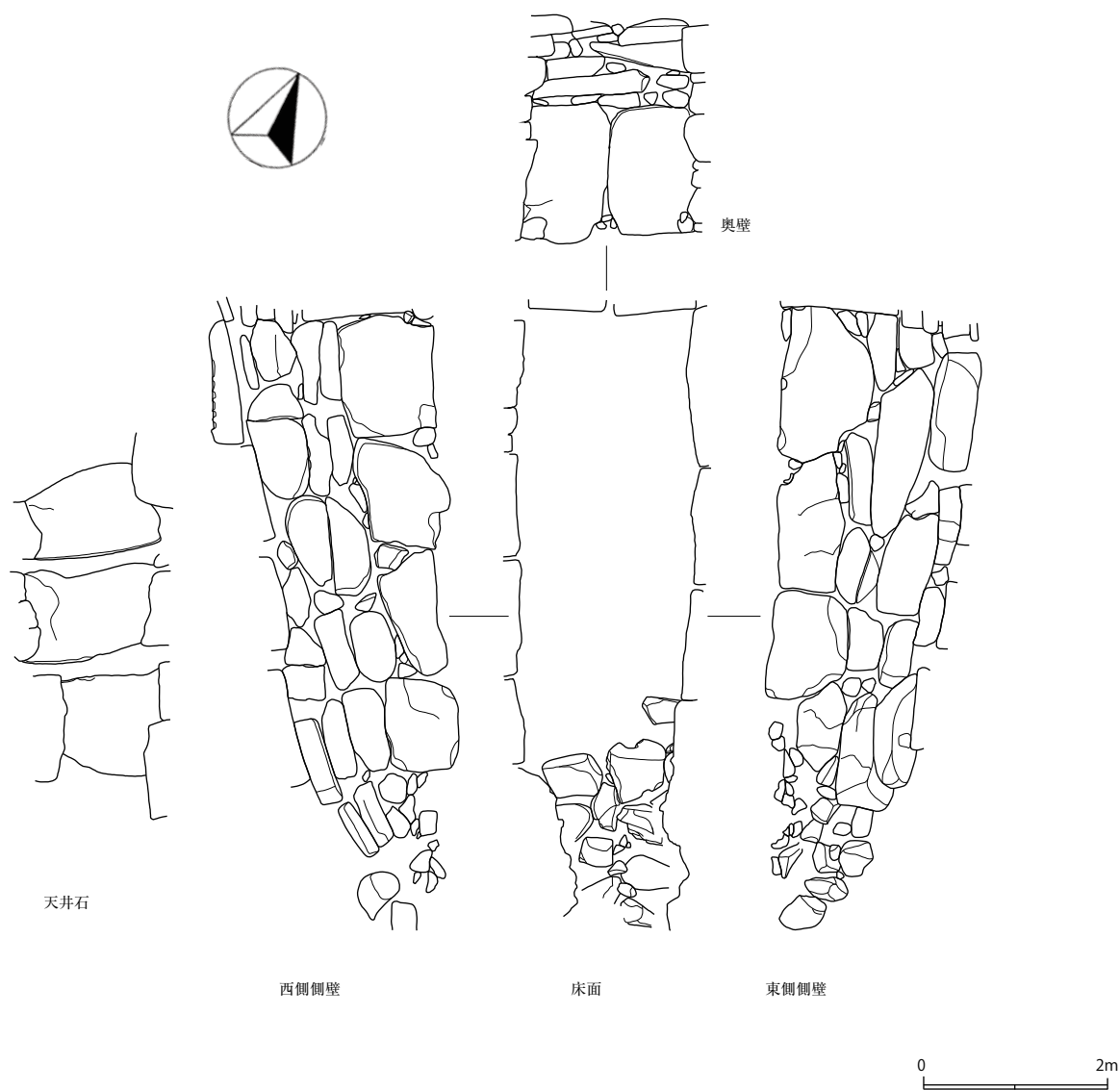
斜面に築造されたため、斜面上部と両側は自然と周溝のように溝ができていったと考えられるが、斜面下部である開口部側は墳丘や周辺からの雨水が周溝を伝って斜面下方に流れるようになっていたものと考えられる。既に周囲が墓地として造成されており、周溝の外周がどこまであったかは、トレンチ調査では確認できなかった。

2 石室構造 (第8図)

石室は、開口部から羨道を経て玄室に入るまでは北西に進むが、玄室はやや北に向きをかえ北北西となる。石室内から外を眺めると、羨道の先に遠く富士山を認めることができる。古墳築造時にこうしたことを意識したのか、地形的な制約から偶然こうなったのかは、不明である。

玄室部分の規模は、横幅が入口部で1.6m、奥壁側で1.8mある。玄室の奥行きは5.2mを測る。

奥壁は、石室底面から1.4mほどある大きな礫を縦に2枚並べて置き、その上部には厚さ20cmほどの平たい礫を4段ほど積み、その間を小礫で埋めている。石室底面の敷石を検出することを目的にさらに20cmほど掘り下げたが、奥壁におかれた直刀の下部が、本来の石室の底面であったのであろう。調査時点での石室の高さは、奥壁側で2.2mあるが、底面の敷石を検出しようとして掘り下げた部分もあるので、築造当時は2mほどの高さで



第8図 永明寺山古墳石室平面・側面図 (1:80)

あったと考えられる。玄室の入り口付近の高さは1.6mである。

側壁は、奥壁東側の天井石を載せたと考えられる礫が大きな礫を平積みしていたため、すべての側壁の礫がそのような礫を配置していると考えていたが、古墳復元のため、天井石を外し、側壁の外側を見ると、1.5～2.0mほどある礫が下部に積まれているが、厚さは50cm未満と薄く、後詰の礫も少なかった。そのため、墳丘の土圧で石室側に礫が押し出された状態となっていた。

天井石は、長さ2.5m～3m、幅1mほどの大きな礫を側壁に渡してある。平らな面を石室内側としているが、上部は平らでない。また、最も奥に乗せられていた礫は、割られて持ち出されていた。この持ち出された礫を含め、玄室は4枚の礫で構成されていたと考えられる。また、羨道部分に天井石は認められないが、開口部の下に長さ1.6mほどの大きさの礫があるので、これが羨道部分に乗っていたもので、崩落したのではないかと考えられる。羨道の規模は、外護列石の外側までと考えると、長さが約2mで、幅は1.2mである。

石室内部は、奥壁側の天井石が持ち出され、羨道部分の天井石も崩落していたため、ここより土砂が流入し、石室の天井部にまで達していた。当地は、調査前はアカマツ林となっていたが、こうした天井石のないところや、天井石の隙間からアカマツの根が侵入し、天井石の隙間をさらに広げていったものと考えられる。

本古墳底面には、敷石は施されていなかった。稀に20センチを超える礫がほぼ同レベルで検出されたが、この礫より低いところでも遺物が出土していることから、天井石や側壁に詰めてあった礫が落下したのと考えられる。

第2節 石室内遺物出土状況

本古墳は石室に大きな崩れがなかったため、墳丘及び石室内からは多数の須恵器・土師器、直刀や鉄鏃、馬具類の鉄製品、玉類の装飾品などの遺物が出土した（第9図）。

墳丘部では外護列石外を中心に土師器坏や須恵器甕、瓶、高坏などが多数出土している。正確な出土地点の記録を取っていないため明確には言えないが、石室開口部に近い場所からは須恵器瓶や高坏が集中しているように思われる。

石室内からはいくつかのまとまりを持ちながら、ほぼ全面に遺物の出土が見られた。

土器類は東側壁下と開口部から6点の須恵器・土師器が出土している。東側壁に位置する須恵器フラスコ瓶（土器13）と壺（土器8）は5号刀と隣接しており、開口部に位置する3点の内の土師器坏（土器3）は閉塞石と閉塞石に挟まれるように出土した。他2点の須恵器坏蓋（土器6）と土師器小壺（土器1）は、小壺が坏身として使われた蓋坏の中に正位で入った状態で閉塞石の上から出土した。中でも開口部側で6号刀の西で出土した土師器坏（土器2）は石室内出土の遺物の中で最も高いレベルで出土している。

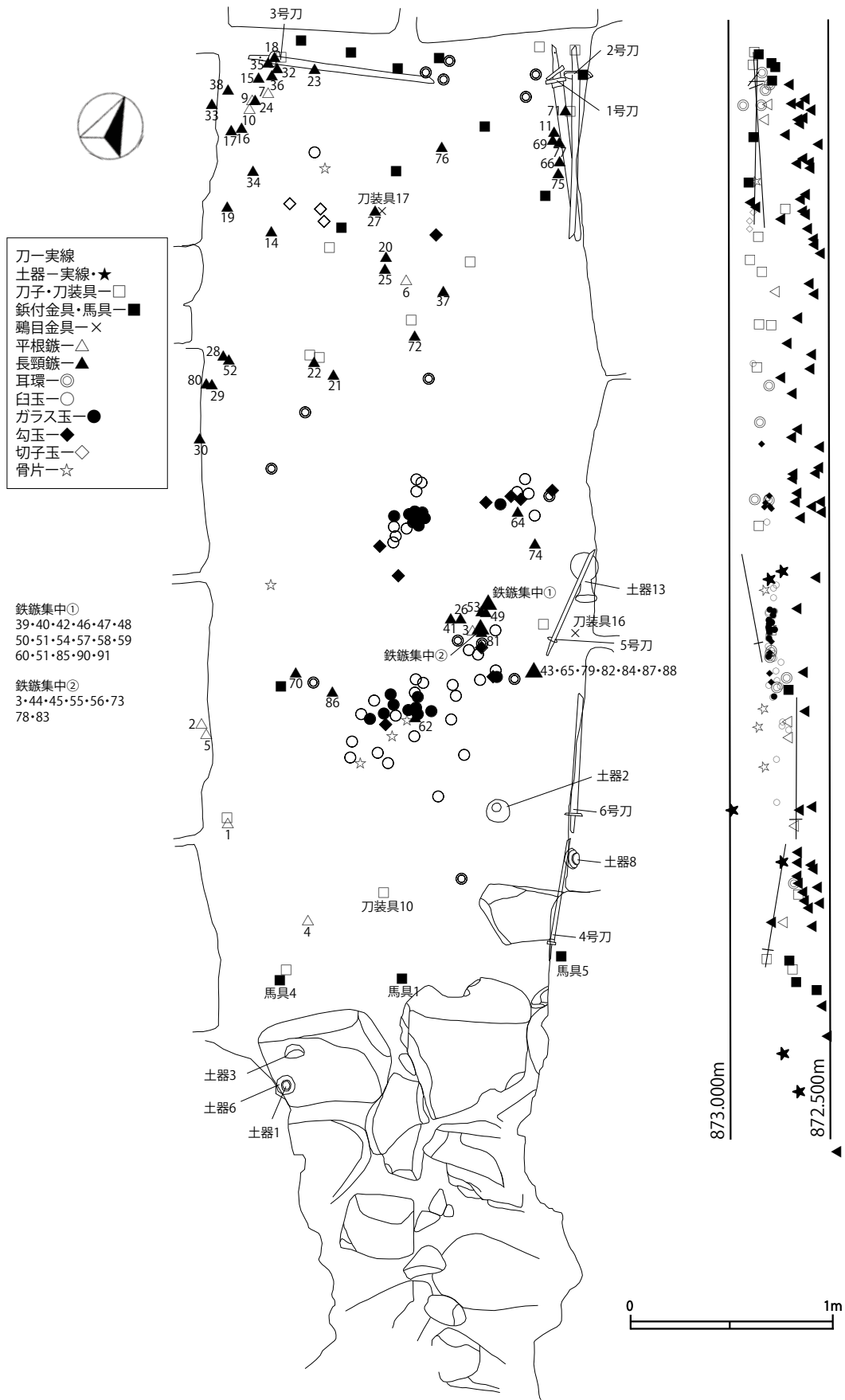
武器類は判別できたもので直刀6本と刀装具、刀子17点、鉄鏃の平根鏃10点、尖根鏃106点が出土している。

直刀6本の内奥壁に沿うように1本（3号刀）と、その東側壁下に2本（1・2号刀）が隣接するように位置しているほか、3本（4・5・6号刀）が東側壁下で位置をずらしながら置かれている。奥壁側で重なった直刀（1・2号刀）は2本とも象嵌による装飾が施されていた。本古墳からの象嵌装飾はこの2本のみである。

刀装具は僅かながら出土している。直刀の鏢はすべて外されることなく直刀と一緒に付属されている。特徴的なものとして金銅製の鷓目金具2点が出土しており、ひとつは5号刀のすぐ近く、もうひとつは石室中央で奥壁から約1mに位置する。また、柄頭金具とみられるものは石室中央で奥壁から約1.5mに位置する。いずれも遺物としては装飾大刀の刀装具であり、馬具類同様に石室内に散在している。

鉄鏃は一部にまとまったの出土が見られるが、多くは点在している。平根族は奥壁東隅に3点、中央付近に1点ずつ2点、開口部側西寄りに4点が位置する。第4章第1節の鉄鏃の形態分類では、I類A～H、II A類に分けて説明しており、出土点数は少ないものの、出土地点による大まかなまとまりの傾向を掴むことができる。

尖根鏃については型式ごとで捉えると、両刃A1は奥壁西隅にややまとまりが見られ、その周辺に散在しているものの、石室中央までは広がらない。両刃A2についても奥壁から約2mの西側に3点が近い距離で位置して



第9図 永明寺山古墳石室内遺物出土状況図(1:30)

いるほかは、奥壁西隅に1点と奥壁から1mの中央の位置に1点である。両刃B1は2点のみで、西側壁近くの奥壁から約0.5mに位置し、両刃B2は奥壁西隅と東側側壁の奥壁から約3mの5号刀近く（鉄鍬集中箇所）の2地点に集中している。両刃B3の4点は鉄鍬集中箇所の一部をなすものである。両刃Cの12点も鉄鍬集中箇所に10点が集中し、他2点は西側壁側と中央付近の奥壁から3.5mに1点ずつである。片刃A1の1点は奥壁東側の直刀2本近くからの出土であり、片刃A2の1点は東側壁側で奥壁から約3mの鉄鍬集中箇所の近くに位置する。片刃Bの9点はまとまりとして捉えるのが難しく、奥壁東側の直刀2本周辺から中央部の鉄鍬集中箇所を含む範囲に分布している。片刃C1の3点は奥壁東側の直刀2本周辺、及び鉄鍬集中箇所とその周辺に位置する。片刃C2の12点は9点が鉄鍬集中箇所とその周辺にあり、ほかの3点はやや離れて分布する。そのうちの1点は両刃A2の3点の近くに位置する。鉄鍬集中箇所では平根鍬IC、尖根鍬両刃B2・B3・C・D、尖根鍬片刃A2・B・C1・C2が混在している。この鉄鍬集中箇所から出土した鉄鍬はほとんどが同一の向きで揃っていることから、鞆といった収納袋にまとめて副葬された可能性が考えられる。

馬具は少ないが、絞具と辻金具は奥壁から3～5m離れた開口部側に分布する。それに対して鉾付金具は1点が開口部付近に位置するほかは、奥壁部の壁下を中心に奥壁より1m以内に位置する。

装飾玉類については、石室内のほぼ全面から出土している。耳環は17点出土し奥壁から開口部付近まで広く分布している。また、玉類も全体に分布するが、細かく見ると、切子玉3点が奥壁から約1mの中央西側にまとまって分布する。当古墳からの切子玉はこの3点のみである。白玉とガラス玉、勾玉は奥壁から2～3.5mの範囲にまとまって分布し、分布の無い場所には5号刀が副葬された被葬者の存在を推定することができる。

その他、奥壁から3.5mの石室中央から砥石と見られる石製品が出土している。

なお、図9の石室内出土遺物平面図と断面図については、平面図は遺物が判断・特定できたものの地点を落としているが、断面図については遺物の破片も1点としているため、平面図と整合しない箇所がある。

第4章 出土遺物

第1節 土師器・須恵器

1 石室内出土土器（第10図、図版14）

石室内からは土師器小壺・坏、須恵器蓋坏・短頸壺・フラスコ瓶の計6点が出土した。

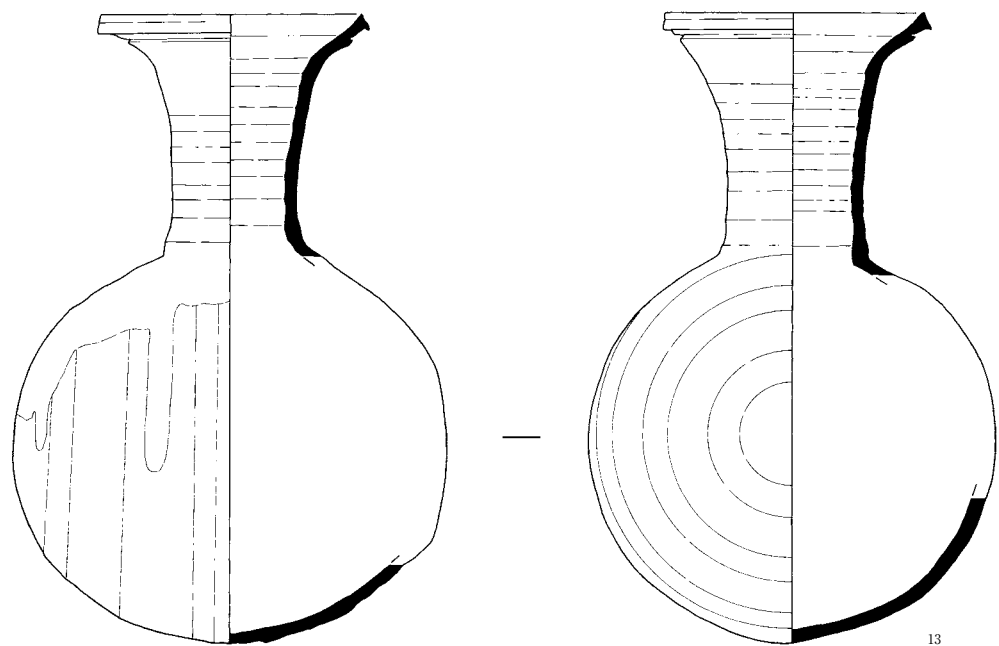
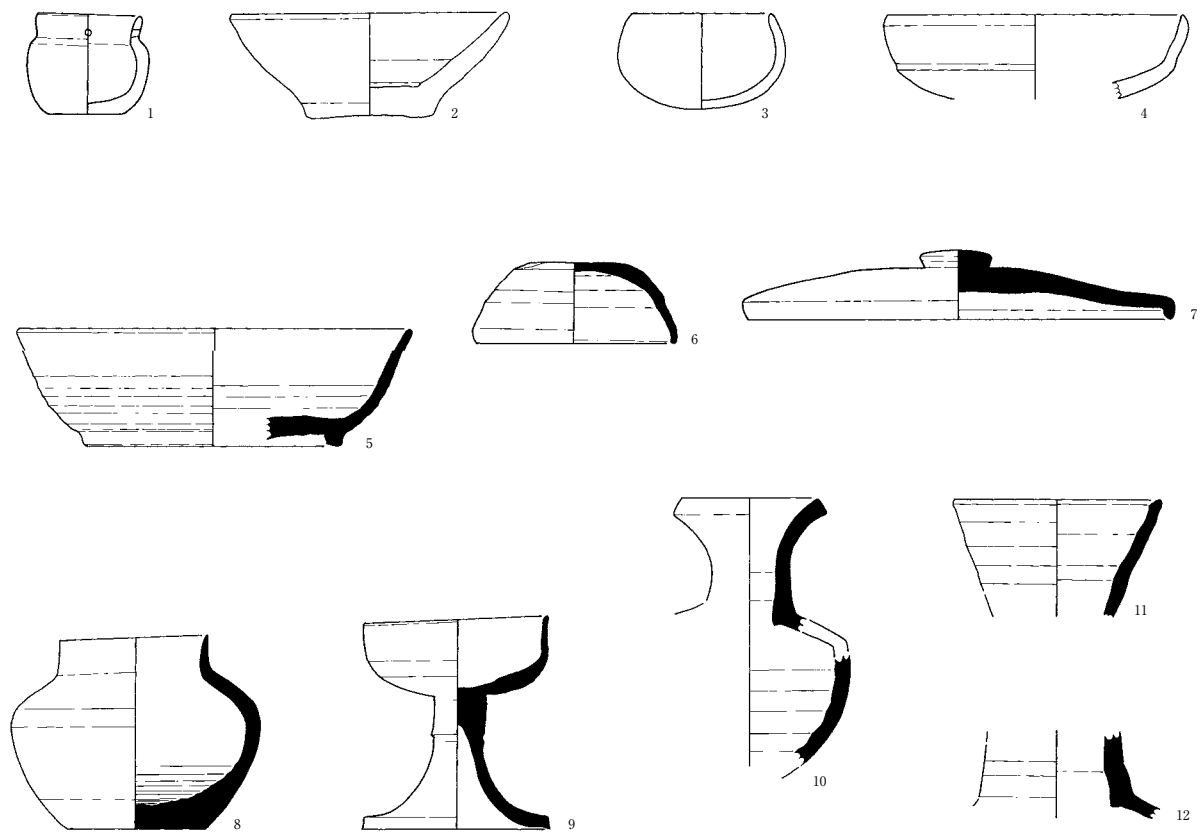
1は土師器の完形の小壺である。口径4.0cm、器高4.0cmと小さい。頸部に若干のくびれを持ち、小型甕のような形をしている。頸部に3mm程の穴がほぼ一直線上に2箇所あけられている。内外面にナデ調整と内面底部へのヘラ調整が施される。内外両面に煤が付着し、内面にはタール状の付着物が残り、口縁端部には光沢が見える。開口部で6の蓋坏とセットで出土した。時期は不明。

2・3は土師器坏である。2は完形で、口径10.8cm、器高4.1cmを測り、底部がやや厚く、底部からやや外反しながら直線的に開く。ロクロヘラ調整が施され、外面は最後に所々ナデ調整が施し、底部はロクロ糸切りを行っている。外面を中心に墨書のような痕が見られるが薄く、判断できない。文字ではないように見える。石室内の最も高いレベルで出土している。平安期のものと推定される。

3はほぼ完形で、口径5.4cm、器高3.8cmを測り、体部は丸みを持ち内湾し、底部は丸底である。ロクロナデ調整がされ、底部をヘラ削りした後、外面に丁寧な横ナデ調整をしていると思われる。部分的に煤が付着し、一部焼成後の被熱、もしくは錆に接していたような痕が見られる。石室開口部の閉塞石に挟まった状態で見つかった。時期は不明。

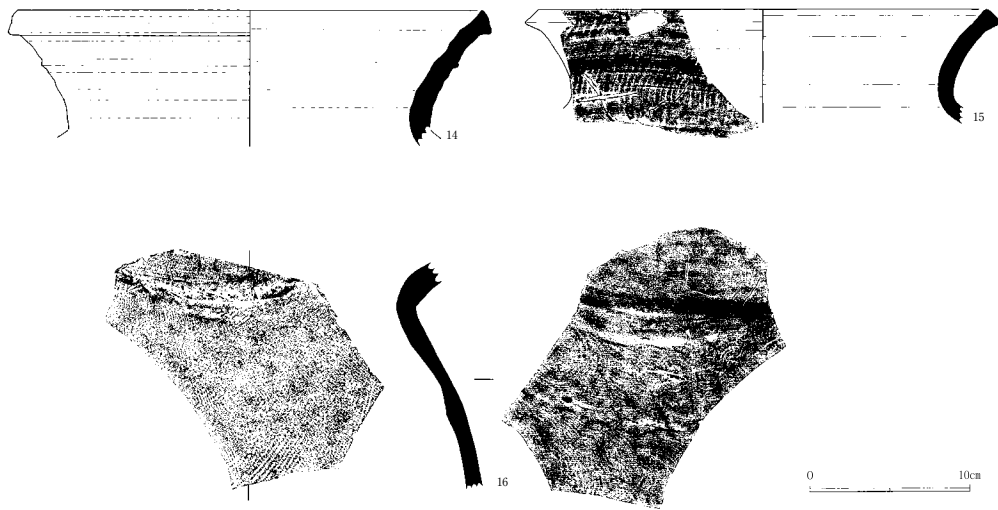
6は須恵器蓋坏の完形で、口径7.8cm、器高3.2cmを測る。内湾気味に開く器形でロクロナデ調整とヘラ削りの後、底部をナデ調整している。濃い灰色を呈しており、湖西方面でつくられたと思われる。石室内開口部の閉塞石の上に置かれており、1の小壺が入った状態で見つかった。時期は7世紀第2四半期～中頃と考えられる。

8は須恵器短頸壺の完形で、口径5.8cm、器高7.6cm、最大径9.8cmを測る。肩部に最大径を持ち、短い口縁部



0 10cm

第10図 土師器・須恵器 (1:3)



第11図 須恵器 (1:4)

はやや外反し、端部は先端に向かって細くなる。内面をロクロヘラ調整、外面をロクロナデ調整し、底部はロクロヘラ削りを施している。肩部と内面に自然釉が濃く現れている。4号刀の上に接するくらい近距離で出土した。時期は不明。

13は須恵器フラスコ瓶のほぼ完形で、口径10.2cm、器高24.8cmを測る。口縁端部外面を中央が窪むように下方につまみ出している。強いナデにより段部を形成し、段部上端に1条の沈線が加わる。頸部は口縁に向かって直線的に開き、段部近くでハ字状に開く。胴部は俵状で丸みを帯び、底部は球状を呈する。ロクロナデ調整が施され、口縁から肩部にかけて緑色の自然釉が現れる。石室内で5号刀に立て掛けられ、口縁が割れた状態で出土した。明るめの灰色を呈しており、胎土などから湖西方面でつくられたと考えられる。高橋氏の研究(高橋2011)を参考にすると、時期は7世紀半ばから後半と考えられる。

2 墳丘及び外護列石外出土土器 (第10・11図、図版14)

土器類は墳丘から出土したもののほとんどが破片で、全体像が不明なものも多く、特徴的な土師器環、須恵器環・蓋・高坏・甕を図示した。図示以外にも墳丘及び外護列石外からは整理箱1箱分の土器片が出土しているが、その多くが須恵器甕である。また、瓶類とみられる頸部が他の器種に比べて数量が目立つ。

4は土師器環の破片で、口径5.8cmと推定され、器高は残存部分で3.3cmを測る。有稜の坏で口縁は僅かに内湾し、稜下部は丸みを持ったまま丸底の底部へ続くと思われる。ロクロナデ調整と底部ヘラ削りの後、外面稜下部をナデ調整している。内外面とも赤彩が施される。外護列石の外から出土した。古墳時代後期の鬼高期のものと思われる。

5は須恵器高台坏である。破片から口径15.6cmと推定され、器高は4.6cmを測る。口縁がやや外湾し、腰部内外面に稜を持つ。底部は厚く、高台は台形を呈する。ロクロナデ調整が施され、底部はロクロから切り離れた後、丁寧にナデ調整している。前庭部付近から出土した。時期は7世紀後半(7世紀第4四半期)とみられる。

7は須恵器蓋で破片から口径16.4cmと推定され、器高は2.7cmを測る。偏平な宝珠を持ち、わずかに内湾しながら緩やかに口縁に向かう。先端部は丸みを帯びている。ロクロナデが施され、天井部は宝珠の周りのみヘラ調整がされる。前庭部付近から出土した。時期は8世紀代と推定される。

9はほぼ完形の須恵器高坏で、口径7.2cm、器高8.4cm、脚部最大径7.4cmを測る。坏部はやや内湾しながら丸みを保ったまま脚部に向かう。脚部中央には沈線が1条めぐり、脚部の形状はハ字状に広がり、端部がやや下方につまみ出される。ロクロナデ調整の後、口縁にナデ調整を加えている。外護列石外から出土した。明るめの灰

色を呈しており、胎土などから湖西方面でつくられたと考えられる。時期は不明。

10は須恵器平瓶で、破片から口径5.7cm、器高が残存部分で10.5cmを測る。頸部から口縁に向かって外湾し、端部は外反する。胴部は丸みを持ち、肩をやや張り出す形になるとみられる。ロクロナデ調整が施され、全体に緑色の自然釉が現れている。外護列石外から出土している。時期は不明。

11・12は須恵器瓶とみられる。11は口縁部で、口径8.1cmと推定され、器高は残存部分4.6cmを測る。頸部から口縁に向かって直線的に開き、端部はやや丸みを帯びる。ロクロナデ調整が施される。口縁部内側付近に薄い緑色の自然釉が付着する。護列石外から出土している。時期は不明。

12は頸部である。ロクロナデ調整、接合部分はロクロヘラ調整が施されている。外護列石外から出土している。時期は不明。

14～16は須恵器甕の破片である。14は口縁部で口径29.0cmと推定され、器高は残存部分7.4cmを測る。頸部はハ字状に開きながら外反し、端部が肥厚する。頸部と胴部の間で割れており、頸部は短めとなるとみられる。ロクロナデ調整が施され、内面には薄らと自然釉が現れている。試掘調査時のトレンチ内、外護列石外から出土した。

15は口縁部で、口径28.0cmと推定され、器高は残存部分7.1cmを測る。頸部はハ字状に開きながら外反する。14と同様に頸部と胴部の間で割れており、頸部は短いとみられる。内面はロクロナデ調整、外面はロクロヘラ調整が施され、外面は最後に横方向のナデ調整をしている。頸部に「×」のような刻書が入る。外護列石外から出土したものである。

16は頸部から胴部である。頸部は厚みを持たせ、胴部は緩やかに丸みを帯びて底部へ向かう。頸部はロクロナデ調整が施される。胴部内面は直径約3.6cmの同心円文、外面は平行タタキが重ならないように方向を変えて施される。頸部から体部にかけては自然釉が現れている。試掘調査時のトレンチ内および発掘調査時の外護列石外から出土したものである。14～16の時期はおおよそ古墳後期と推定される。

第2節 武器

1 直刀（第12図1～第14図9、図版15～18）

直刀は6本と身の残片と思われるものが3点ある。

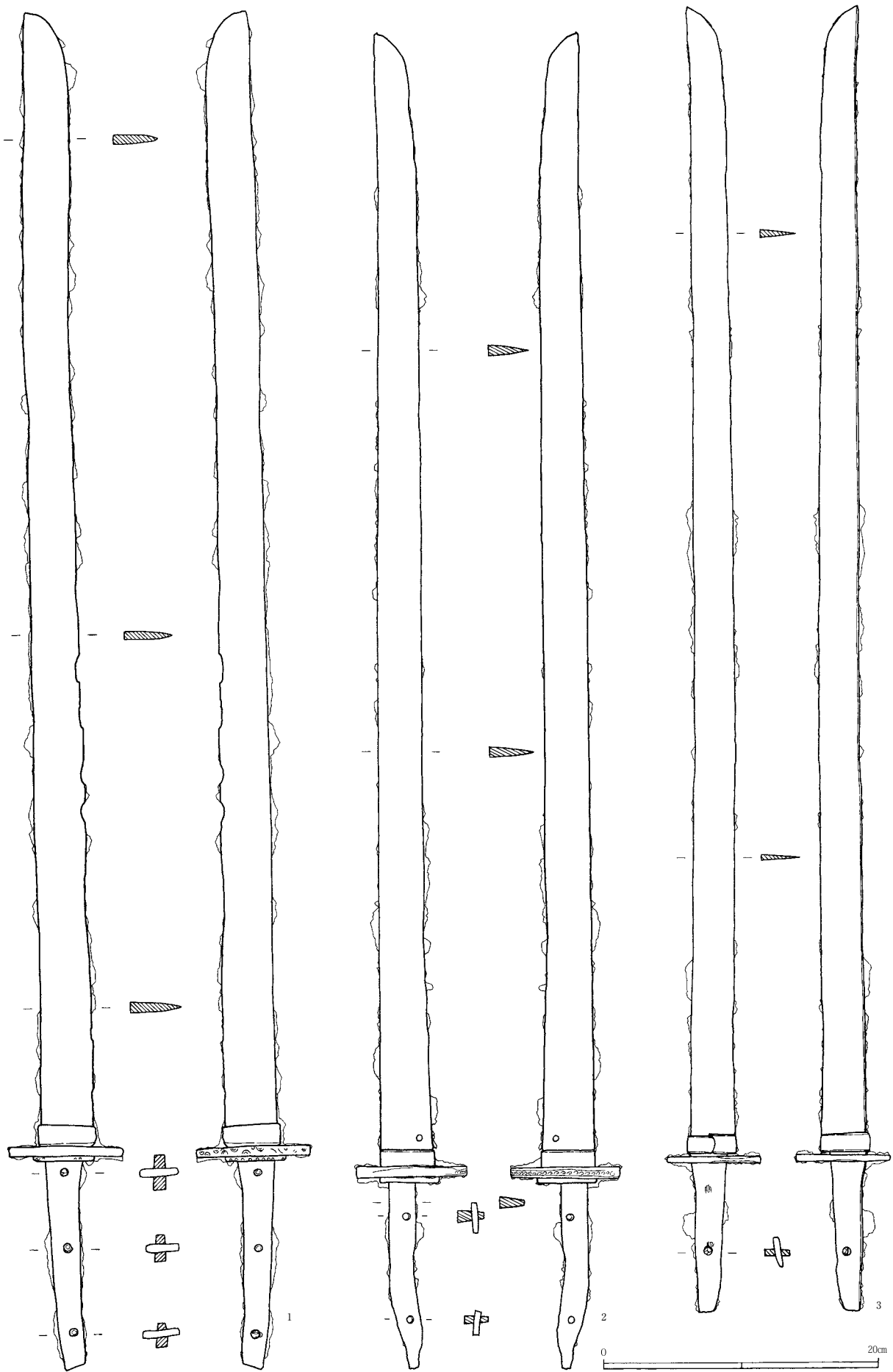
1号刀（第12図1） 全長98cmの最大直刀である。刀身部81.8cm、茎部16.2cm、関付近での刀身幅3.8cm、厚さ0.9cmを測る。平棟平造り脹切先の重厚感ある鉄刀で、刀装具は釦・鏝・柄縁金具・輪状金具を装着している。このうち鏝・柄縁金具・輪状金具には銀象嵌文様が施されている。

関はX線写真で見ると両関であり、棟関・刃関とも直角に切込んでいる。茎は関寄りの位置から内側へ弱く折り曲がっており、棟の中央を頂点に茎尻で1.5cm下がっている。茎元挟りとなっており、刃関より1cm程の位置で切り込み、一方の茎尻側は斜めに0.5cm切り込んで台形状の形態になると思われる。目釘穴は関際、中央、茎尻の3箇所があり、間隔は中央と茎尻間がやや広く、3箇所とも鉄製の目釘が残っている。目釘は3本のうち関際のものが最も長く2.9cmある。このため柄縁金具は茎から外せない。

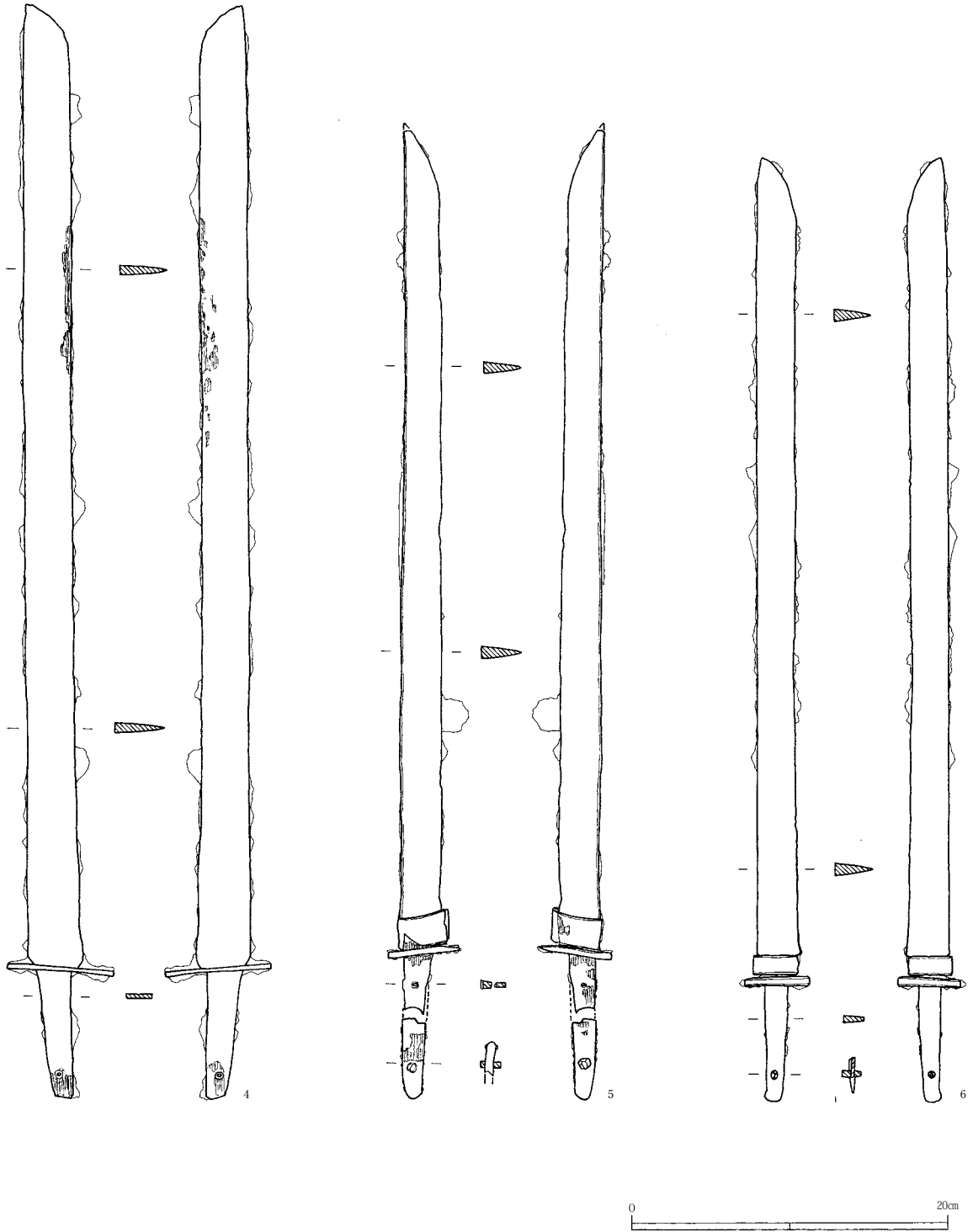
釦は切先側がふさがり形態である。鏝は8×6.7cm、厚さ0.5cmの八窓透倒卵形で、鏝縁に半円重弧文を千鳥に配した銀象嵌文様が巡らされている。柄縁金具は4.2×3cm、厚さ0.25cm、内径3.5×2.3cmの倒卵形を呈し、縁面に銀象嵌によるC字状文が巡らされている。

輪状金具（図14-13）は口径の広い方を鏝に向け、茎に嵌められた状態で出土した。輪状の倒卵形鉄製品で、広い方の口径7×5.3cm、内径5.2×3.6cm、一方の口径6.8×3.35cm、内径5×3.4cmで片側へ開いている。縁面の幅は鏝の厚さと同じ0.5cmで、銀象嵌による半円三重弧文が巡らされている。半円三重弧文の一単位の大きさは、鏝縁面の半円重弧文の一単位とほぼ似た大きさである。柄縁金具が内径に納まる大きさであるが、この輪状金具も柄縁金具の一種であろうか。

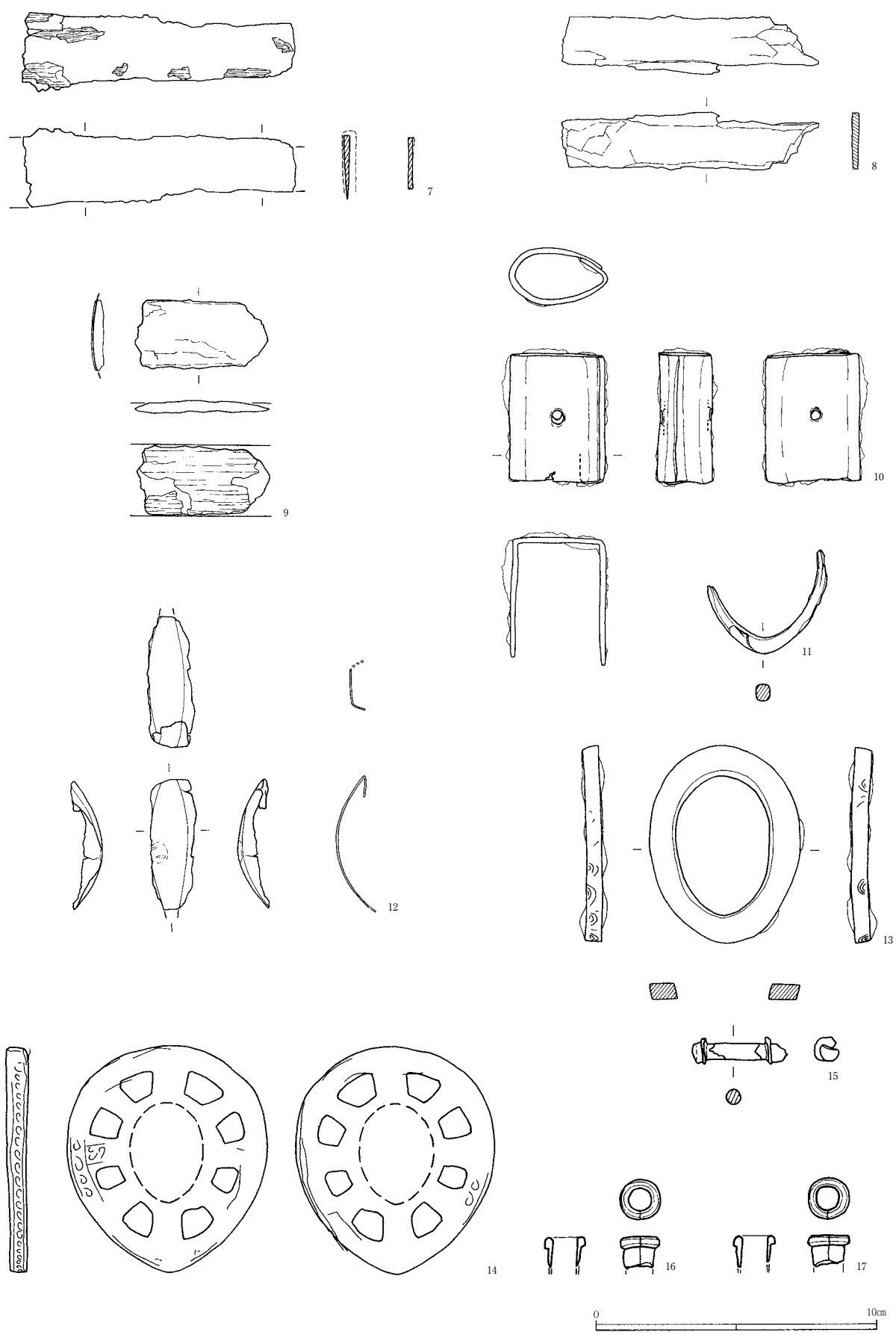
2号刀（第12図2） 全長96.5cm、刀身部81.9cm、茎部14.6cm、関付近での刀身幅3.8cm、厚さ1cmを測る。平



第12图 直刀 (1) (1:4)



第13图 直刀（2）（1:4）



第14图 直刀 (3) (1:2) · 刀装具 (1 : 2) · (1:1.5)

棟平造り脹切先で、釧・銀象嵌鏝・柄縁金具を装着している。刀身幅は中央部で3.2cm、切先付近で2.6cmと徐々に細くなり、先端部でわずかに反り上がり、ふくらみに乏しい。

関は釧に被われているため形状は明らかでない。釧元孔はX線写真で確認された。刃関の斜め上に位置し、X線写真で見ると径0.4cmの孔である。茎は中程で内側に折れて屈曲し、茎尻は棟の中央を頂点に2cm下がっている。先の尖る形態であるが、茎尻は原形を保っているとみられる。目釘穴は関側と屈曲部の中程の2箇所あり、いずれも目釘が残っている。

釧は切先側がふさがり形態で、鏝・柄縁金具とともに錆着している。鏝(図14-14)は8×7cm、厚さ0.5cmの八窓透倒卵形である。鏝平と鏝縁に銀象嵌文様が施され、平には象嵌の銀糸が部分的に浮き出ている。平の文様構成の全体は明らかでないが、周縁に二重の圏線を設け、その中にC字状文を横向きで一列に巡らせている。さらに透し孔間には周縁内側の圏線から二本の区画線を伸ばし、その中に3個のC字状文を向きを違えて充填している。鏝縁も同様な文様構成であり、2本の直線間に連続するC字状文が同方向で一列に充填されている。柄縁金具は倒卵形で4×3.3cm、厚さ0.4cmの大きさである。

3号刀(第12図3) 全長94.5cm、刀身部83cm、茎部11.5cm、関付近での刀身幅3.3cm、厚さは0.7cmである。平棟平造り脹切先で釧・鏝を装着している。刀身は中程から切先にかけて緩く反り、切先はふくらみに乏しい。刀身部の長さ比べると茎が短く、刃幅は細く、棟幅も薄い。

関はX線写真で見ると直角両関であるが、釧に被われているため判然とししない。茎は内側が茎尻に向かって徐々に細くなっている。目釘穴は中央よりやや茎尻に寄った位置に一箇所あり、目釘が残っている。

釧は幅1.2cm、厚さ0.3cmの薄い鉄板を環状に巻いて末端を重ね合わせたもので、表の先端は山形に整えられている。鏝は6.85×5.6cm、厚さ0.3cmの無窓倒卵形で薄手のつくりである。

4号刀(第13図4) 全長69.4cm、刀身部61.2cm、茎部8.2cm、関際での刀身幅3.3cm、厚さは0.7cmである。平棟平造り脹切先で鏝を伴う。

関は両関で撫角に切り込まれている。茎はわずかに内湾気味で、茎尻は棟の中央を頂点に2.1cm下がっている。目釘穴は一箇所で茎尻近くにあり、周囲には木質が遺存している。木質は刀身部の切先側で刃部に沿った部分にも認められる。鏝は6.8×5.1cm、厚さ0.3cmの無窓倒卵形の鉄鏝である。

5号刀(第13図5) 残存長55.9cm、茎の中間部を欠失するが、推定長61cmである。関付近での刀身幅2.5cm、厚さ0.5cmの平棟平造りで、切先はふくらがつかずわずかに反っている。釧・鏝を装着している。

関はX線写真で見ると片関で、刃関が撫角に切り込まれている。茎は中間部を欠失する。目釘穴は二箇所で、茎尻側の穴には目釘が残っている。釧に被われた部分から茎尻側の目釘穴にかけて木質が遺存している。

釧は錆化が著しく欠失している部分があり、一部に木質が認められる。鏝は倒卵形で4.5×3cm、厚さ0.4cmの小型の鉄鏝である。いわゆる喰出鏝と呼ばれるものとなろう。

6号刀(第13図6) 全長59.8cm、刀身部の関側1/3ほどの遺存状態が良好で、この部分は棟が明瞭で刃部も鋭利に残っている。刀身部50.5cm、茎部9.3cm、関際での刀身幅2.7cm、厚さ0.7cmの平棟平造りで釧・鏝を装着している。刀身幅は中央部から切先付近まで減じておらず、切先はふくらみに乏しい。

関は両関の二段である。棟関は直角に0.1cm切り込み、さらに茎側1cmの位置にも直角に0.1cm切り込んでいいる。刃関は直角に0.2cm切り込み、背側と同様に茎側1cmの対照の位置に直角に0.1cm切り込んでいいる。茎は関際から茎尻にかけて内側が緩く反り上がっている。目釘穴は茎尻近くに一箇所あり、片方から鉄釘2本が入っているが、1本は折れて裏に出ていない。

釧は幅1.1cm、厚さ0.15cmの鉄板を環状に巻いたものである。鏝は倒卵形で4×3.1cm、厚さは0.5cmである。小型の割には厚みのあるつくりの良い鉄鏝である。喰出鏝と呼ばれるものとなろう。

7・8・9(第14図7・8・9) いずれも直刀の断片と思われる。7・9は片側に木質が残っている。

2 刀装具（第14図10～14、図版18）

10は方頭の柄頭である。長さ4.4cm、幅3.5cm、高さ2.1cmで、鉄板を倒卵形の筒に巻いて一辺を平らに塞いでつくられている。表裏の中央付近に孔がある。孔は表側が径0.4cm、裏側の孔はそれより若干小さい。出土位置から関連性のある直刀は求められず、セット関係を特定できない。

11は柄縁金具の欠損品と思われる。倒卵形で、下端の先端部がやや広くつくられている。

12は厚さ0.1cm以下の薄い銀板を用いている。正面観がふくらみのある形で箱形に折り返し、側面観に丸みが出るように成形しているが、長軸方向の片側は折れ曲がっている。長さ4.6cm、正面観の最大幅は1.3cmである。柄頭の頂部に被せた柄頭金具ではないかと思われる。3号刀付近の出土である。

13は直刀1の茎に嵌められて出土した銀象嵌文様のある輪状金具である。柄縁金具の一種とみられるものである。

14は2号刀の鏝で銀象嵌文様が施されている。

15は目釘と思われる遺物である。長さ2.5cm、径0.4cmの丸棒の両端に頭部をつくり出し、軸に薄い鉄板を巻いて両端を折り曲げ、頭部と区切りをつけている。おそらくこの部分で両端を留めていたものと思われる。軸の中央部には有機質の付着が認められる。鉸具の両脚を連結する横棒とも考えられるが、装具の目釘として扱っておく。

16・17は金銅製の鷓目金具である。薄い銅板を筒状に巻いたもので、片側の肥厚させた縁取り部を金鍍金している。幅1.05cm、口径0.65cmの同一寸法で、2m50cm離れた位置で出土しているものの、一対とみられる。このうち16は5号刀近くの出土であるが、セット関係は明らかでない。

3 刀子（第15図1～10、図版19）

刀子と認められる遺物は断片を含めて17点ある。17点は身部・茎部とも長さが5cm以上の大型のもの（Ⅰ類）7点、5cm程度かそれ以下になるとみられる小型のもの（Ⅱ類）10点で、小型のもの3点は鏝を装着している。ここでは17点のうち主要な10点を図示した。

Ⅰ類（1・3・5・6・7）1は全長19.6cm、身長13.4cm、茎長6.2cmで棟が直線的な刀子である。切先はやや反り気味で先端の鋭さが残っている。茎は茎尻が棟より1cm下がっており、有機質の巻物らしき痕跡が認められる。

3は全長14.7cm、身長9.5cm、茎長5.2cmを測る。両関で関部での身幅1.6cm、棟幅は0.6cmである。身部の片側を除いてほぼ全体に木質の付着が顕著であり、茎では巻物らしき痕跡の一部が木質の下に認められる。

5は全長13.2cm、身長7.6cm、茎長5.6cmで、身部に対し茎部の長い刀子である。関は斜角の両関、関部での身幅1.2cm、棟幅0.4cmである。全体に薄手で細身のつくりである。茎には木質が遺存している。

6は関付近から茎尻にかけての部分で、残存長7cmである。腐食により関は明確でないが、茎の内側と刃関付近と思われる位置の形態からみて茎長は5.2cm程度である。茎尻は薄くつくられており、木質が遺存している。

7は残存長10.3cm、茎長は5.4cmである。両関で関部での身幅は1.5cm、身幅は先端部へ向かって湾曲しながら急激に細くなっている。茎の関際に木質が遺存している。

Ⅱ類（2・4・8・9・10）2は残存長5.1cm、棟の片関で関部での身幅1.05cm、棟幅0.2cmの薄手小型の刀子である。

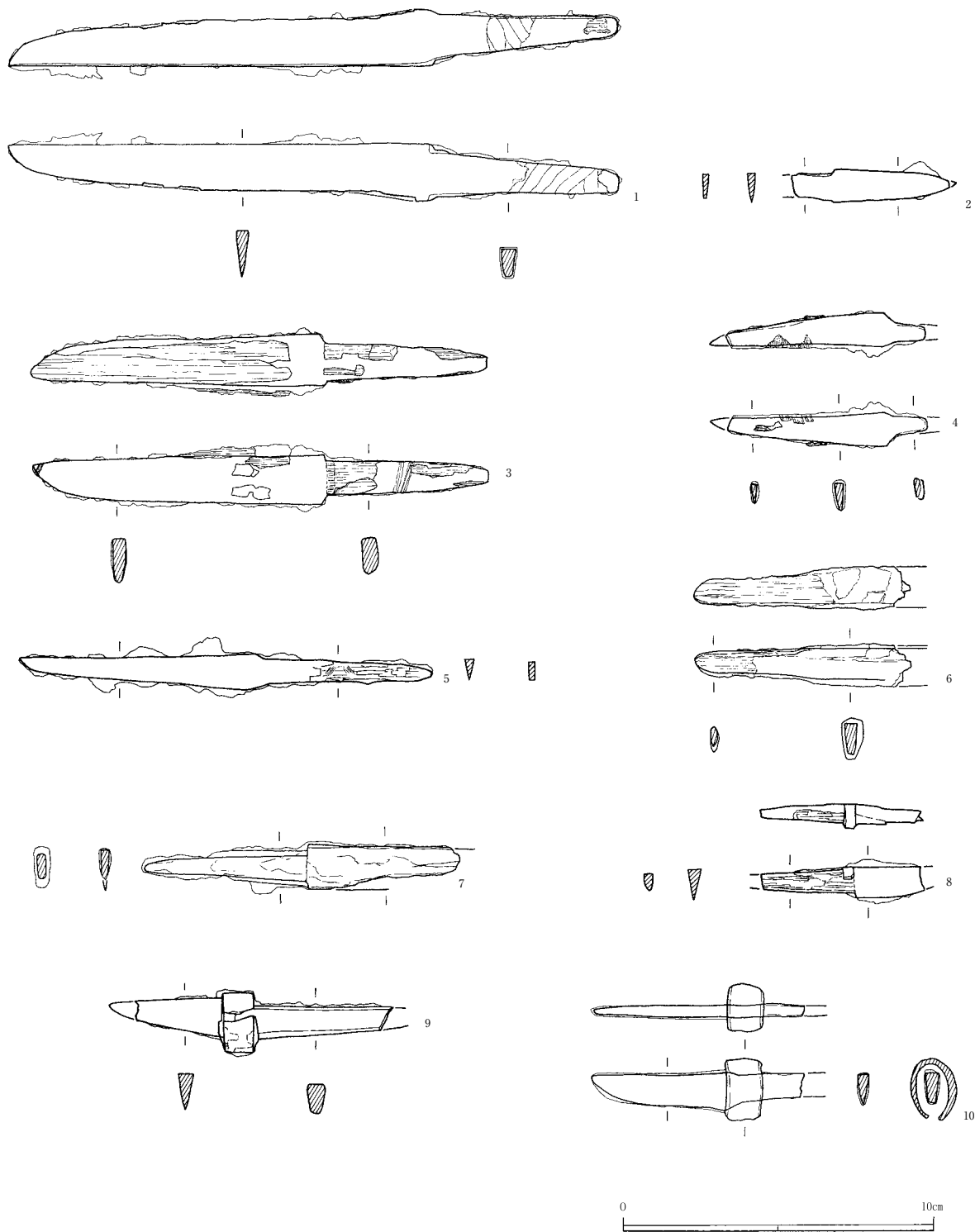
4は残存長6.4cm、両関で関部での身幅1.1cm、棟幅0.35cmの小型の刀子である。身部の中程から先にかけて十字に絡めた巻物らしき痕跡と、その上に付着した鹿角装の痕跡がわずかに認められる。

8は残存長5.1cmで鏝を装着している。両関とみられ、関付近での身幅1.1cm、棟幅0.4cmである。関部に小さな鏝が鏝着しており、この部分から茎全体に木質が遺存している。

9は残存長8.3cm、茎の現存長5.1cmで鏝を装着している。関はX線写真で見ると両関のようである。関部での身幅は1.3cm、棟幅0.5cmで、研磨による摩耗のためか身部の著しく短い刀子である。茎は直線的で先端部を欠

く。茎には全体に木質が残るが、裏面では鍔の口元まで遺存している。

10は残存長6.8cm、身長4.6cm、両関で関付近の身幅1.3cm、棟幅0.4cmである。鍔は脱落して出土したが、関部に装着痕が残っている。鍔の装着痕から茎の端部にかけて木質が遺存している。鍔は楕円形の円環であるが、刃関側の一部が欠損して円環は切れている。



第15図 刀子 (1:2)

4 鉄鏃（第16図1～第22図108、図版20～23）

鉄鏃は108点を図示した。図示したもの以外には尖根鏃の鏃身部で形態が不明瞭なもの2点、篋被の残存する尖根鏃とみられる頸部及び茎部29点、頸部・茎部の小断片23点がある。このうち篋被を残すものは図示した尖根鏃のうちの77点、及び図示していない29点の計106点である。よって、平根鏃の10点と合わせた篋被を残す尖根鏃106点の合計116点を永明寺山古墳の鉄鏃の数とみておきたい。なお、一覧表も含め、本稿での鉄鏃の分類は鏃身部の明らかなものに限ってある。

鉄鏃には平根有頸式・平根短茎式・尖根式がある。以下、平根有頸式・平根短茎式・尖根式の順で、さらに鏃身部の形態によって細分類して記述する。

①平根有頸式（第16図1～9）

I類A（1） 腸袂五角形式のもの。

I類B（2） 五角形に近い腸袂三角形式。左側縁部は角が取れてふくらがつく。

I類C（3） 五角形式で鏃身関の下辺端部に段状の切り込みである重袂を施したもの。

I類D（4・5） 三角形式で側縁部にふくらがつき、鏃身関の下辺に三角形の切り込みである重袂を施したもの。4は両側縁ともわずかに角を残し、ふくらをつけている。5は右側縁のふくらが強い。

I類E（6） 腸袂長三角形式で外反する長い腸袂をもつ。

I類F（7） 腸袂長三角形式で短い腸袂をもち、側縁部にふくらがつく。

I類G（8） 長三角形式で側縁部にふくらがつく。頸部は欠損しているものと思われる。

I類H（9） 飛燕式であるが、鏃身部の両端と頸部は欠損しているものとみられる。

②平根短茎式（第16図10）

Ⅱ類A（10） 五角形式で中央に孔を有し、腸袂の端部に切り込みの重袂を施している。孔の周辺から茎にかへ、矢柄に装着するために挟み込んだとみられる棒状部の木質が遺存している。

③尖根式（第17図11～第21図91）

両刃式（I類）と片刃式（Ⅱ類）がある。

I類A 1（11～26） 柳葉形で側縁部にふくらがついてS字を描き、関が斜関となる。鏃身長が3cm以上の大型のもの。13は側縁部のS字が弱く直線的で関が大きい。15・16は頭部のふくらに角がついて三角形を呈している。23・25は頭部のふくらが強調されて関側が細いつくりになっている。頸部の長さは8cm程度で一定している。

I類A 2（27～32） A 1と同形で鏃身長が2.5cm以下の小型のもの。32はA 1の23・25と同様に頭部が強調されて関側が細いつくりになっている。28は頸部が細く短い。30も頸部は短い、27はA 1のものより長い。

I類B 1（33・34） ふくらのある柳葉形。関は撫関であるが比較的明確な変化点を持つ。鏃身長が2.2cm以上の大型のもの。

I類B 2（35～47） B 1と同形で鏃身長1.15～2.05cm、鏃身幅0.6～0.95cmの中型のもの。

頸部の太いものより細いものが多いが、細いものには長さが10cm以下の短いもの（42・44・45・47）と、10cm以上の長いもの（38・39・43）とがある。

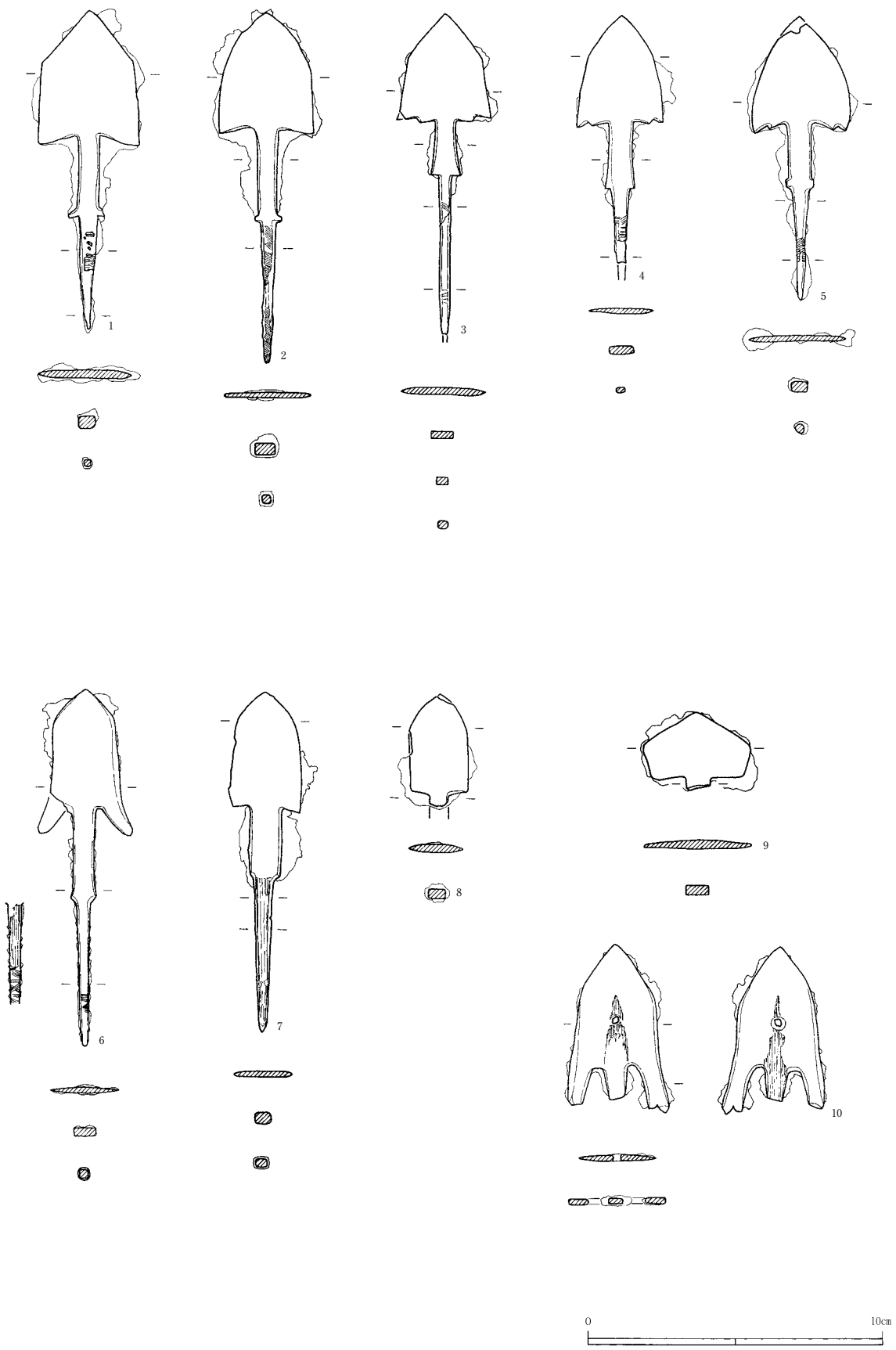
I類B 3（48～51） B 1と同形で鏃身長0.95～1.05cm、鏃身幅0.5～0.65cmの小型のもの。頸部は細いが、B 2と同様に短いもの（48）と長いもの（49）がある。

I類C（52～63） 柳葉形で無関か、あるいは撫関であっても明確な変化点を持たないもの。鏃身幅がやや広く頸部の太いもの（52・63）もあるが、ほとんどが小さな鏃身部で、頸部は細く長さ10.5cm前後のものである。

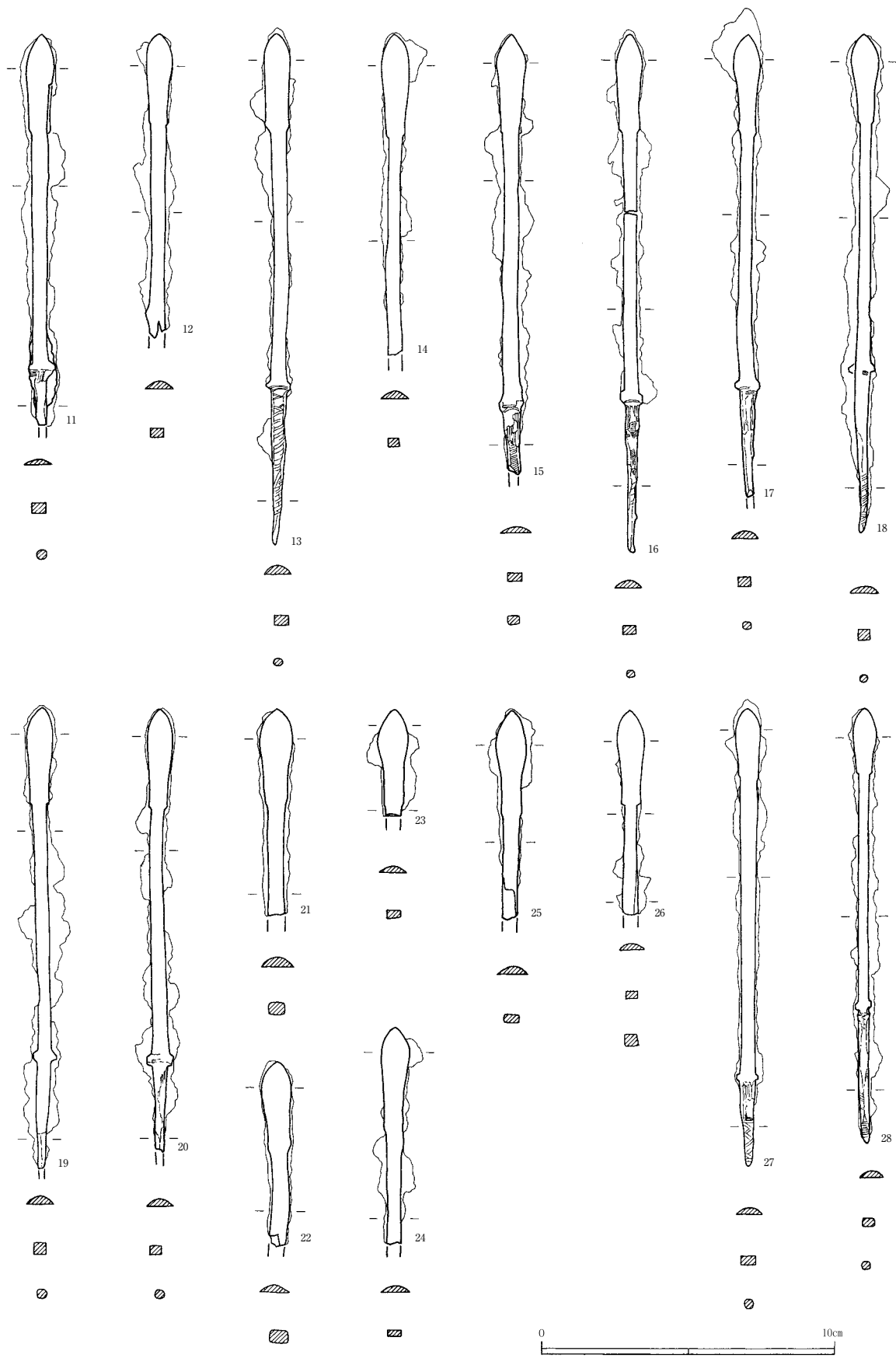
I類D（64・65） 圭頭で無関のもの。2本だけの出土である。ともに山形の頭部を叩き出して2辺を刃部としている。断面長方形の頸部に短い茎部が付く。64は直角関のようにも思われる。

Ⅱ類A 1（66） 背と平行する刃部に関をもつものをⅡ類Aとする。2本だけの出土であるが、鏃身長の大型のものをA 1とする。66は頸部が太く断面長方形である。

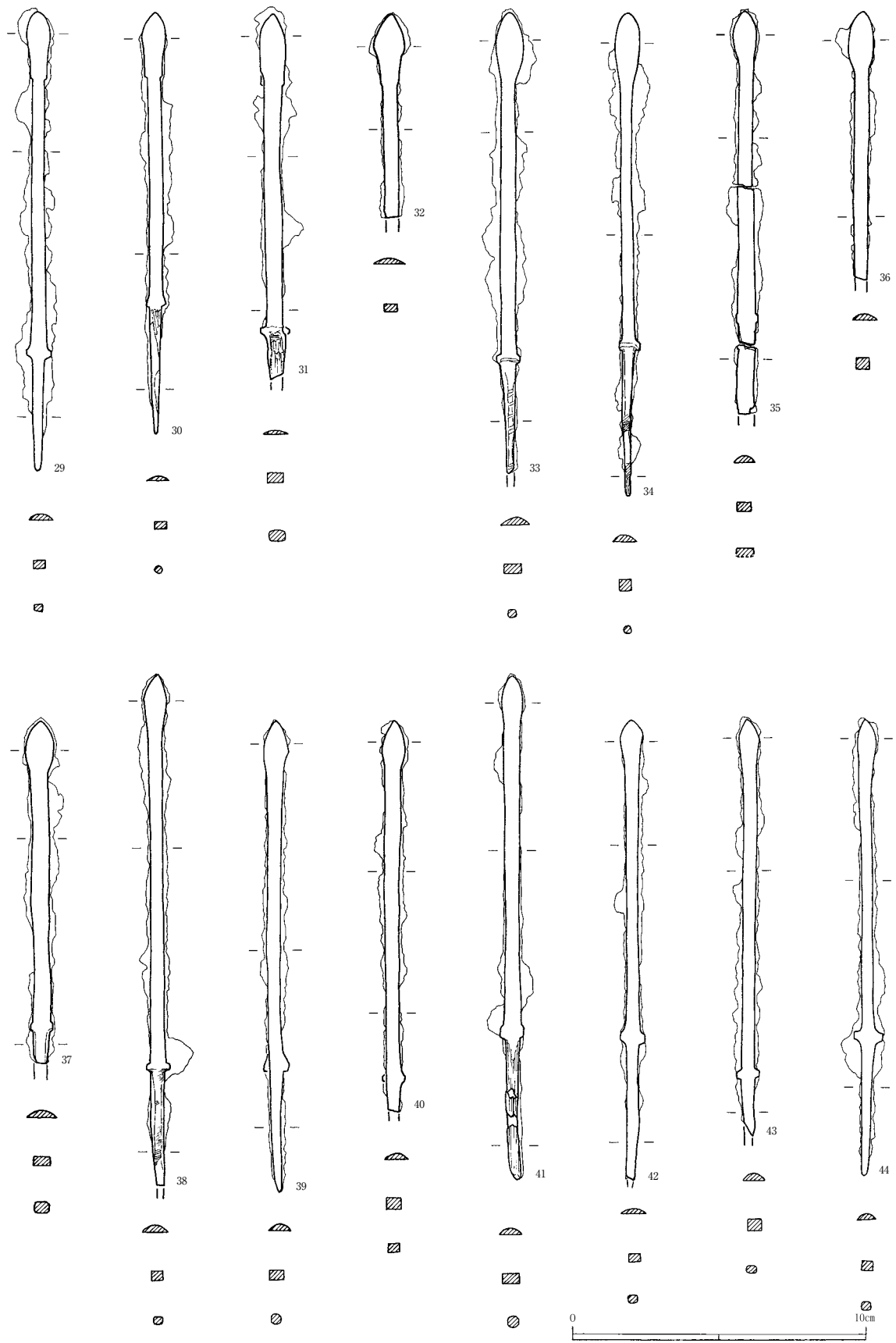
Ⅱ類A 2（67） A 1と同形で鏃身長の小型のもの。67の鏃身長は66の1/2程度で頸部は細く断面正方形である。



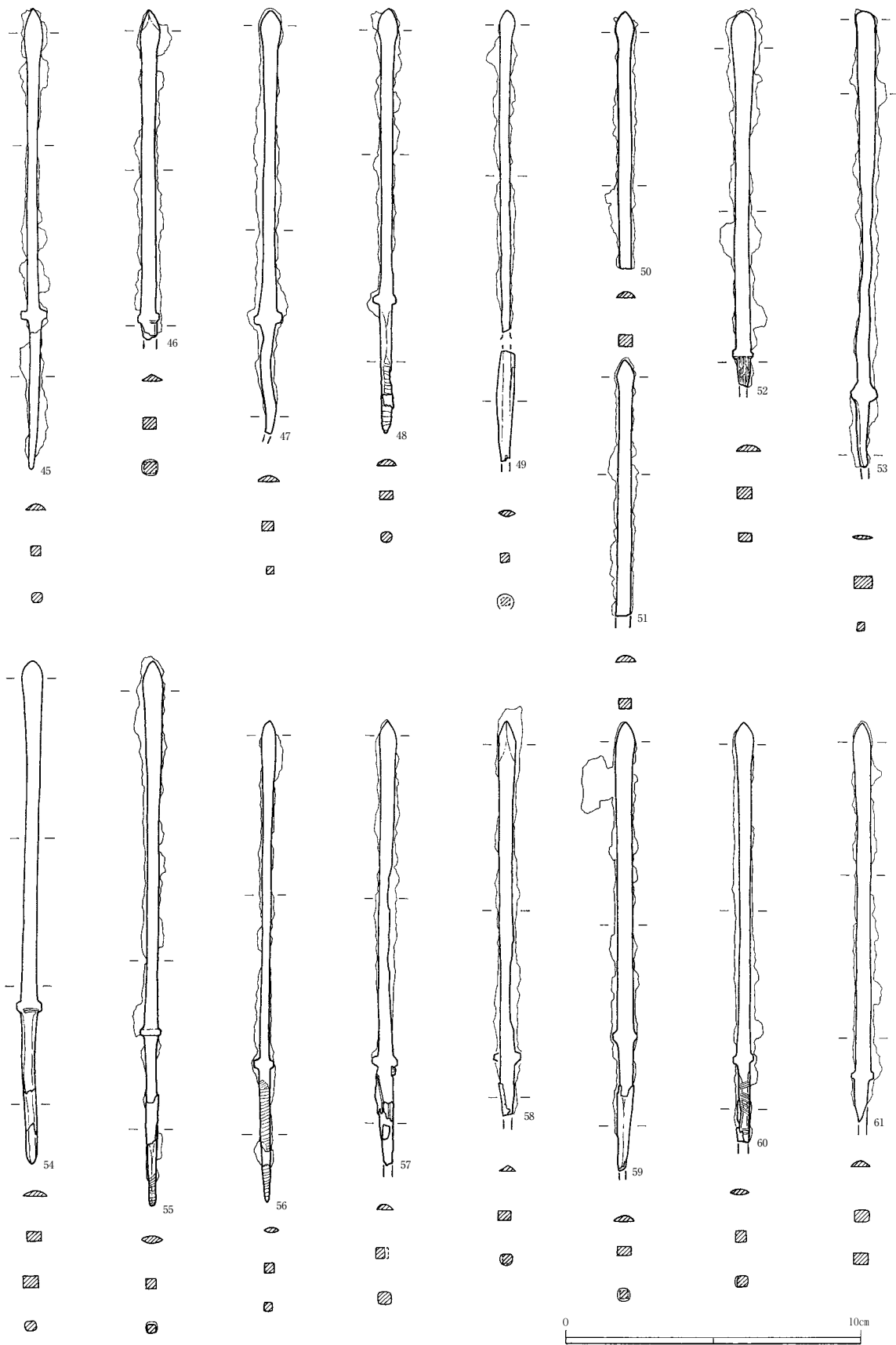
第16図 鉄鏃 (1) (1:2)



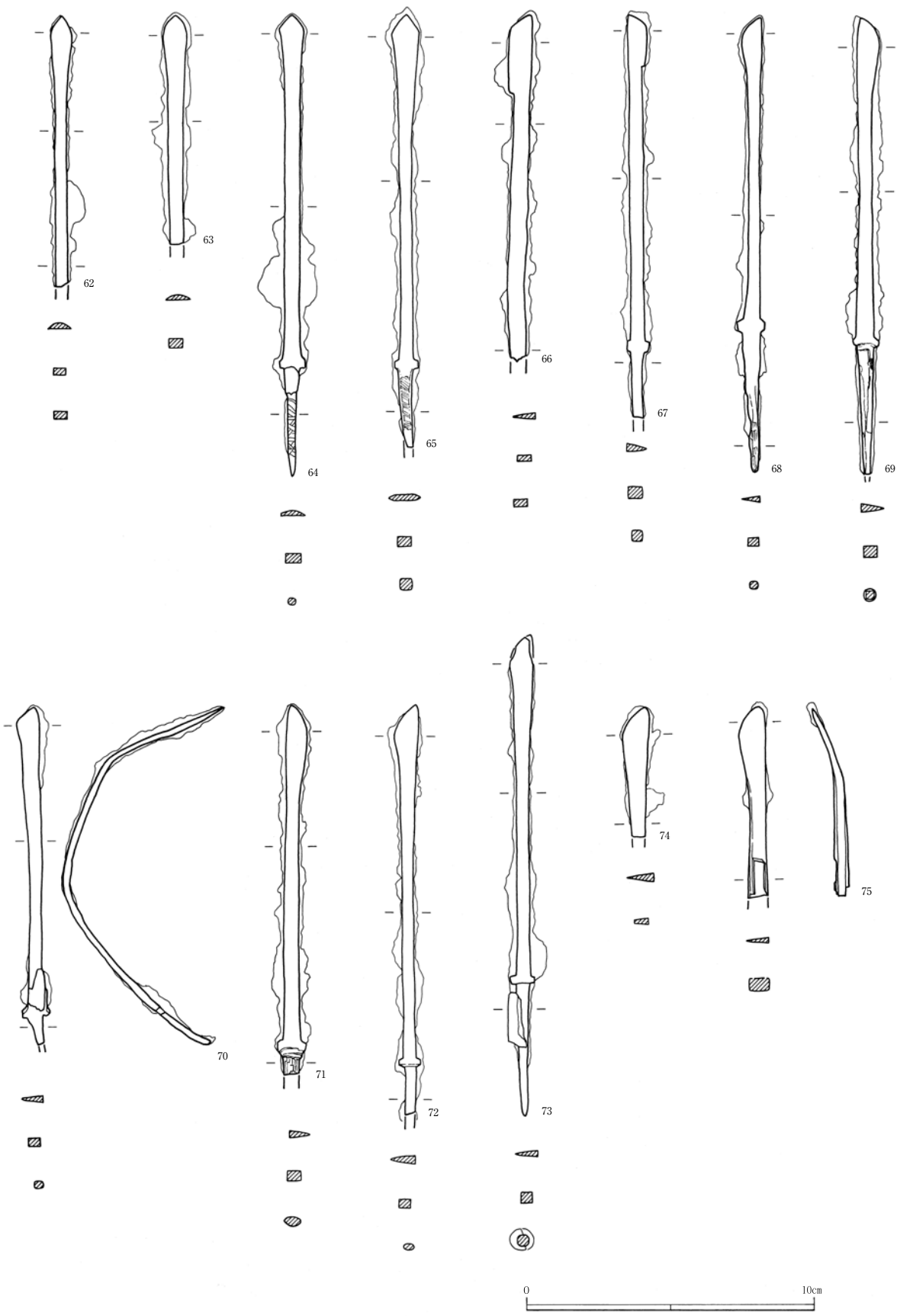
第17图 鉄鏃（2）（1:2）



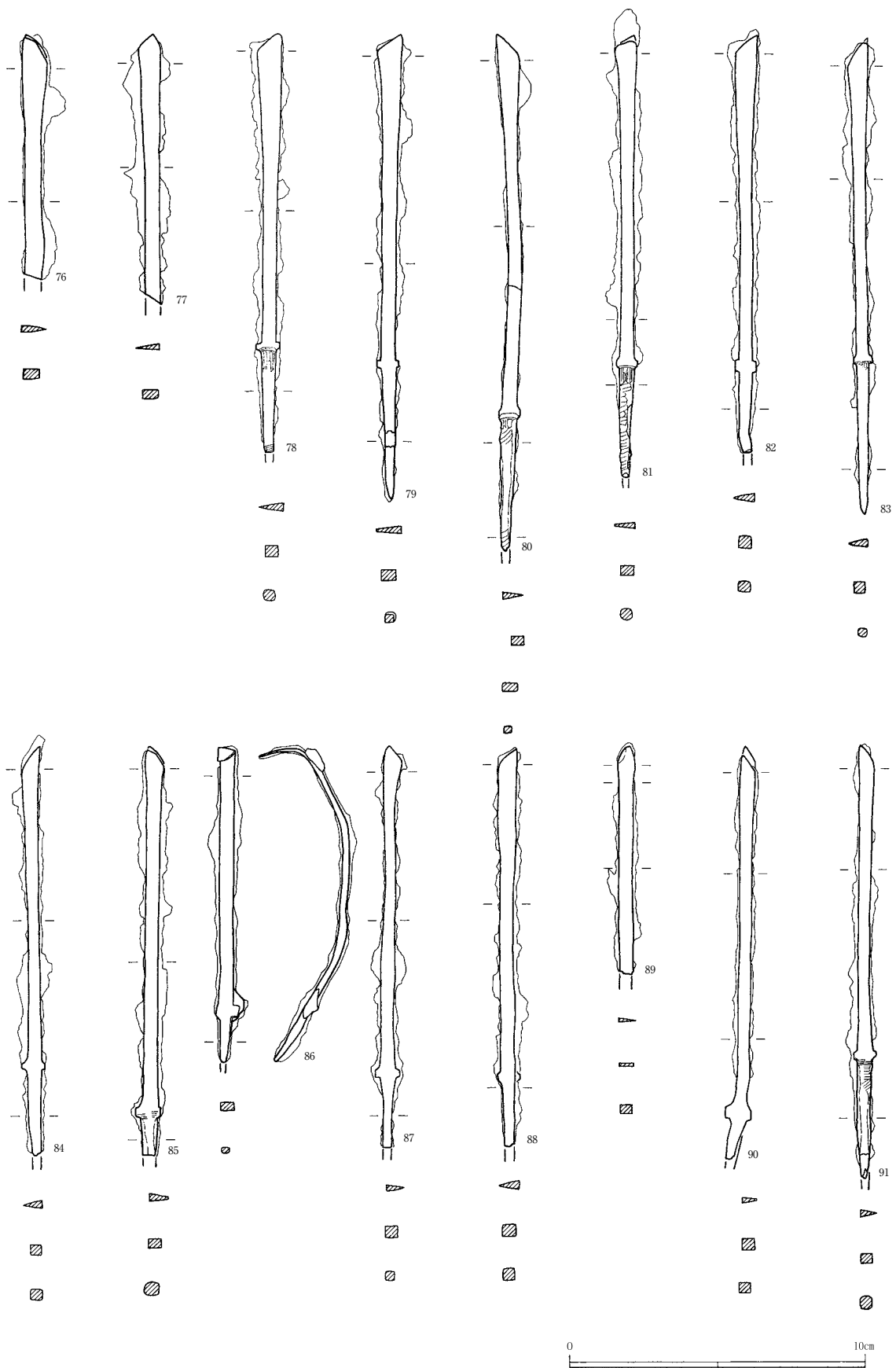
第18図 鉄鏃 (3) (1:2)



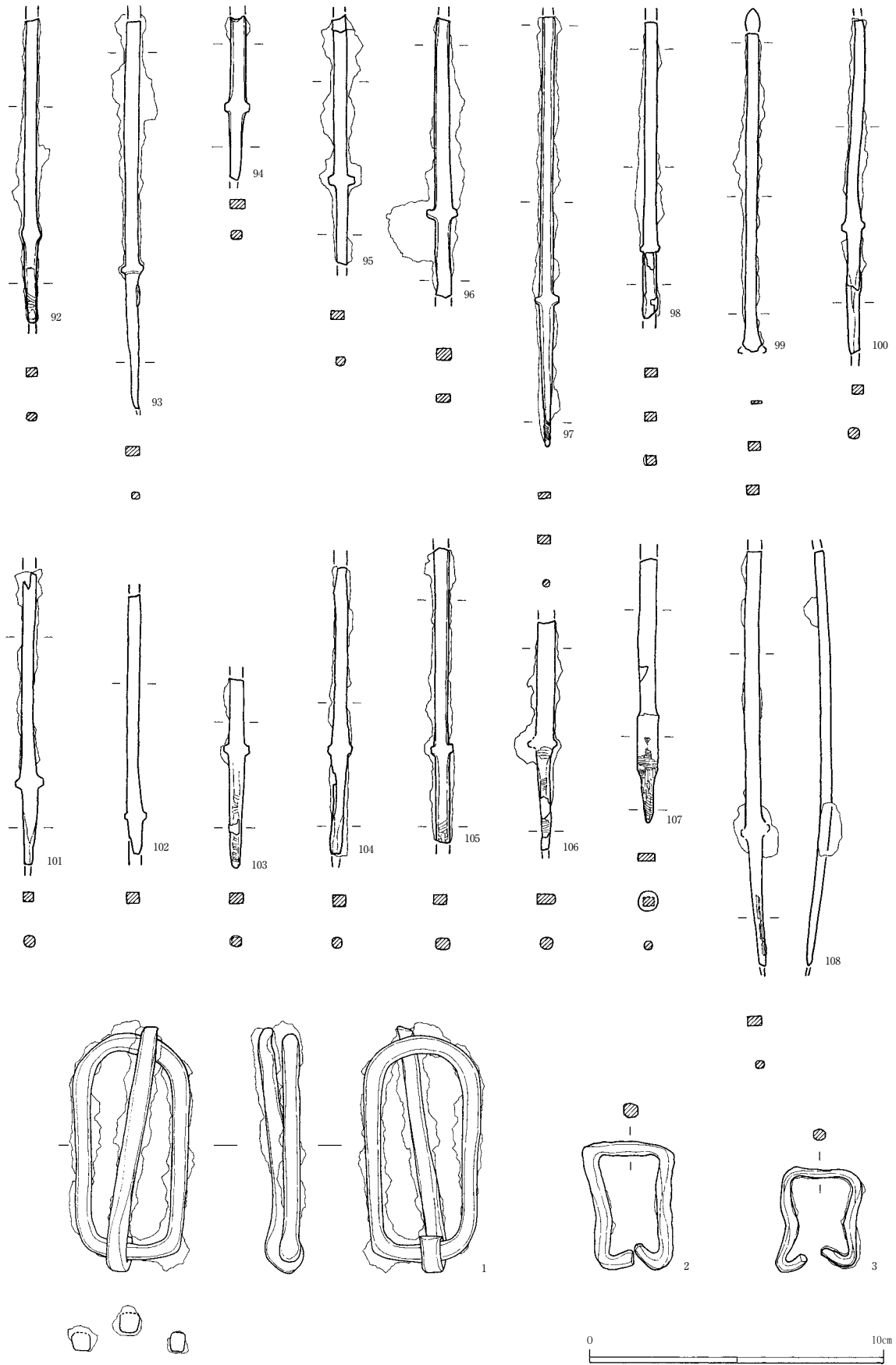
第19図 鉄鏃（4）（1:2）



第20図 鉄鍬 (5) (1:2)



第21図 鉄鏃 (6) (1:2)



第22図 鉄鏃(7)・鉸具(1:2)

Ⅱ類B(68~76) 長い刃部にふくらのつく無関のもの。頸部の長さは70以外大きな違いはない。頸部の長い70は鍔身部下と頸部中ほどの2箇所で「コ」の字状に折り曲がっている。75も同じように鍔身部下で折り曲がっているが、頸部以下を欠失している。ともに故意に折り曲げられたものと思われる。

Ⅱ類C1(77~79) 直線的な一辺を刃部とする切出し形で、背と刃側が平行する無関のもの。鍔身幅が0.85~0.95cmとC2に比べ大型で、刃部刃側の肩が張り出すものがある。頸部は太く短い。

Ⅱ類C2(80~91) C1と同形で、鍔身幅が0.5~0.75cmとC1に比べ小型のもの。頸部はⅡ類の中では10cmを超える長く細いものが多い。86はⅡ類Bの70・75と同様、鍔身部下と頸部2箇所ですり曲がっている。

上記のほかに頸部・茎部の破片があり、92~108にその一部を図示した。いずれも長頸鍔で関はずべて棘関である。茎部に植物質の遺存するものがあり、矢柄との装着法が推定できる。107は短い茎部に糸状の繊維を横巻きして木質の残る径0.7cmの矢柄に装着し、さらに矢柄を植物繊維で横巻きしてその上を漆状のもので被って固定しているようである。

第3節 馬具

1 鉸具(第22図1~3、図版19)

1は長さ8.3cm、幅3.9cmで、断面方形の鉄棒を隅丸長方形に折り曲げて両端を合わせ、輪金としている。頭部が丸くふくらみ、基部は直線的で、輪金は片側の中央をやや内側に曲げてある。刺金が基部中央に付いて可動する形式で、輪金の頭部に合わさる刺金の先端部は内側をわずかに凹ませている。

2・3は鉄棒を折り曲げて方形の形を作り、下端を閉じ、ここに刺金を嵌め込んだとみられる同形態のものである。しかしながら下端の合わせ目が内側に開いて刺金は脱落し、残っていない。ともに輪金の両側中央をやや内側に曲げている。2は長さ4.3cm、幅3.2cm、3は長さ3.6cm、幅2.9cmである。

2 辻金具(第23図4・5、図版19)

半球状の鉢の四方に脚を出す鉄地金銅張りの辻金具である。鉢の大きさは4の径が4.9cm、高さ2.1cm、5は径4.7cm、高さ2.3cmである。鉢の下段に一本の凹線を廻し、端部にも凹線を一本廻して弱い段を付けている。脚の間隔は等間隔でなく、対照となる脚の位置がわずかに片寄りしており、5はより顕著である。脚は一鉸の半円形脚で、鉸は金銅張りともみられる。脚長は4が1.9~2cm、5が1.7~1.9cmで4の脚がわずかに長い。責金具は対照の位置二箇所に各一本であるが、4は一箇所が欠落したものと思われる。地金は0.3~0.4cm程度の厚みで、ともに重量感がある。

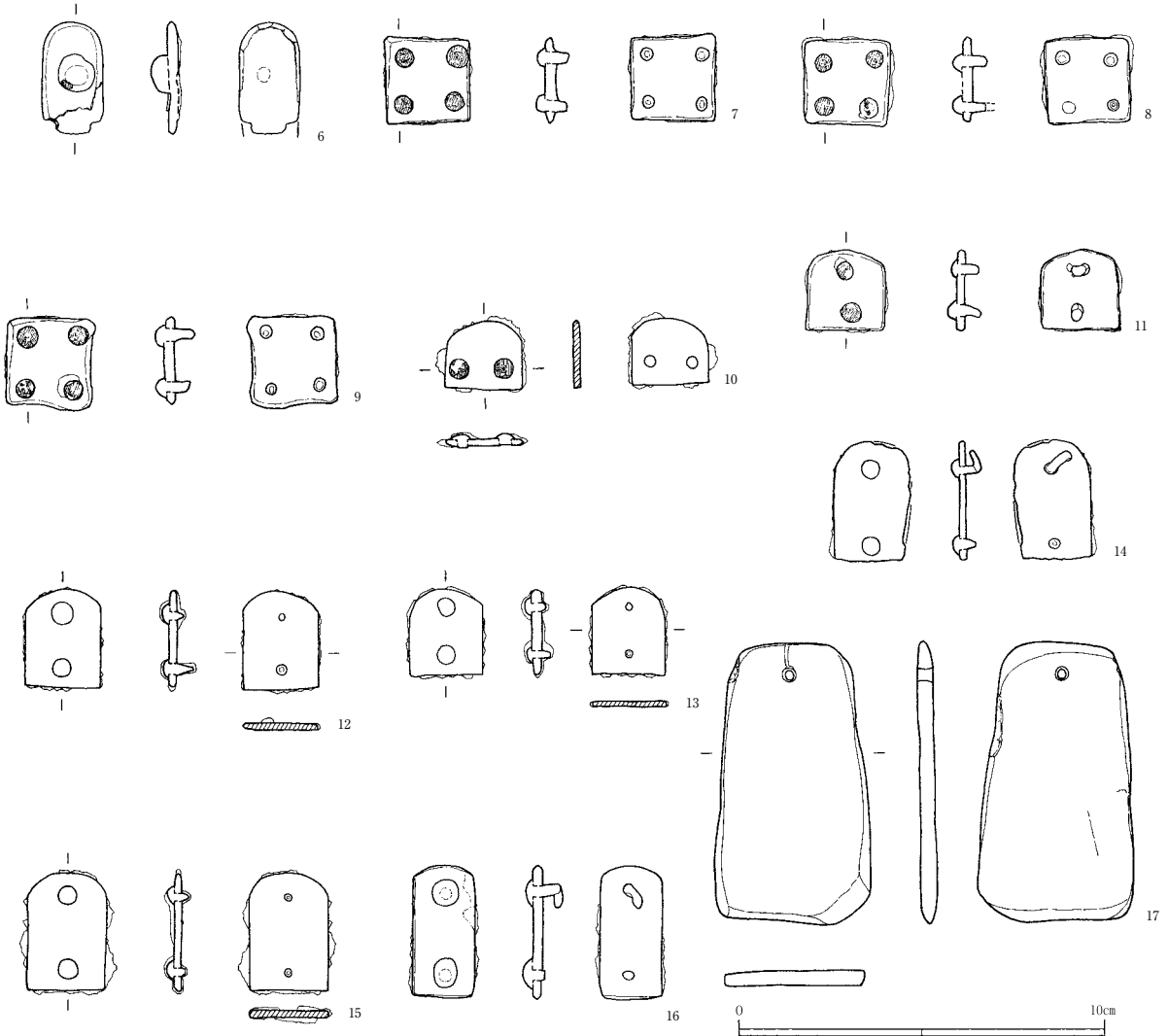
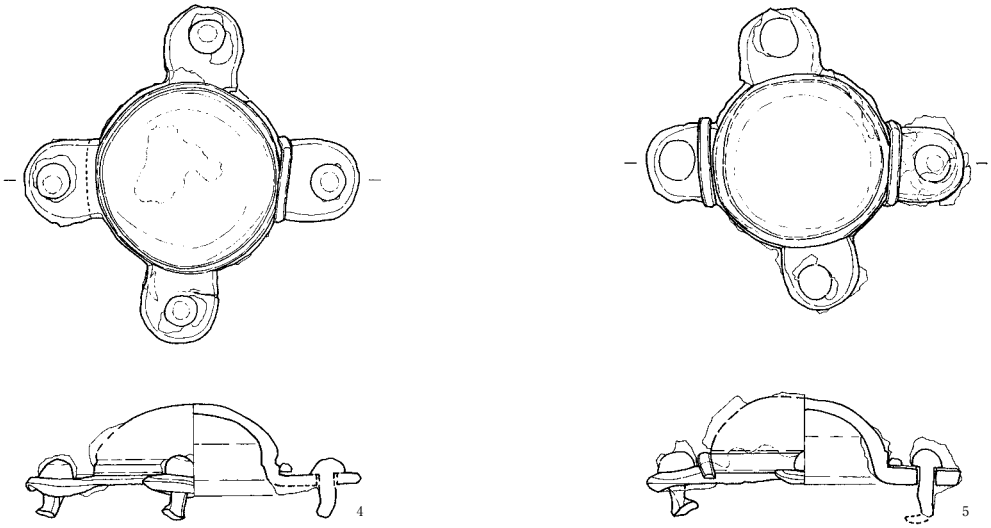
3 鉸付金具(第23図6~16、図版19)

ここでは鉸付の飾金具類を一括して扱う。6は長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmで頭部の丸い長方形を呈している。鉄地金銅張製で、金銅板の縁は鉄板の裏面に折り込まれている。基部は両角を直角に切り落として中央部を突出させている。接合の刺し込み部ともみられるが判然としない。大型の鉸1個が打たれているが、裏面の鉸の足は欠落している。7~9は一辺2.3cmの方形を呈する薄い鉄板の四隅に銀被覆の笠鉸が打たれている。鉸は頭径0.5cmで、裏面には鉸の足が突出している。

10・11は頭部の両角が丸く落とされた爪形を呈する薄い鉄板に銀被覆の笠鉸が二箇所ある。10は長さ1.9cm、幅2.2cmで、頭径0.5cmの鉸が横並びに打たれている。11は長さ2.2cm、幅2.2cmで、頭径0.5cmの鉸が上下にわずかにずれて打たれている。裏面には鉸の足が出ているが、足は向きを変えて曲っている。

12~15は頭部が丸くなる長方形を呈し、銀被覆の鉸2個が打たれている。12・13はやや小型で、12は長さ2.7cm、幅2.05cm、鉸の頭径は0.5cmである。13は長さ2.4cm、幅2cm、鉸の頭径は0.45cmと0.5cmである。14・15はやや大きく、14は鉸の頭径0.5cmで、裏面の鉸の足は片側が折り曲がっている。15は長さ3.2cm、幅2.1cm、鉸の頭径は0.5cmである。

15は頭部が爪形を呈する長方形の鉄板の両端に鉸2個が打たれている。鉄地金銅張製で、金銅板の縁は鉄板の裏面に折り込まれている。鉸は頭径0.7cmの笠鉸で、裏面に突出した片側の脚は折り曲がっている。



第23图 辻金具・鉸付金具・石製品 (1:2)

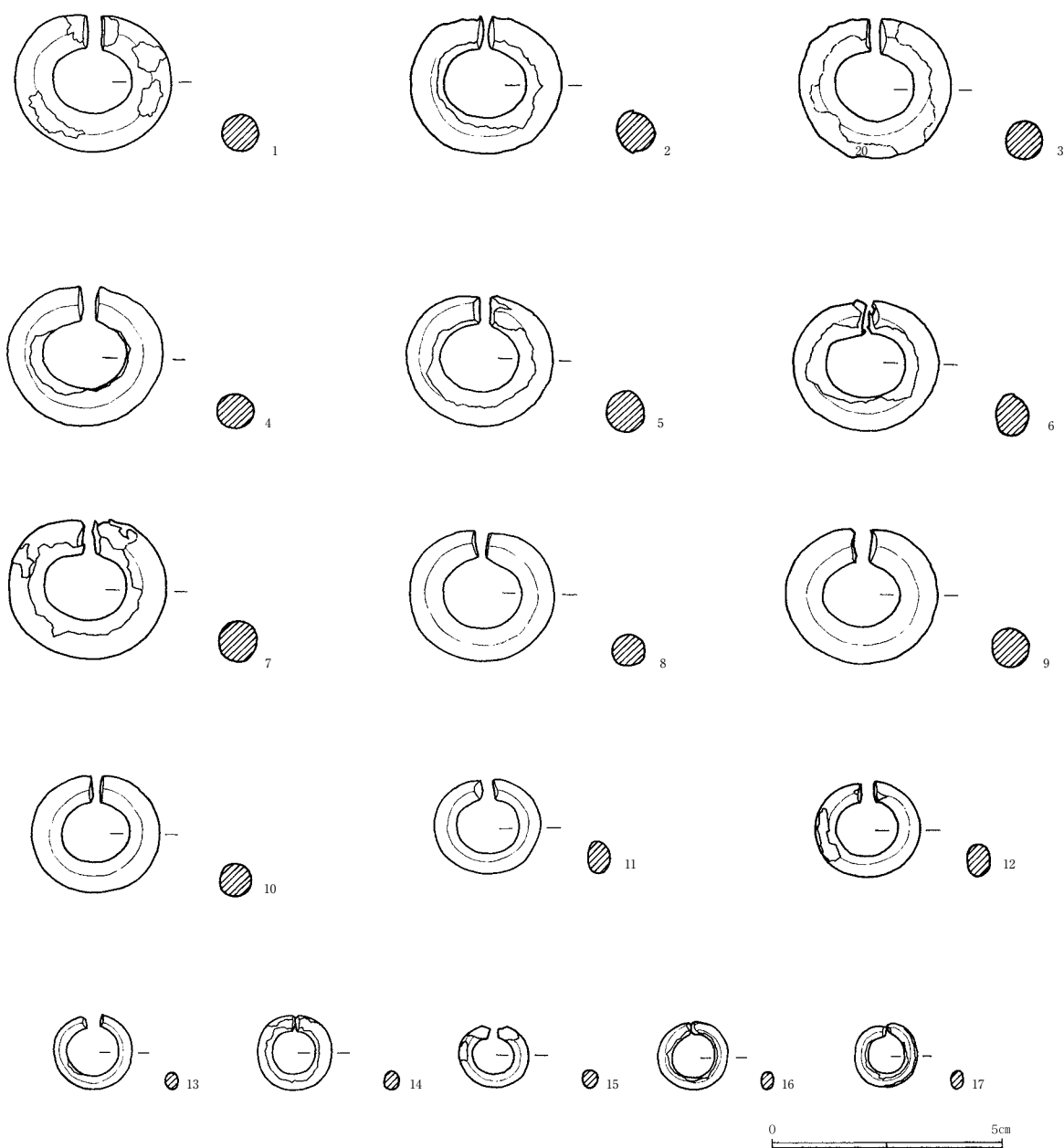
第4節 装身具

1 耳環 (第24図1~17、図版24)

17点が出土している。ここでは大きさから3類に分けて報告する。

1類(1~9) 長さ28.5~30.5mm、幅31.5~34.5mm、重さ20.5~31.3gの大型品。すべて金環とみられる。1は金張りの剥落が著しく内側にわずかに残っているが、8・9は残存していない。寸法・重量からみて5・6は一对であろう。

2類(10~12) 長さ21~26mm、幅23~28mm、重さ8.8~16.7gの中型のもの。寸法・重量からみて11・12は一对とみられる。すべて金環とみられるが、10は金鍍金が残存していない。11は石室内、12は前庭部の出土であるが、一对とみられる。



第24図 耳環 (1:1.5)

3類(13~17) 長さ13.5~16.5mm、幅14~17mm、重さ1.5~2.9gの小型品。すべて金環である。13は金張りの剥落が著しく内側に若干残っている。切れ目の開きが大きい、14と一対とみられる。15は切れ目の端部をわずかに欠損するが、欠損部を考慮すると、金張りの色調が同様な17と一対であろう。

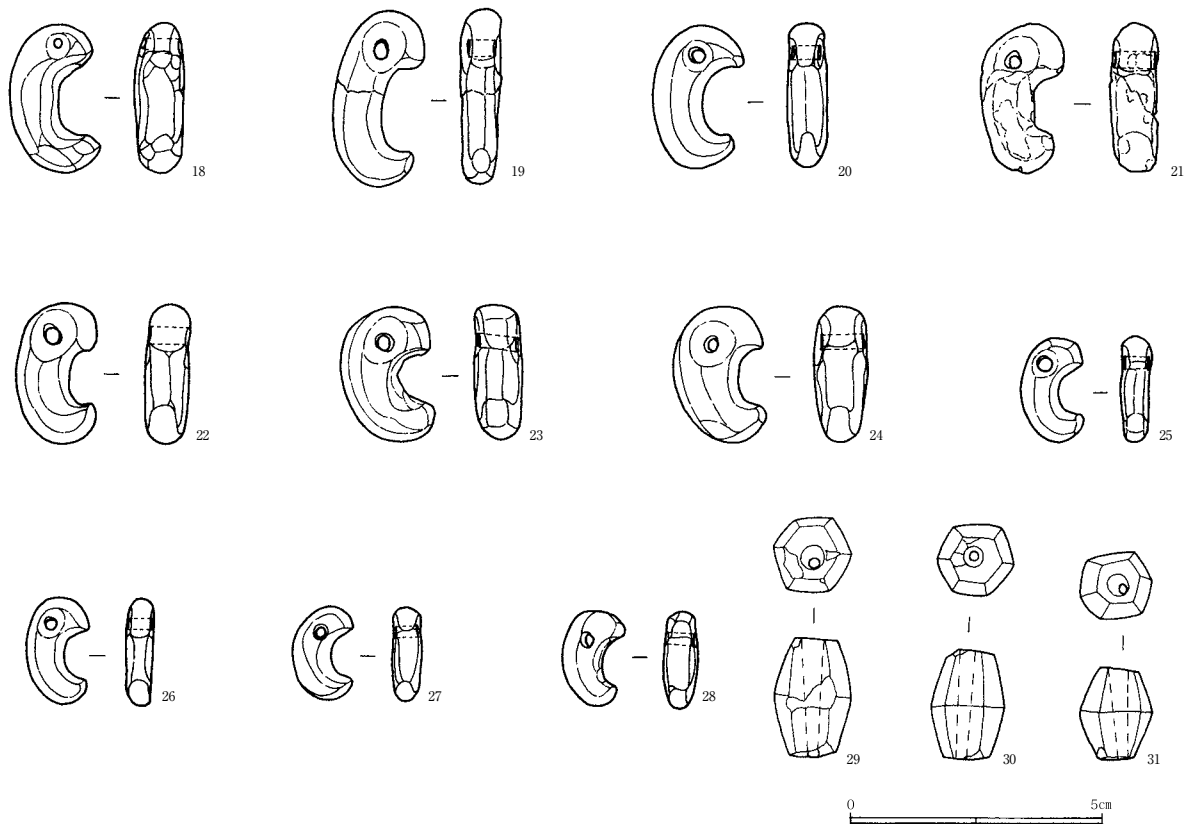
2 勾玉 (第25図18~28、図版24)

11点が出土している。石質の違いから3類に分けて報告する。

1類(18) 碧玉製で1点の出土である。背の一部に赤黒い染み状の箇所がある。腹側が「コ」の字形で胴部の断面形は丸く作られている。頭部は片面穿孔である。仕上げは良好だが各面にわずかながら稜が認められる。

2類(19~22・25・26) 蛇紋岩製とみられる。オリーブグリーンのカーキ色で、白色系の鉱物を多く含むため、表面の文様はこの鉱物が斑となって迷彩状である。なお、この鉱物は脆弱なため19・21は鉱物を境に二つに割れており、表面は脆くざらついて仕上げも良くない。大型品(19~22)・小型品(25・26)があり、大型品の中では19が特に大きい。いずれも腹側が縦長のC字形か「コ」の字形を呈し、頭部は両面を円形に浅くくぼませ、両面穿孔で穴を開けている。

3類(23・24・27・28) 蛇紋岩製とみられるが、2類とは質・色調が異なり、青白色を呈する。24・27は白色が強く、23・28は青黒色が強い。2類同様大型品(23・24)と小型品(27・28)がある。いずれも腹側が「コ」の字形を呈し、頭部は両面を円形に浅くくぼめて両面穿孔で穴を開けている。23・24は頭部が大きく背側の丸いやや太めの形態で、寸法が等しく共通性が強い。27は頭部両面の浅いくぼみを磨きとっている。



第25図 勾玉・切子玉 (1:1.5)

3 切子玉（第25図29～31、図版24）

3点が出土しており、いずれも水晶製である。長さの違いにより大型品（29・30）・小型品（31）の2類がある。孔はすべて片面穿孔で、研磨は孔軸に対して直行する方向で行われている。大形品の29・30は孔内が赤彩されている。

4 白玉（第26図32～66、図版24）

35点が出土している。すべて滑石製で、色調は黒色（34・41・44・54・66）と黄白色（51・57・58・60・61・62・63）のものが少なく、その他の多くは青白色系である。形態は側面にわずかに丸みをつけたもので、扁平でないものと扁平なものがある。寸法の違いにより大型品・中型品・小型品・極小型品の4類がある。

1類（32～35） 長さ9～10mm、幅10mm以上の大型品。いずれも扁平な形態で、32は上下とも浅いくぼみを残している。

2類（36～56） 長さ6～9mm、幅9～10mmの中型品。出土した白玉の中では量的に中心となる大きさのものである。長さ8mm、幅9mmの大きさが標準で、扁平でないものと扁平なもの半々である。

3類（57～65） 長さ6.5～7.5mm、幅7～8mmの小型品。長さ7mm、幅8mmの大きさが標準的で、扁平なものはない。

4類（66） 長さ5mm、幅7.5mmの極小型品。扁平で上下面にやや丸みがあり、中心に細い孔が開けられている。小型ではあるが、形態的に他のものとは異なる存在である。

5 ガラス玉（第26図67～85、図版24）

22点が出土している。白玉（1類）3点と小玉（2類）19点であるが、破損した小玉3点は図示していない。小玉は長さ2～3mm、幅4mm、重さ0.03～0.04gのものが標準的である。ここでは色調を中心に小分類して報告する。なお、色調については城一夫編著『世界慣用語色名色域辞典』（1986年、株式会社光村推古書院発行）を参考とし、表中の色記号は同書による。

1類A（67） 青紫色を呈す楕円形の白玉である。中央の孔の脇に小孔が並列して開けられている。

1類B（68・69） 濃青色を呈し、上下面とも孔の周囲が平坦面をなしている。

2類A（70・73・76・） 濃青色を呈すもの。2類の中ではわずかに重さがある。

2類B（71・72・75・77・79～85） 青色を呈すもの。

2類C（74） 透明な緑青を呈すもの。図示したものの他に破損品が2点ある。

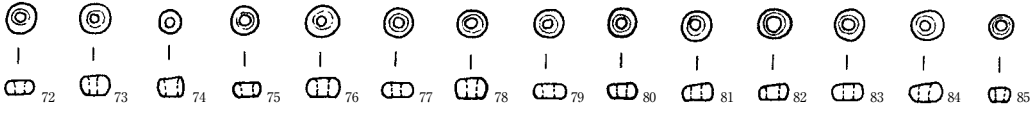
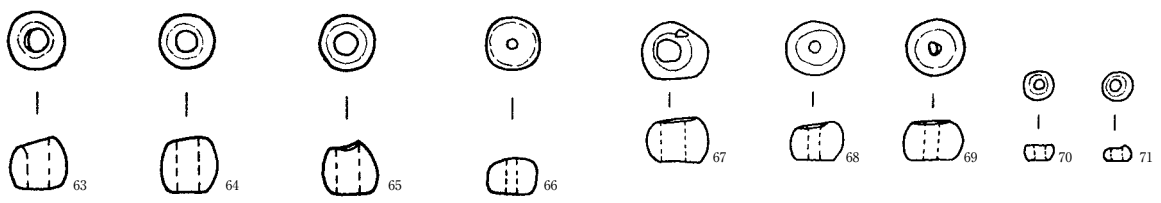
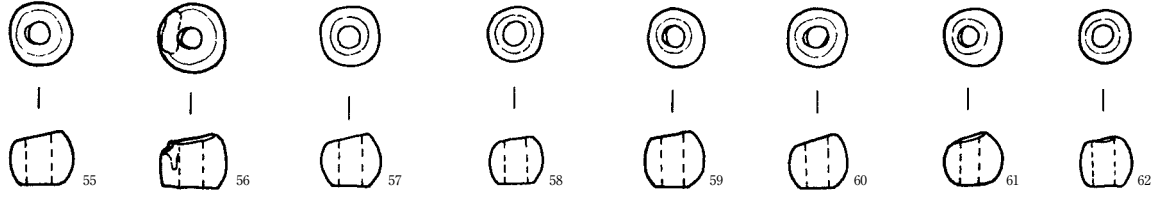
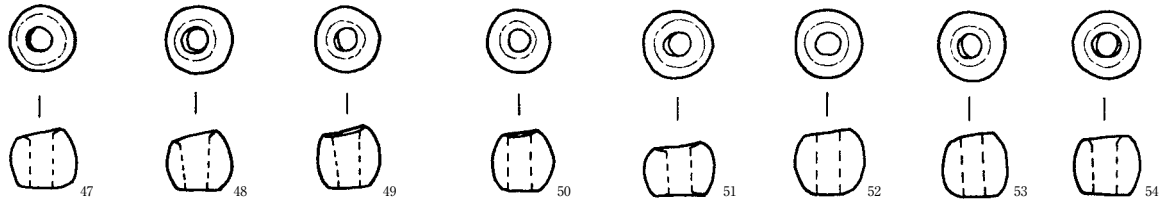
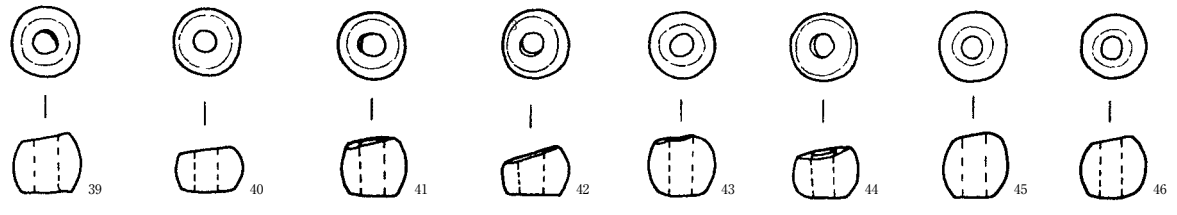
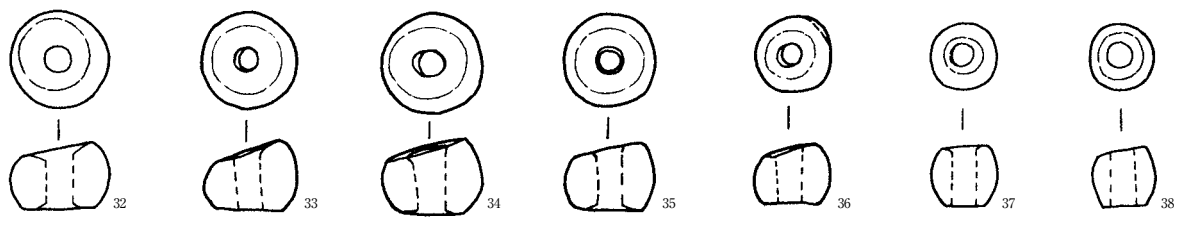
2類D（78） 透明な青緑を呈すもの。

2類D 透明な青色を呈すもの。図示していないが、破損品が1点ある。

第5節 石製品

1 砥石（第23図17、図版19）

長さ7.65cm、幅4.25cm、厚さ0.45cmの台形で、下辺の片角はやや丸みをおびている。側面は平坦だが下辺の断面形は蛤刃状を呈している。上端の中央に径0.4cmの円孔が両面から開けられており、表面では孔から上端にかけて糸擦れ痕とみられる細線が二本認められる。裏面には使用痕と思われる縦位の細線が一本ある。石材は柔らかい質で粘板岩と思われる。砥石であろう。



第26図 白玉・ガラス製白玉・ガラス製小玉 (1:1)

第5章 考察

第1節 石室からみた永明寺山古墳の築造年代

永明寺山古墳の築造された谷には、本古墳の他に、釜石古墳、一本樫古墳が存在する（第27図）。いずれの古墳も石室に用いられている礫は花崗閃緑岩で、永明寺山に露出している礫を用いている。

釜石古墳は、羨道の規模は不明ながら、玄室と羨道部がはっきり分かれる両袖式で、横幅は入り口部分で2.8m、奥壁側が3.0mと奥壁側でやや広がる。奥行きは4.5mである。このようにしっかり玄室を作ってはいるものの、これまでの調査記録に玄室内の敷石は記録がなく、おそらくなかったのではないと思われる。こうしたしっかりした石室をもつ釜石古墳が、3つの古墳の中では最も古いと考えられる。

一本樫古墳は、古くに墳丘が壊されており、残されているのは奥壁の鏡石と側壁の最下段だけである。玄室の規模は、横幅が入口部で1.5m、奥壁側が1.8mで、奥行きは4.9mである。玄室の底面に敷石が施されているのが特徴といえる。

玄室だけを見ると、永明寺山古墳と一本樫古墳はほぼ同規模であるが、永明寺山古墳が側壁の礫を建て積みしていること、玄室底面に敷石がなされていないのに対し、一本樫古墳の方が、側壁最下部に大きな礫を横積みしていること、玄室内に敷石が施されていることなどの違いがみられ、一本樫古墳の方がしっかり築造されたことがうかがえる。

こうした石室構造の違いから、永明寺山古墳と一本樫古墳では、ほぼ同じ時期ながら永明寺山古墳のほうがより新しいといえるであろうか。

3つの古墳を年代順で並べると、釜石古墳が最も古く7世紀の初頭に比定できる。一本樫古墳と永明寺山古墳では、一本樫古墳が若干古くなりそうであるが、それほど年代差はなく、どちらも7世紀中ごろに比定できそうである。

第2節 石室内遺物の出土状況からみた埋葬の特徴

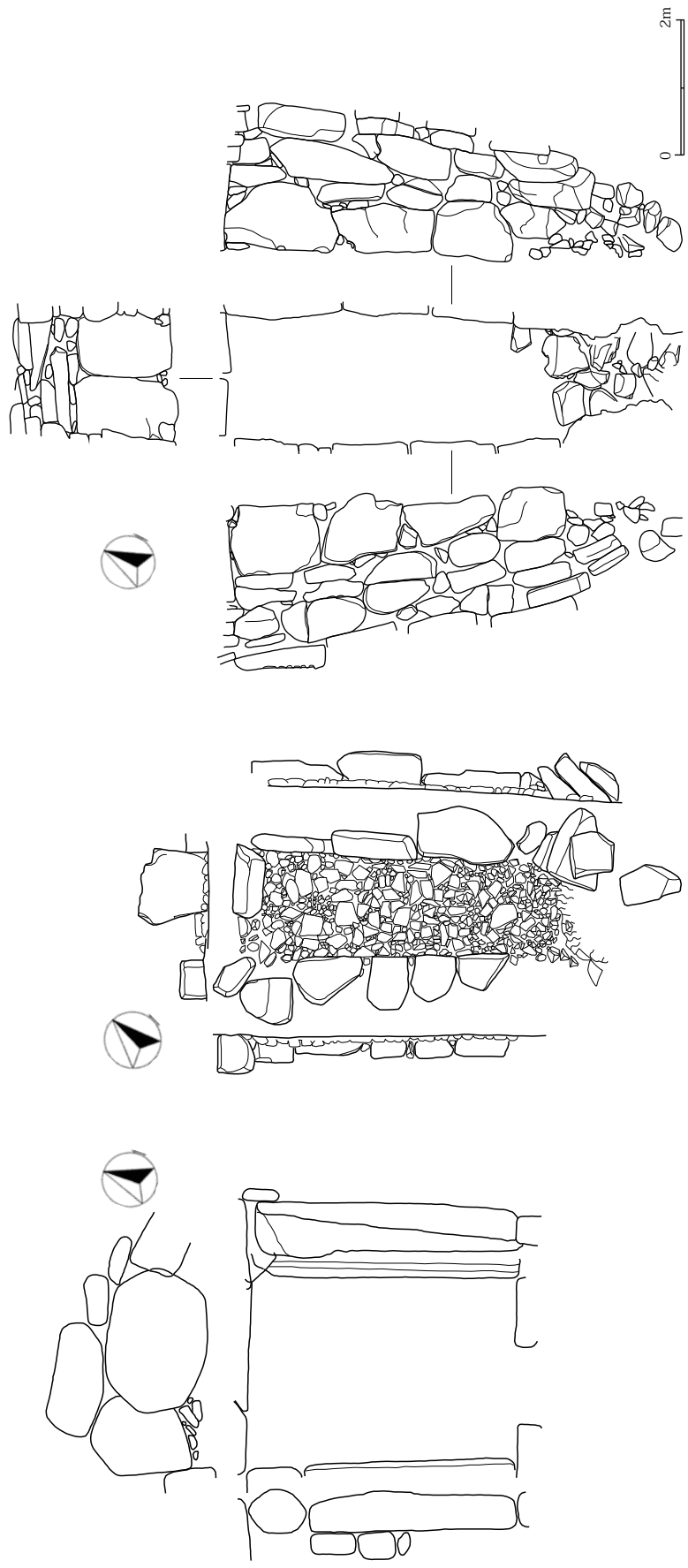
第3章第2節で示した石室内出土遺物の分布を見ると奥壁から開口部に向かって約3.5mの辺りから、急激に遺物が少なくなり、原位置から動いたと思われる遺物がほとんどである。その中でも、壁沿いから直刀が出土していることや、直刀の近くでフラスコ瓶と短頸壺が出土していることなど、石室内部で似たような出土状況も捉えることができる。しかしながら、いずれの直刀も刀装具が出土しておらず、石室奥部分での遺物に一括性も見られない。また、開口部近くから馬具の絞具や辻金具が出土しているが、この辻金具は古墳出土遺物の中でも古手のもので、6世紀末～7世紀初頭とみることができる。

こうした遺物の散在状況から、刀装具などの装飾品は盗掘に遭っている可能性が高く、装飾品以外にも副葬品が盗掘されていると思われる。それに対して、石室内中央東のフラスコ瓶を中心に近くからまとまって出土している装飾用の玉類や耳環、鉄鎌、刀子は、その一括性から原位置と考えられる。加えて、玉類の出土状況をみると、フラスコ瓶から西方向に向かって玉類が出土せず、遺物の出土が偏る場所がある。これらの遺物が原位置もしくはそれに近いとすれば、この場所に被葬者が位置していたとみることができる。

次に直刀の出土地点から考えると、奥壁西角に3号刀が、奥壁東側壁で奥壁に対して直交するように1号刀と2号刀が重なりながら出土している。これら3本の直刀は石室の奥部から出土しており、出土した高さもほぼ同じである。そのため、3号刀と1・2号刀は同時に副葬された可能性が高い。

石室中央東側壁下からは土器13（フラスコ瓶）に寄りかかるような状態で出土した5号刀と開口部寄りに土器8（短頸壺）が上に置かれた状態で4号刀が出土しており、それぞれ直刀と土器が接した状態で出土していることから、刀と土器のセットで副葬されたと考えられる。

6号刀は石室内東側壁下の5号刀と4号刀の間から出土した。位置からいうと4号刀に非常に近いが、出土した高さは6号刀の方が約15cm低い。石室内遺物の出土レベルをみると、遺物のほとんどが奥から開口部に向かっ



釜石古墳

一本榎古墳

永明寺山古墳

第27図 釜石・一本榎・永明寺山古墳の石室 (1:100)

て緩やかに下っており、全体を通して鉄鏃類が下部に、玉類・耳環の装飾品が上部に分かれているように見える。副葬の時点で既に高さに違いがあったか、考えられるとすれば床石が無かったことによる、長期間の土の中での浮き沈みがあったかもしれない。こうした傾向の中で、6号刀だけは他の直刀に比べて出土位置が低く、他の遺物の傾向にそぐわない。このことについてはわかっておらず、他古墳の類例を探る必要がある。

埋葬時期や時間差を考える上で、一本榎古墳・釜石古墳から出土した遺物と比較してみると、土器については同じ器種のもものが少なく、一概には比較できないが、全体を通して永明寺山古墳から出土した土器の方が新しい印象を受ける。当古墳から出土した土器については時期を特定するのが難しいが、土器のみで考えると、石室内中央東側壁から出土したフラスコ瓶が遡っても7世紀中頃と考えられるため、フラスコ瓶より奥の副葬品はそれ以前となる。さらに、開口部で出土した蓋坏が7世紀第2四半期～中頃と考えられることから石室奥の直刀3本が副葬されたのはこの頃と考えられる。

以上を踏まえて考えると、石室内中央付近のフラスコ瓶や直刀、鉄鏃、玉類とともに埋葬された7世紀中頃～後半より以前が初葬と想定でき、それは奥壁の象嵌大刀を副葬された被葬者と考えられる。直刀が3号刀と1・2号刀の2個所に分かれて出土し、5号刀との間の遺物出土分布が薄い範囲が他に比べて広いことも併せると、その空間には初葬として2人埋葬されていた可能性もある。その後、5号刀とフラスコ瓶を副葬された被葬者、そして4号刀と短頸壺を副葬された被葬者の存在が想定できる。このように被葬者が複数人いたと推定できる。4号刀よりも奥壁側には6号刀があることから、6号刀が個別の副葬品であるとするれば、もう一人の被葬者も考えられる。ただし、これらの埋葬の時間的間隔は不明であるが、おそらく継続的に複数世代・人物が本古墳に埋葬されていたと推察できる。

第3節 永明寺山麓古墳群釜石小群における鉄鏃の変遷

1 永明寺山麓古墳群釜石小群

永明寺山麓古墳群釜石小群は、永明寺山の南山腹から裾野にかけて形成された丘陵状の高台に位置している。釜石小群から山一つ東に越えた谷には矢穴小群と中矢穴小群、反対に西側の山脚を越えた高台上原東・西の二つの小群が位置し、永明寺山麓古墳群はこれら5小群で構成される。釜石小群ではこれまでに釜石古墳、一本榎古墳が発掘されており、今回発掘された永明寺山古墳に加え、記録に残る沢口古墳、一本榎古墳と同一古墳ともいわれるギンザラゾウス古墳など、5基前後の古墳が知られている。

発掘されている釜石小群の三つの古墳の位置は、丘陵の入口部付近の標高812mの地点に一本榎古墳、それより北270m、比高差43mの中段に釜石古墳、同古墳から西70m、標高875mの最上段に永明寺山古墳が位置する。年代的には釜石古墳が7世紀初頭、一本榎古墳が7世紀中頃とみられており（宮坂1986）、今回の永明寺山古墳は一本榎古墳とほぼ同期であるが、一本榎古墳に後続すると考えられる。

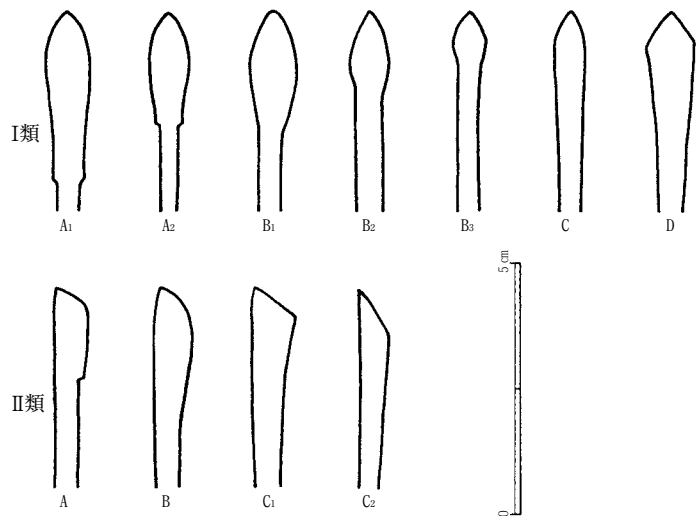
今回、永明寺山古墳が発掘されたことで、これら3基の古墳で構成される釜石小群の内容がより明らかなものとなってきた。そこで、ここでは釜石小群に関する諸問題の中でも、永明寺山古墳の副葬品で資料的に充実している鉄鏃に焦点を当て、永明寺山古墳の鉄鏃の分類と変遷を軸に釜石古墳、一本榎古墳の鉄鏃の検討を行い、釜石小群における鉄鏃の変遷を考えてみたい。

2 永明寺山古墳の尖根鏃の分類

永明寺山古墳の鉄鏃は平根鏃10点、尖根鏃106点の計116点が副葬されたものの数とみられる。それらについては前章で鏃身部の形態から分類を試みてあるので、ここでは尖根鏃の鏃身部形態についての概要を記す(第28図)。両刃式(I類)

- I類A1 側縁部がS字を描く大型のもの
- I類A2 側縁部がS字を描く小型のもの
- I類B1 柳葉形の撫間で大型のもの

- I 類 B 2 柳葉形の撫関で中型のもの
- I 類 B 3 柳葉形の撫関で小型のもの
- I 類 C 柳葉形で無関のもの
- I 類 D 圭頭で無関のもの
- 片刃式 (II 類)
- II 類 A 1 背と平行する刃部に関をもつ大型のもの
- II 類 A 2 背と平行する刃部に関をもつ小型のもの
- II 類 B 刃部にふくらの付く無関のもの
- II 類 C 1 切出し形刃部の大型で無関のもの
- II 類 C 2 切出し形刃部の小型で無関のもの



第28図 永明寺山古墳の尖根鍬の鍬身部形態

3 尖根鍬の形態変化

ここでは、信濃における後期・終末期古墳副葬鉄鍬の体系的分析を行った平林大樹氏の研究（平林2013）を援用し、尖根鍬の鍬身部の変遷観を捉えておきたい。

まず両刃式（I 類）については、「時期が下るものほど刃部の縮小化と関の退化が進行する」という観点で捉えたと、A 類→B 類→C・D 類という変化の方向で理解されよう。さらに各類においても A 類は A 1→A 2、B 類は B 1→B 2→B 3 と変化の方向を捉えることができるであろう。

A 類は刃部の縮小化に伴い、A 1 では頸部が太く長さも 8 cm 程度で一定していたものが、A 2 では太い頸部でもより長いものや、逆に細く短いものが認められ、寸法にバラつきが生じている。

B 類は B 1 が 2 点、B 2 が 13 点、B 3 が 4 点で量的に B 2 が主体である。主体となる B 2 は頸部の短いものと長いものが同数程度あるが、長いものは鍬身部から頸部までの長さの中で、鍬身部の小型化ということと関係があるとみられる。いずれにしても頸部幅の細いものが主体となることから、細身のものを新相に位置づけることができるものとする。

片刃式（II 類）は、「関の退化と外形の鋭角化という二つの変化の指標」に、I 類と同様、鍬身部の小型化という視点を加えて捉えたい。こうした観点からは、関のある A 類→関が消滅してふくらのつく B 類→ふくらが取れて直線的な一辺を刃部とする切出し形の C 類、という変遷と同時に、A 類は A 1→A 2、C 類は C 1→C 2 への変化の方向性を認めることができるものとする。

以上のようにみると、尖根鍬の形態変化は、鍬身部が比較的大きく、関が明確で頸部の太く短いものが先行し、やがて関が消失し、鍬身部が次第に小型化して頸部も細く軽量化していくことがうかがえる。こうした鍬身部の退化の背景について、平林氏は製作技法上の観点から、幅のある棒状鉄素材から幅のない棒状鉄素材が求められるようになったと推察している（平林2013）。鉄鍬の生産量増大に伴う合理化、省力化の方向を示唆する現象と考えられる。

4 尖根鍬の変遷と組成

前項でみた尖根鍬の形態変化を基に、各形態の変遷と組成から永明寺山古墳の鉄鍬の消長を考えてみたい。なお、各形態の石室内での分布状況、及び一括出土における各形態の組成関係については第 3 章第 2 節で詳述してある。

I 期：両刃式 I 類 A 1 がある。側縁部が S 字を描く大きな鍬身部に関のつく最も古相の形態で、頸部も太く短い。点数も 16 点と充実している。この段階での片刃式（II 類）は明らかでない。

Ⅱ期：両刃式はⅠ類Aの小型化したⅠ類A2と、Ⅰ類A1の側縁部S字形から柳葉形撫闕へと変化した大型のⅠ類B1がある。この段階でⅠ類A2とⅠ類B1は鍬身部の大きさが類似する。一方の片刃式はⅠ類A2・Ⅰ類B1と鍬身長が同等のⅡ類A1・Ⅱ類Bが現れる。Ⅱ類Aは関を残す点でより古相であるが、永明寺山古墳では2点だけの出土であり、数期にわたる形態とみられるものの系統関係を明らかにしえない。ここではⅠ類A2・Ⅰ類B1と鍬身長が同等で、かつⅡ類Bと鍬身幅が同等な点を評価して位置づけたい。Ⅱ期はⅠ類A2とⅡ類Bが主体となる。

Ⅲ期：両刃式はⅠ類B1の小型化したⅠ類B2、片刃式はⅡ類A1の小型化したⅡ類A2とⅡ類Bの変化形であるⅡ類C1となる。Ⅰ類B2とⅡ類A2は鍬身長が同等で、Ⅱ類C1の鍬身幅は、両刃式ではあるもののⅠ類B2に潜在する幅広系のもと同等である。Ⅲ期はⅠ類B2が主体である。

Ⅳ期：両刃式はⅠ類B3、Ⅰ類Bの変化形であるⅠ類C・Ⅰ類Dとなり、片刃式はⅡ類C2である。Ⅰ類C・Ⅱ類C2が中心となり、ともに頸部は細く長いつくりとなっている。

以上、永明寺山古墳の鉄鍬の消長をⅠ期～Ⅳ期の変遷で考えてみた。それら各期の鉄鍬の数はⅠ期～Ⅲ期までほぼ同数で推移しているが、Ⅳ期にはⅠ類C・Ⅱ類C2が中心となって数もそれまでの倍に増えている。また、永明寺山古墳では各期を通じて尖根両刃式が主体となっている。

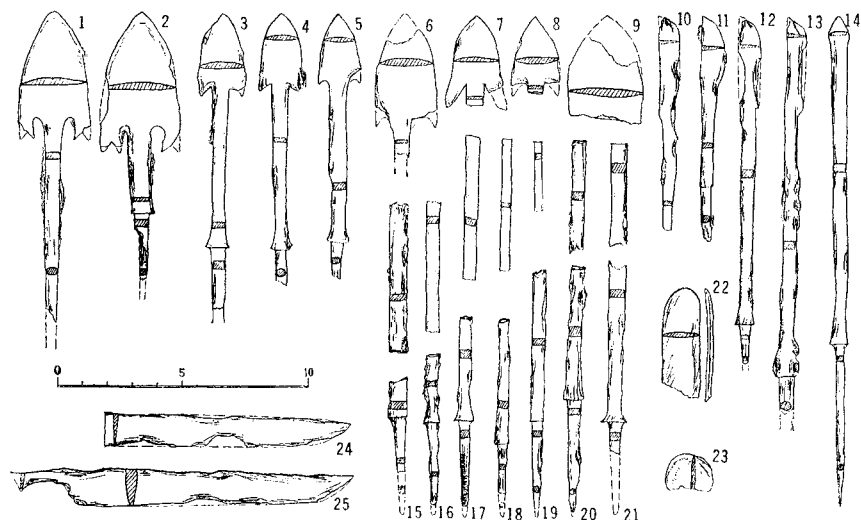
5 折り曲がった鉄鍬

鉄鍬は116点を数えるが、その中に故意に折り曲げられたとみられる鉄鍬が3点（第20図70・75・第21図86）ある。70・75はⅡ類BでⅡ期、86はⅡ類C2でⅣ期である。いずれも長頸の尖根片刃式であり、鍬身部下と頸部で「コ」の字状に折り曲がっている。70と86は茎部が欠損しているものの、残存部に木質が残っていないことから、矢柄から外された後に曲げられたものと考えられる。屈曲箇所数と折り曲がりの角度からみて、尖根鍬を用いた同様の行為がⅡ期とⅣ期に行われたことが推察される。70・86は石室中央部、75は石室右奥の1号刀脇の出土である。葬送儀礼の一つと考えられるが、これまで議論されたことのない事例であり、今後の資料の蓄積を待ちたい。

6 釜石古墳と一本榎古墳の鉄鍬

(1) 釜石古墳の鉄鍬

釜石古墳は昭和25年の発掘と翌年の工事の際に発見されて保管されていた遺物を宮坂光昭氏が実測し、報告し



第29図 釜石古墳の鉄鍬 (1:3)

ている（第29図）（宮坂1967）。今回、保存されてきた遺物を実見できたので、所見をまじえて検討する。

平根有頸式：1・2は両翼の末端に挟り込みのある飛燕形に近い形態とされている。実見したところ2は台形直角関である。6は3～5・8とともに1・2の小型の形式とされたものであるが、鎌身関の下辺端部に段状の切り込みである重抉を施した長三角形の平根鎌である。9は鎌身部の破損品で、大型であるところから1・2と同型のものと報告されている。

平根短茎式：7は逆刺がやや開き気味で、長頸の飛燕鎌であろうと報告されている。しかしながら、実見したところでは長さ1cmの茎部をもつ短茎式である。

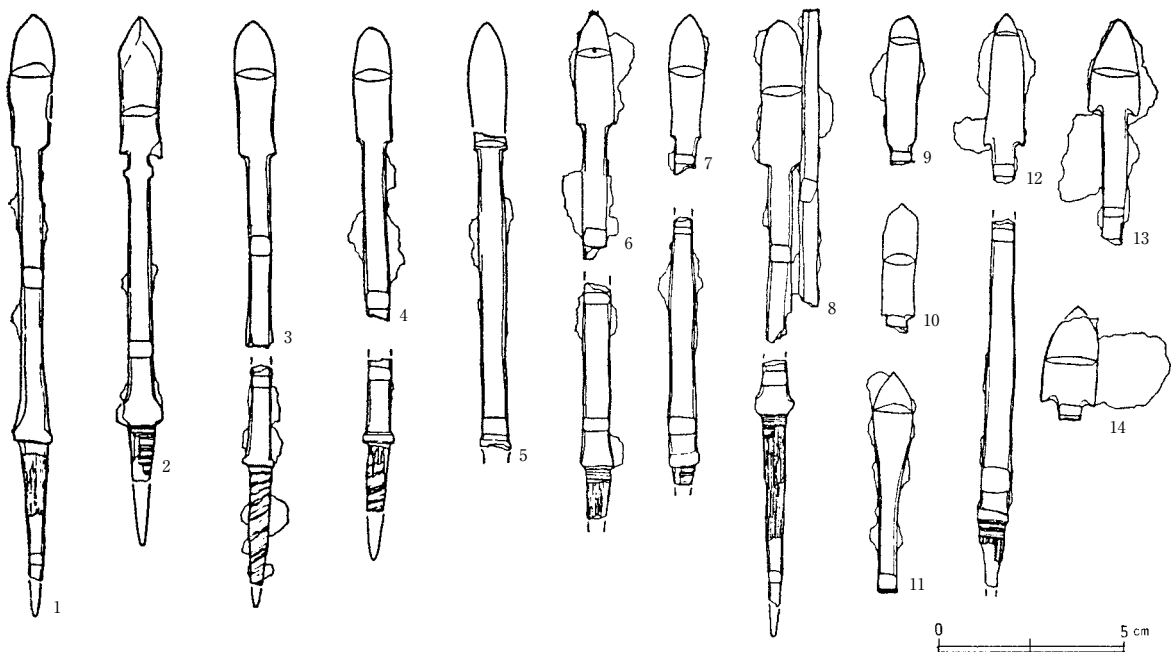
尖根両刃腸抉式：3～5・8は1・2の小型の形式とされたものである。側縁部にふくらのある両刃式で、鎌身関に腸抉をもつ。実測図の計測では鎌身長2.9～3.1cm、鎌身幅1.6～2cmで大きさにまとまりがある。頸部は6cmほどでやや短く、4とみられるものの関は棘関であり、いずれも太いつくりとなっている。釜石古墳の尖根式はこの両刃腸抉式が主体となるようである。

尖根両刃式：14は小型のかなり鋭い三角形の尖頭鎌とされ、頸部は長く12cmと報告されている。永明寺山古墳Ⅰ類B3に相当する。

尖根片刃式：10～13が片刃鎌で、このうち10・11は腐食が激しく、刃部と頸部の境もわからないと報告されている。形の分かるのは12・13とされ、刃部断面形は三角、記録に残る略図で「片刃小爪掛尖頭鎌」とされていたものである。片刃鎌4点の内、報告から鎌身部の形態が信頼でき、「片刃小爪掛尖頭鎌」とされていた12・13は永明寺山古墳のⅡ類Aである。実測図の計測では12が推定鎌身長3.6cm、鎌身幅0.9cm、13は推定鎌身長3.6cm、鎌身幅0.8cmで、2例とも永明寺山古墳Ⅱ類Aより大型のつくりである。なお、実測図に示された頸部破片の篋被は、実見したところほとんどが棘関であった。

（2）一本榎古墳の鉄鎌

一本榎古墳は昭和47年に発掘され、翌年その概要が報告された（茅野市教育委員会1973）。報告によると、鉄鎌は床面全面から点々と出土し、点数は断片を含め90余点である。しかし原形をうかがえる資料は少なく、平根式とみられる飛燕形や逆刺のついたものは認められず、尖頭鎌と柳葉形のものがあると報告された。その後、昭和61年に刊行された『茅野市史』上巻ではこの時出土した鉄鎌が再検討され、形状の判明するものが図示された



第30図 一本榎古墳の鉄鎌（1:2）

(宮坂1986)。図示(第30図)された鉄鏃はいずれも尖根両刃式であり、平根式と尖根片刃式のものはない。ここでは図示されたもののうち鏃身部の明らかなものに番号を付して検討する。

尖根両刃式：1・3・4・5・6・7・8・9・10は柳葉形で側縁部にふくらがついてS字を描き、関が斜関となる。このうち4・6・8・9・10は片側側縁部のふくらが弱い。実測図の計測ではいずれも鏃身長が3cm以上あり、特に8は3.8cmと大きい。同様に1・3・8は鏃身幅がやや大きい。頸部は太く、長さは1が7.7cm、5が7.8cmである。永明寺山古墳Ⅰ類A1であるが、頸部は永明寺山古墳のものより短い。一本榭古墳ではこのⅠ類A1が主体である。

もう一点の11はふくらのある柳葉形撫関である。鏃身長2.5cm、鏃身幅1.05cmを計測する。永明寺山古墳Ⅰ類B1である。

尖根両刃腸抉式：2・12は柳葉形の鏃身部で、関が弱い腸抉となる。2は頭部が角張っているが12はふくらがついている。側縁部は永明寺山古墳Ⅰ類AのS字を描く側縁部へ繋がる形態のように思われる。2は鏃身長3.7cm、鏃身幅1.1cm、12は鏃身長4cm、鏃身幅0.95cmで、側縁部がS字を描く両刃式と同等の大きさである。

13・14は側縁部にふくらのつく鏃身部の関に腸抉をもつ。13は鏃身長2.5cm、鏃身幅1.3cm、14は鏃身長推定2.6cm、鏃身幅1.45cmで、同類の釜石古墳の尖根両刃腸抉式に比べるとやや小型である。

7 釜石小群の鉄鏃の変遷

ここでは釜石古墳と一本榭古墳の尖根鏃の特徴を永明寺山古墳のⅠ～Ⅳ期との関係に位置づけ、釜石小群における鉄鏃の変遷を考えてみたい。

釜石古墳での尖根鏃については両刃腸抉式と「片刃小爪掛尖頭鏃」とされた片刃鏃が注目される。主体となるのは両刃腸抉式で、この形式は永明寺山古墳の両刃式には認められない。逆に釜石古墳の両刃式の中には永明寺山古墳の最古相であるⅠ期のⅠ類A1がない。また、釜石古墳の「片刃小爪掛尖頭鏃」とされた片刃鏃は永明寺山古墳Ⅱ類Aであるが、永明寺山古墳Ⅱ期のⅡ類A1に比べると鏃身部が大きく、より古相にあるといえる。

一方、釜石古墳と一本榭古墳との関係では側縁部にふくらのつく両刃腸抉式が共通する。両刃腸抉式は釜石古墳では主体的であるが一本榭古墳では量的にⅠ類A1に次ぎ、しかも一本榭古墳の例は鏃身部が小型化しており、より後出的である。また、釜石古墳には一本榭古墳で主体的なⅠ類A1がない。釜石古墳にⅠ類A1が認められないことは永明寺山古墳との関係でも指摘してある。よって、釜石古墳の鉄鏃は両刃腸抉式を主体とするもので、一本榭古墳、永明寺山古墳の鉄鏃に先行する段階のものと考えられる。

上述のように、一本榭古墳の鉄鏃はⅠ類A1を主体に両刃腸抉式が伴うものであり、時間的には釜石古墳に後続し、Ⅰ類A1を特徴とする永明寺山古墳Ⅰ期に相当すると考えられる。ただし、永明寺山古墳Ⅰ期には一本榭古墳で客体的存在である両刃腸抉式が認められない。また、一本榭古墳にはⅠ類AのS字を描く側縁部へ繋がると思われる柳葉形の両刃腸抉式がある。加えて、両刃腸抉式の頸部は永明寺山古墳Ⅰ類A1よりわずかに短く、全体として永明寺山古墳Ⅰ期よりも若干の古相を帯びているように思われるが、ここではⅠ類A1の主体的な存在を評価して同一段階のものと考えておきたい。

以上の検討結果から、永明寺山麓古墳群釜石小群における鉄鏃の変遷を、釜石古墳→一本榭古墳・永明寺山古墳Ⅰ期→永明寺山古墳Ⅱ期→永明寺山古墳Ⅲ期→永明寺山古墳Ⅳ期と捉えたい。そしてこの変遷観を平林氏の「信濃における細根式の変遷」(平林2013)に対応させると、釜石古墳(信濃Ⅰ期)6世紀末、一本榭古墳・永明寺山古墳Ⅰ期(信濃Ⅱ期)7世紀初頭～7世紀前半、永明寺山古墳Ⅱ・Ⅲ期(信濃Ⅱ～Ⅲ期)7世紀中葉、永明寺山古墳Ⅳ期(信濃Ⅲ期)7世紀後半～8世紀初頭になると考えられる。

8 平根鏃の評価

平根鏃は釜石古墳と永明寺山古墳にある。平根鏃の変遷については平林氏の分析成果(平林2013)、及び両古墳にある重抉の有頸式・短茎式の位置づけ(平林2014)を基礎とし、本稿での変遷観による尖根鏃との共伴関係、

及び石室内での出土位置などを評価することで示すことができるものとする。ちなみに、永明寺山古墳の平根鍬は、石室左奥部でⅠ類Fの7、Ⅰ類Hの9、Ⅱ類Aの10が尖根鍬Ⅰ類A1と共存している。また、Ⅰ類Eの6も石室の奥部からの出土である。石室の中央部ではⅠ類Cの3が尖根鍬Ⅰ類B2・C、Ⅱ類C1・C2と一括出土している。それらに対し、石室の入口部付近からはⅠ類Aの1、Ⅰ類Bの2、Ⅰ類Dの4・5が出土しているが、特に尖根鍬との共存関係はない。

引用・参考文献

- 茅野市教育委員会 1973『一本榎遺跡—永明寺墓地公園取付道路内埋蔵文化財調査概報—』
平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鍬の変遷」『物質文化』第93号
平林大樹 2014「信濃における後期・終末期古墳副葬鍬の生産と流通」『信濃』第66巻第9号
宮坂光昭 1967「長野県茅野市釜石古墳」『信濃』第19巻第4号
宮坂光昭 1986「茅野地域の古墳」『茅野市史上巻—原始古代—』茅野市

第6章 調査のまとめ

1 永明寺山古墳の年代と被葬者の埋葬時期

第5章第1節において、釜石古墳、一本榎古墳、永明寺山古墳の石室構造の比較から、永明寺山古墳は釜石古墳、一本榎古墳に続く7世紀中ごろの築造年代が示されている。そこで、ここでは副葬品の中でも最も古相の象嵌鍔装着大刀の年代観を検討し、古墳築造年代と初葬の時期について考えてみたい。

永明寺山古墳からは象嵌文様の施された鍔を装着した直刀が2本出土している。こうした象嵌鍔の編年については橋本博文氏の研究（橋本1993）があるので、ここでは同氏の研究により1号刀・2号刀の年代観を考えてみたい。

まず、2号刀の象嵌文様は橋本氏分類のC字状文系列に属するもので、文様はC字状文系列第三段階の事例として紹介されている群馬県筑波山古墳例と、筑波山古墳例より古相とされる同県岩鼻古墳例にもっとも近い。岩鼻古墳例は六窓透し鍔であるが、圏線を挟んで外縁には細かいC字状文が一行に配され、透し孔間には縦線で区画された中に二個ずつ計四個ずつのC字状文が納められている。一方の筑波山古墳例は八窓透し鍔で、縁辺には整ったC字状文が一行に施され、透し孔間のC字状文は3個となるが、縁取りは認められる。

このように説明された筑波山古墳例、岩鼻古墳例と2号刀との違いは透し孔間の文様構成であり、2号刀の透し孔間の文様は岩鼻古墳例と筑波山古墳例を繋ぐ、両者の間に位置する様相を持つものである。圏線を挟んで外縁に一行に配されたC字状文は岩鼻古墳例が細かく密であるのに対し、筑波山古墳例と2号刀は単位が大きく配列も粗い。また、透し孔間のC字状文は三個で、この点は筑波山古墳例と同じである。こうした点において、2号刀は岩鼻古墳例と筑波山古墳例の間でもより筑波山古墳例に近い時期のものと考えられる。よって、岩鼻古墳例、2号刀、筑波山古墳例の3例には時間的前後関係を認めるが、形式的なまとまりとして橋本氏のC字状文系列第三段階に位置するものと捉えたい。橋本氏は第三段階に6世紀第4四半期の年代観を与えている。

もう一つの1号刀の鍔は八窓透で平に象嵌文様はないが、鍔縁の文様は橋本氏の渦巻文系列第四段階とされる愛知県東禅寺2号古墳例の鍔縁の文様と同じである。東禅寺2号古墳例の鍔縁の文様は半円重弧文が千鳥状に並びと説明されている。橋本氏はこの渦巻文系列第四段階に6世紀末の年代観を与えている。

このように、副葬品の中で年代的に古相の遺物は上にみた象嵌鍔装着の1・2号刀で、6世紀末前後の年代が考えられる。また、鉄鍬の中には7世紀初頭の年代が想定されるものがある。これらの古相の遺物は石室内でも比較的奥壁に近い場所からの出土である。一方、石室中央部より入り口側では7世紀後半とみられる土器のほか尖根鍬がまとまって出土している。入口部付近では盗掘や攪乱により動かされたとみられる遺物もあるが、7世紀末前後とみられる平根鍬がまとまって出土している。

さて、前述の石室構造からみた古墳築造の年代観と、それ以前の年代観をもつ副葬品との時間的關係からは、初葬された被葬者の生存中に古墳の築造が始まり、完成後に被葬者が亡くなって初葬が行われ、その際に古相の年代観をもつ直刀や鉄鏃などが副葬されたと考えられる。そうとすれば、古墳築造と古相の副葬品、及び初葬の時間的關係を矛盾なく理解することができるであろう。そしてその後、土器や尖根鏃、さらに平根鏃の新しい年代観の遺物に示されるように1～2回の追葬が行われ、7世紀末頃に古墳の機能が閉じられたと考えられる。

2 永明寺山古墳の性格

諏訪地方で横穴式石室の古墳が築造されるようになる7世紀前半の永明寺山麓古墳群では、釜石古墳・一本榎古墳がその初期の古墳とされている。両古墳の副葬品では、釜石古墳が獅嚙文環頭大刀と馬具、一本榎古墳は直刀と尖根鏃が被葬者の性格を特に表しているとされている。これに続く年代の古墳は矢穴3号古墳、武将の古墳などである。これら後出の古墳にはカマス切先大刀や細身大刀といった実用的な無装大刀と飛燕鏃が伴っている。こうした古墳の編年と副葬品の検討から、永明寺山麓古墳群は釜石古墳の初現以来、伝統的に武人的性格をもつ集団によって築造されたと考えられている（宮坂1986）。

かつて藤森栄一氏は、古墳群を営んだ集団の生活形態や文化様相を考古学的方法で明らかにする目的から、茅野市を中心とする諏訪湖東南岸地域の古墳群の研究を行った。その中で永明寺山腹、上川河床、長峰台地、守屋山麓の四つの古墳群の検討を行い、永明寺山麓古墳群については尚武的性格の氏族によって営まれたと考えた（藤森1939）。上に紹介した宮坂光昭氏の見解は、この藤森氏の研究を基礎としてその後の新しい調査成果を踏まえ、再度、永明寺山麓古墳群のもつ武人的性格を問題としたものであった。

さて、永明寺山古墳は釜石古墳に始まる釜石小群の歴史の中では最後に築造されたとみられる古墳である。釜石古墳・一本榎古墳の被葬者像については前述したとおりであるが、釜石小群最後の永明寺山古墳の被葬者像についても、象嵌罽を装着する大刀をはじめとする6本の直刀、戦闘実戦用の多量な尖根鏃といった副葬品から、先行する釜石古墳・一本榎古墳の被葬者像と同様に考えられる。若干の資料のため今後の資料の蓄積に待ちたいが、尖根鏃の中にみられた折り曲がった鉄鏃は、弓術に秀でた武人の葬送儀礼を物語る考古資料ではないかと思われる。こうした永明寺山古墳の副葬品の特徴からも、永明寺山麓古墳群釜石小群は、藤森・宮坂の先学が論じたように、伝統的に武人的性格の色濃い集団によって営まれたとみることができるであろう。

永明寺山古墳をはじめとする釜石小群を営んだ集団の本拠となる地域は、第1章において略述したように、釜石小群から望まれる塚原を中心とする一帯であったと考えられる。この地域には構井・阿弥陀堂遺跡、永明中学校校庭遺跡、田裏遺跡があるが、これまでに古墳時代後期の住居址が確認され、集落の存在が推定されてきたのは構井・阿弥陀堂遺跡である。その構井・阿弥陀堂遺跡において、平成17・18年度に行われた県道大年線建設に伴う長野県埋蔵文化財センターの発掘調査で、推定どおり、ついに古墳時代後期集落の一角を捉えることができた。

集落の発掘された場所は上川の河岸段丘上で、横内の段丘崖とJR中央本線の間の平地である。この時の調査では竪穴住居址6軒、掘立柱建物跡2棟、土坑2箇所等が発掘され、6世紀後半から7世紀にかけての集落の一部が明らかとなり、「永明寺山麓の古墳時代後期集落を解明する上で、第1歩になる成果であった」（藤原2008）。永明寺山麓古墳群でもおそらく釜石小群を営んだ集落の一つではないかと考えられるが、集落は相当広範囲に及ぶとみられ、詳細はなお今後の調査に委ねられている。周辺での調査の積み重ねで集落の生活実態が明らかにされるとともに、尚武的性格の氏族と捉えられた集団の性格が、古墳と集落の両者から立体的に検討できるよう、今後の調査成果が期待されることである。

今回の永明寺山古墳の発掘調査は、古墳群研究史上重要な研究舞台となった諏訪湖東南岸地域の古墳の中でもこれまでにない良好な資料を提供することとなり、永明寺山麓古墳群の全体像により着実に迫ることができる、大きな学問的成果をもたらしたと考えられる。

3 復元整備された永明寺山古墳

永明寺山古墳は今回の墓地区画造成に伴って新たに発見された古墳である。墓地の増設が何年来の懸案となっていた茅野市にとって、永明寺山公園墓地での区画の増設と早期完成は喫緊の課題であった。そうした情勢の中で発見されたにもかかわらず、永明寺山古墳は発掘後に破壊されて造成されることなく、当初から現地に復元整備される計画で事業が進められた。発掘調査は平成25年度に行われ、この過程で石室から出土した直刀の鏝に銀象嵌文様のあることが判明し、長野県下でも例の少ないことから、永明寺山古墳とその出土品は大いに注目されることとなった。そこで、出土した鉄器類は翌年度の事業として保存修理が行われて保存が図られた。そして、永明寺山古墳発掘調査事業は本年度が3年目の最終年度となり、本報告書の刊行をもって終了する。

市街地でも市役所を中心とする平坦地は「塚原」を地名とする地域だけに、一帯は幾つかの古墳が築造された土地である。それらの古墳の中には現存する市史跡の塚ノ越古墳、同じく市史跡の王経塚古墳があり、川久保古墳も発掘後現地に保存されている。また、失われた古墳でも姥塚古墳や大塚古墳など、碑や説明板が建てられて経緯の判明しているものもある。永明寺山はこの市街地の背後に続く山地で、公園や公園墓地などが設けられ、広く市民に親しまれる場所となっている。また、永明寺山は古墳群の営まれた山であり、市史跡の釜石古墳、同じく市史跡の矢穴古墳、石室が移転保存されている一本榎古墳など、こちらにも墳丘や石室を残す古墳が幾つか現存している。このため、市街地から永明寺山にかけて、それらの古墳や遺跡・史跡をルートに古墳巡りを楽しむ市民も少なくない。

こうした環境の中で永明寺山古墳が復元整備された意義は大きい。市街地に近いこともあり、発掘中や古墳見学会には多くの市民が関心をもって参加された。参加された市民の中に、古墳巡りの一つの拠点ができることを喜ばれていた方がおられた。また、古墳眼下の永明小学校では児童が復元後いち早く永明寺山古墳を訪れ、現地で学芸員の話聞く授業を行った。このように、市民の近くにある復元整備された永明寺山古墳がこれからの市民生活に大いに活用され、茅野市の人づくり、まちづくりにいかされることを願っている。

最後に、調査期間中、長野県立歴史館からは調査方法指導のため西山克己氏を派遣していただいた。また、調査終了後には直刀の鏝に象嵌のある可能性のあることから、白沢勝彦氏にX線写真の撮影を行っていただき、あわせて保存修理の方法についてご指導いただいた。ここに銘記して感謝申し上げる次第である。

引用・参考文献

高橋透 2011「7世紀の東日本における湖西産須恵器瓶類の流通」『駿台史学』第143号 明治大学史学地理学会

橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集刊行会

藤森栄一 1939「信濃諏訪地方古墳の地域的研究—考古学上よりしたる古墳墓立地の観方—」『考古学』第10巻第1号（『古墳の地域的研究』所収、永井出版企画、1974）

藤原直人 2008『（都）大年線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—茅野市内—構井・阿弥陀堂遺跡』長野県埋蔵文化財センター

宮坂光昭 1986「古墳時代の茅野」『茅野市史上巻—原始古代—』茅野市

第1表 鉄鍬観察表

図番号	全長	鍬身部						頸部		筐被	重さ (g)	備考	
		形式	分類	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	長さ				
16	1	10.70	平根有頸	I A	平造	4.50	3.40	0.30	短頸	2.70	棘	20.8	腸袂五角形
	2	11.90	"	I B	平造	4.10	3.20	0.20	短頸	3.10	棘	19.9	腸袂三角形
	3	(10.70)	"	I C	平造	3.70	(3.10)	0.20	短頸	1.80	直角	13.4	五角形 重扶
	4	(8.40)	"	I D	平造	3.80	3.00	0.20	短頸	2.30	直角	9.6	三角形 重扶
	5	(9.40)	"	I D	平造	(3.70)	3.30	0.20	短頸	2.20	棘	10.1	三角形 重扶
	6	12.10	"	I E	平造	4.90	(2.80)	0.20	短頸	3.20	直角?	14.1	腸袂長三角形
	7	11.50	"	I F	平造	4.10	(2.50)	0.20	短頸	2.50	直角?	13.4	腸袂長三角形
	8	(3.70)	"	I G	平造	(3.40)	2.00	0.30	短頸	—	—	6.1	長三角形
	9	(2.70)	"	I H	平造	2.30	3.60	0.30	短頸	—	—	5.5	飛燕式
	10	(5.70)	平根短茎	II A	平造	5.70	3.40	0.20	—	—	—	8.9	五角形 孔 重扶
17	11	(13.30)	尖根	両刃 A1	片丸造	3.40	0.95	0.20	長頸	8.10	棘	9.1	
	12	(10.40)	"	両刃 A1	片丸造	3.10	0.85	0.25	長頸	—	—	6.2	
	13	17.30	"	両刃 A1	片丸造	3.30	0.85	0.30	長頸	8.70	棘	9.9	
	14	(10.90)	"	両刃 A1	片丸造	3.60	0.95	0.25	長頸	—	—	12.1	
	15	(15.00)	"	両刃 A1	片丸造	3.40	1.00	0.20	長頸	9.30	棘	10.1	
	16	17.60	"	両刃 A1	片丸造	3.40	0.90	0.30	長頸	9.20	棘	10.3	
	17	(15.70)	"	両刃 A1	片丸造	3.40	0.90	0.25	長頸	8.80	棘	10.1	
	18	17.00	"	両刃 A1	片丸造	3.05	0.95	0.25	長頸	8.50	棘	8.1	
	19	(15.70)	"	両刃 A1	片丸造	3.30	0.90	0.30	長頸	8.70	棘	108.0	
	20	(15.00)	"	両刃 A1	片丸造	3.40	0.85	0.25	長頸	8.80	棘	8.3	
	21	(7.05)	"	両刃 A1	片丸造	3.30	1.10	0.35	長頸	—	—	7.0	
	22	(6.30)	"	両刃 A1	片丸造	3.10	1.00	0.25	長頸	—	—	5.0	
	23	(3.70)	"	両刃 A1	片丸造	3.75	1.05	0.35	長頸	—	—	2.3	
	24	(7.40)	"	両刃 A1	片丸造	3.60	1.00	0.25	長頸	—	—	4.3	
	25	(7.20)	"	両刃 A1	片丸造	3.70	1.05	0.30	長頸	—	—	5.0	
	26	(7.00)	"	両刃 A1	片丸造	3.25	0.95	0.20	長頸	—	—	4.2	
	27	15.60	"	両刃 A2	片丸造	2.50	0.90	0.25	長頸	10.20	棘	10.1	
	28	14.80	"	両刃 A2	片丸造	2.25	0.80	0.25	長頸	8.05	棘	7.5	
18	29	15.60	"	両刃 A2	片丸造	2.35	0.80	0.20	長頸	9.50	棘	8.6	
	30	14.20	"	両刃 A2	片丸造	2.20	0.80	0.15	長頸	7.75	直角?	7.2	
	31	(12.40)	"	両刃 A2	片丸造	2.45	0.90	0.15	長頸	8.40	棘	8.6	
	32	(6.90)	"	両刃 A2	片丸造	2.45	1.05	0.20	長頸	—	—	3.8	
	33	(15.60)	"	両刃 B1	片丸造	2.40	0.95	0.25	長頸	9.60	棘	10.0	
	34	16.40	"	両刃 B1	片丸造	2.40	0.85	0.25	長頸	9.10	棘	7.4	
	35	(13.70)	"	両刃 B2	片丸造	1.70	0.80	0.25	長頸	8.90	棘	8.0	
	36	(9.10)	"	両刃 B2	片丸造	2.10	0.85	0.20	長頸	—	—	5.0	
	37	(11.60)	"	両刃 B2	片丸造	1.70	0.95	0.25	長頸	8.80	棘	7.4	
	38	(17.30)	"	両刃 B2	片丸造	2.00	0.80	0.25	長頸	11.50	棘	12.4	
	39	16.00	"	両刃 B2	片丸造	1.70	0.85	0.25	長頸	10.10	棘	11.4	
	40	(13.30)	"	両刃 B2	片丸造	1.50	0.80	0.20	長頸	10.70	棘	9.6	
	41	17.10	"	両刃 B2	片丸造	1.65	0.75	0.25	長頸	10.70	棘	13.7	
	42	(15.60)	"	両刃 B2	片丸造	1.50	0.75	0.20	長頸	9.50	棘	9.5	
	43	(14.10)	"	両刃 B2	片丸造	2.00	0.70	0.25	長頸	10.20	棘	13.4	
	44	15.40	"	両刃 B2	片丸造	1.90	0.65	0.20	長頸	9.50	棘	11.5	
19	45	15.50	"	両刃 B2	片丸造	1.75	0.60	0.20	長頸	8.80	棘	10.2	
	46	(11.20)	"	両刃 B2	片鑄造	1.40	0.65	0.25	長頸	9.10	棘	9.4	
	47	(14.20)	"	両刃 B2	片丸造	1.30	0.70	0.20	長頸	9.30	棘	9.9	
	48	14.30	"	両刃 B3	片丸造	1.10	0.65	0.20	長頸	8.90	棘	8.5	
	49	(15.20)	"	両刃 B3	両丸造	0.90	0.50	0.20	長頸	—	—	8.3	頸関節欠
	50	(8.70)	"	両刃 B3	片丸造	1.00	0.65	0.25	長頸	—	—	5.7	
	51	(8.60)	"	両刃 B3	片丸造	0.90	0.60	0.20	長頸	—	—	5.5	
	52	(12.70)	"	両刃 C	片丸造	0.60	0.85	0.20	長頸	11.10	棘	8.3	
	53	(15.40)	"	両刃 C	両丸造	0.40	0.65	0.15	長頸	12.70	棘	11.1	
	54	16.90	"	両刃 C	片丸造	0.55	0.70	0.20	長頸	11.30	—	12.9	
	55	18.40	"	両刃 C	両丸造	0.85	0.70	0.25	長頸	11.30	棘?	15.8	
	56	16.20	"	両刃 C	両丸造	0.35	0.45	0.20	長頸	11.40	棘	8.8	
	57	(15.00)	"	両刃 C	片丸造	0.80	0.60	0.20	長頸	10.90	棘	10.2	
	58	(13.30)	"	両刃 C	片鑄造	0.70	0.60	0.20	長頸	10.90	棘	9.1	
	59	(15.10)	"	両刃 C	片丸造	0.70	0.65	0.20	長頸	10.10	棘	10.4	
	60	(14.20)	"	両刃 C	両丸造	0.60	0.65	0.20	長頸	10.90	棘	10.8	
	61	(13.40)	"	両刃 C	片丸造	0.85	0.60	0.20	長頸	11.15	棘	12.4	
20	62	(9.40)	"	両刃 C	片丸造	2.00	0.75	0.20	長頸	—	—	5.1	
	63	(8.00)	"	両刃 C	片丸造	2.00	0.85	0.20	長頸	—	—	5.6	

	64	16.00	"	両刃 D	片丸造	0.50	0.90	0.20	長頸	11.60	直角?	15.3	
	65	(15.00)	"	両刃 D	切刃造	0.60	0.95	0.20	長頸	11.70	棘	9.8	
	66	(12.00)	"	片刃 A1	平片刃造	2.75	0.80	0.20	長頸	—	—	7.7	
	67	(14.00)	"	片刃 A2	平片刃造	1.80	0.65	0.30	長頸	9.90	棘	10.8	
	68	15.80	"	片刃 B	平片刃造	2.05	0.70	0.25	長頸	8.90	棘	10.8	
	69	(15.80)	"	片刃 B	平片刃造	2.60	0.80	0.30	長頸	8.80	棘	9.6	
	70	(16.70)	"	片刃 B	平片刃造	2.00	0.85	0.20	長頸	12.90	棘	10.6	折り曲げ
	71	(12.80)	"	片刃 B	平片刃造	3.10	0.70	0.20	長頸	9.10	棘	8.3	
	72	(14.20)	"	片刃 B	平片刃造	2.20	0.85	0.30	長頸	10.30	棘	9.8	
	73	(16.60)	"	片刃 B	平片刃造	(2.10)	0.80	0.20	長頸	10.00	棘	13.0	
	74	(4.50)	"	片刃 B	平片刃造	3.00	0.95	0.30	長頸	—	—	2.9	
	75	(6.60)	"	片刃 B	平片刃造	3.00	0.95	0.20	長頸	—	—	4.5	折り曲げ
21	76	(8.10)	"	片刃 B	平片刃造	(2.60)	0.85	0.25	長頸	—	—	5.6	
	77	(9.10)	"	片刃 C1	平片刃造	1.20	0.95	0.20	長頸	—	—	5.5	
	78	(14.10)	"	片刃 C1	平片刃造	2.35	0.85	0.30	長頸	8.35	棘	13.1	
	79	15.60	"	片刃 C1	平片刃造	1.50	0.85	0.25	長頸	9.70	棘	10.1	
	80	(17.40)	"	片刃 C2	平片刃造	2.90	0.75	0.25	長頸	10.10	棘	11.2	頸部折れ
	81	(14.70)	"	片刃 C2	平片刃造	(0.80)	0.75	0.20	長頸	10.20	棘	10.4	
	82	(14.00)	"	片刃 C2	平片刃造	1.90	0.70	0.30	長頸	11.30	棘	10.8	
	83	(15.90)	"	片刃 C2	平片刃造	(2.00)	0.70	0.25	長頸	8.85	棘	10.8	
	84	(13.80)	"	片刃 C2	平片刃造	2.35	0.60	0.25	長頸	8.60	棘	8.6	
	85	(13.60)	"	片刃 C2	平片刃造	(1.10)	0.65	0.25	長頸	11.20	棘	11.6	
	86	(13.50)	"	片刃 C2	平片刃造	(1.00)	0.55	0.15	長頸	10.80	棘	7.3	折り曲げ
	87	(13.50)	"	片刃 C2	平片刃造	1.70	0.60	0.20	長頸	13.50	棘	11.4	
	88	(13.40)	"	片刃 C2	平片刃造	1.25	0.60	0.30	長頸	10.10	棘	11.9	
	89	(7.70)	"	片刃 C2	平片刃造	1.00	0.60	0.15	長頸	—	—	5.1	
	90	(13.60)	"	片刃 C2	平片刃造	(1.50)	0.50	0.20	長頸	10.80	棘	11.6	
	91	(14.60)	"	片刃 C2	平片刃造	2.00	0.50	0.25	長頸	8.70	棘	9.8	

第2表 装身具一覧表

図番号	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)	孔径 (mm)	材質等	備考
24図	1	耳環	30.0	34.0	31.3		金環
	2	"	30.0	33.0	24.0		"
	3	"	30.5	33.0	28.7		"
	4	"	30.5	34.0	26.9		"
	5	"	29.0	32.0	25.3		一對?
	6	"	28.5	32.0	25.5		"
	7	"	30.5	34.5	29.6		"
	8	"	28.5	31.5	20.5	金環?	金鍍金残存せず
	9	"	29.5	33.0	30.8	"	金鍍金残存せず
	10	"	26.0	28.0	16.7	"	金鍍金残存せず
	11	"	21.0	23.0	9.8	金環	一對?
	12	"	21.0	23.0	8.8	"	"
	13	"	16.5	17.0	2.6	"	一對?
	14	"	16.5	16.5	2.9	"	"
	15	"	13.5	15.0	1.7	"	色調やや白味、端部欠損
	16	"	15.0	15.0	2.1	"	"
	17	"	14.0	14.0	1.5	"	色調15と同じ
25図	18	勾玉	30.0	11.0	5.7	2.0	碧玉
	19	"	35.0	14.0	5.7	3.5	蛇紋岩
	20	"	29.0	12.0	4.6	3.0	"
	21	"	30.0	13.0	4.8	3.5	"
	22	"	28.0	12.0	5.5	3.0	"
	23	"	27.0	13.0	6.9	3.5	"
	24	"	27.0	13.0	6.7	3.5	"
	25	"	21.0	9.0	2.0	3.0	"
	26	"	21.0	10.0	1.8	2.5	"
	27	"	19.0	7.0	1.6	3.0	"
	28	"	19.0	9.0	1.9	3.0	"
	29	切子玉	24.0	15.0	6.7	5.0	水晶
	30	"	22.0	15.0	5.8	3.5	"
	31	"	19.0	15.0	4.3	4.0	"
26図	32	白玉	9.0	13.0	2.2	3.5	滑石
	33	"	10.0	13.0	1.9	3.0	"
	34	"	10.0	13.5	2.7	4.0	"

35	"	9.0	12.5	1.8	3.5	"	
36	"	8.0	10.0	1.1	3.0	"	
37	"	8.0	9.0	0.9	3.0	"	
38	"	8.0	9.0	0.7	3.0	"	
39	"	8.0	9.0	1.0	3.0	"	
40	"	6.0	9.0	0.7	3.0	"	
41	"	8.0	9.0	1.1	3.0	"	
42	"	6.5	9.0	0.7	3.0	"	
43	"	8.0	9.0	0.8	3.0	"	
44	"	7.0	9.0	0.8	3.0	"	
45	"	9.0	9.0	1.0	3.0	"	
46	"	8.0	9.0	0.9	3.0	"	
47	"	8.0	9.0	0.9	3.0	"	
48	"	8.0	9.0	0.8	3.0	"	
49	"	8.5	9.0	0.8	3.0	"	
50	"	8.0	9.0	0.7	3.0	"	
51	"	7.0	9.0	0.7	3.0	"	
52	"	9.0	9.0	1.0	3.0	"	
53	"	9.0	9.0	0.8	3.0	"	
54	"	8.0	9.0	0.9	3.0	"	
55	"	7.0	9.0	0.6	3.0	"	
56	"	7.0	9.0	0.9	3.0	"	
57	"	7.0	8.0	0.5	3.0	"	
58	"	6.5	7.5	0.4	3.0	"	
59	"	7.5	8.0	0.5	3.0	"	
60	"	7.0	8.0	0.5	3.0	"	
61	"	7.0	8.0	0.5	3.0	"	
62	"	7.0	7.0	0.4	3.0	"	
63	"	7.0	8.0	0.4	3.0	"	
64	"	7.0	7.5	0.5	3.0	"	
65	"	7.0	7.5	0.5	3.0	"	
66	"	5.0	7.5	0.2	1.5	"	
67	ガラス白玉	8.0	9.0	0.5	3.5 1.0	ガラス	色記号5PB4/10 2孔並列
68	"	5.5	8.0	0.4	1.5	"	" 5PB4/09
69	"	5.0	8.0	0.48	1.5	"	" 5PB4/09
70	ガラス小玉	2.0	4.0	0.05	1.5	"	" 7.5B3/10
71	"	2.0	4.0	0.03	1.5	"	" 7.5B4/04
72	"	2.0	4.0	0.04	1.5	"	" 7.5B4/04
73	"	3.0	4.0	0.07	1.5	"	" 7.5B3/10
74	"	3.0	3.0	0.03	1.5	"	" 7.5B6/03
75	"	2.0	4.0	0.04	1.5	"	" 7.5B4/04
76	"	3.0	4.5	0.04	1.5	"	" 7.5B3/10
77	"	2.0	4.0	0.04	1.5	"	" 7.5B4/04
78	"	3.0	4.0	0.03	2.0	"	" 7.5B6/04
79	"	2.0	4.0	0.04	1.5	"	" 7.5B4/04
80	"	2.0	4.0	0.03	1.5	"	" 7.5B4/04
81	"	2.5	4.0	0.03	1.5	"	" 7.5B4/04
82	"	2.0	4.5	0.04	2.0	"	" 7.5B4/04
83	"	2.0	4.0	0.03	1.5	"	" 7.5B4/04
84	"	3.0	4.5	0.04	1.5	"	" 7.5B4/04
85	"	2.0	3.5	0.04	1.5	"	" 7.5B4/04
図なし	"					"	" 7.5B6/03 破損品
図なし	"					"	" 7.5B6/03 破損品
図なし	"					"	" 7.5B6/05 破損品

写真図版

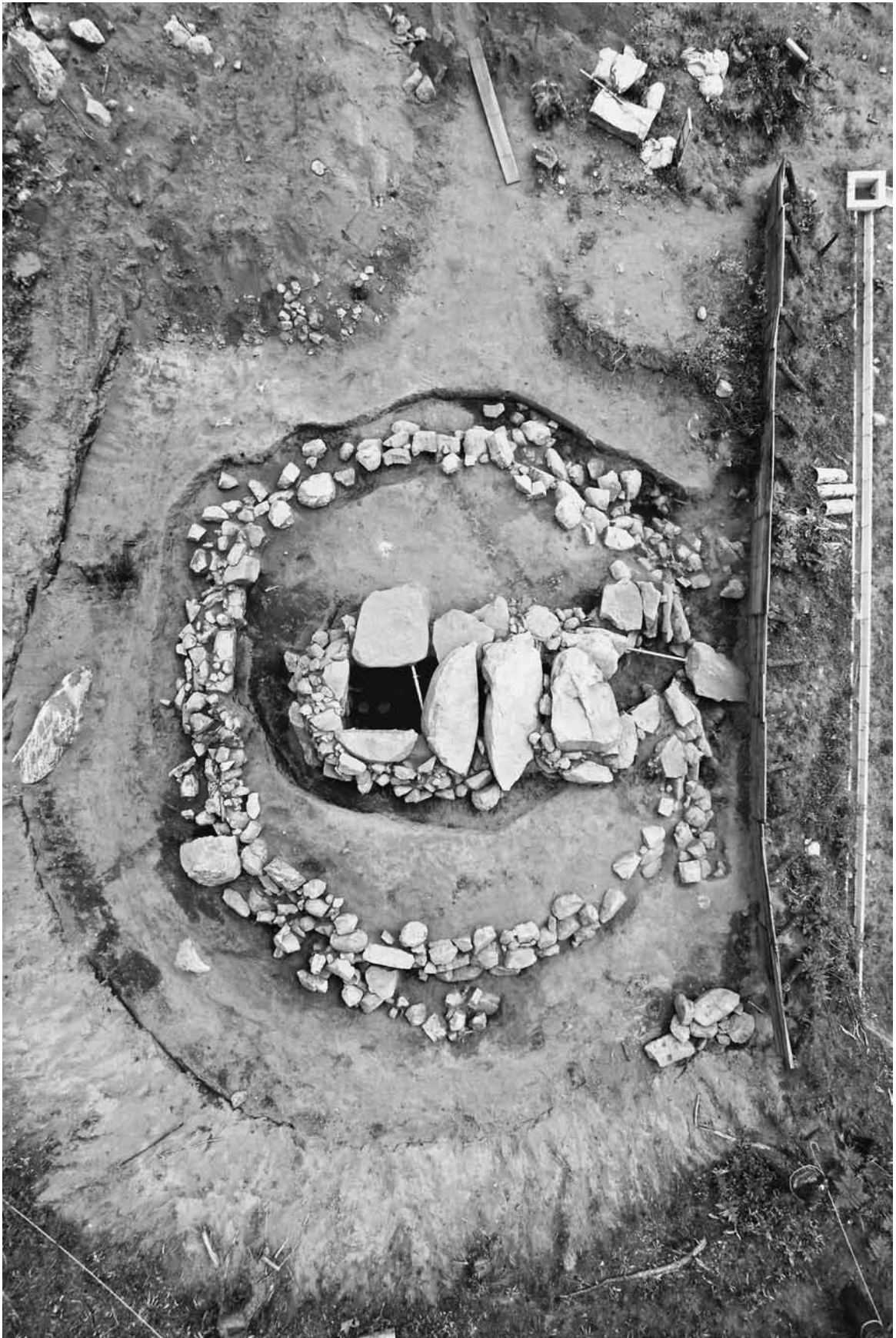


1 永明寺山古墳全景（北西側上空から）



2 永明寺山古墳全景（南西側上空から）

図版2



永明寺山古墳全景（上空から）



1 永明寺山古墳全景（南側上空から）



2 永明寺山古墳全景（東側上空から）

図版4



1 調査前の古墳（東側から）



2 古墳の位置とトレンチ（東北側から）

1 試掘調査の状況（東北側から）



2 試掘調査1トレンチ



3 試掘調査2トレンチ



図版6



1 試掘調査4トレンチ



2 試掘調査5トレンチ



3 試掘調査6トレンチ



1 発掘調査全景



2 石室入口部検出状況

図版8



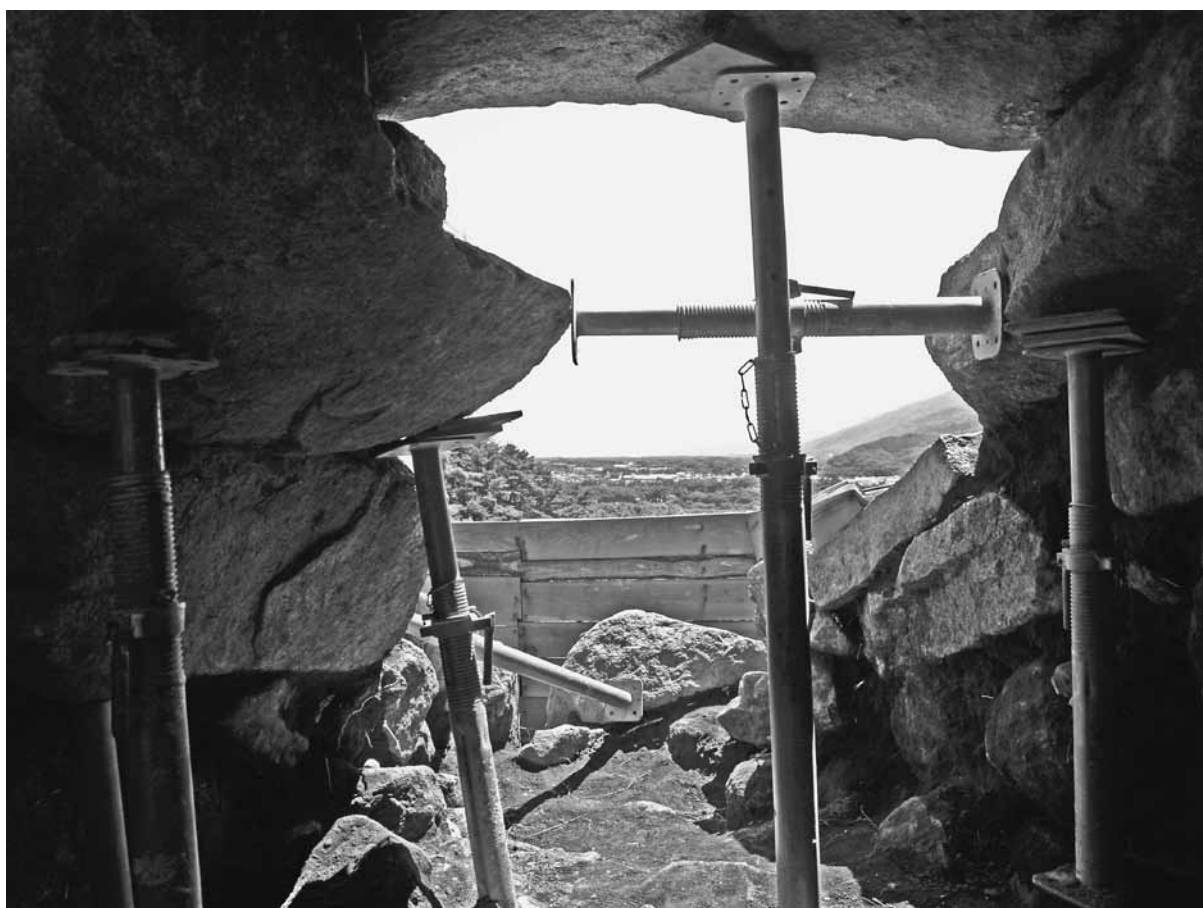
1 石室・外護列石検出状況（南西側から）



2 石室・外護列石検出状況（東側から）



1 石室正面



2 石室内から望む開口方向

図版10



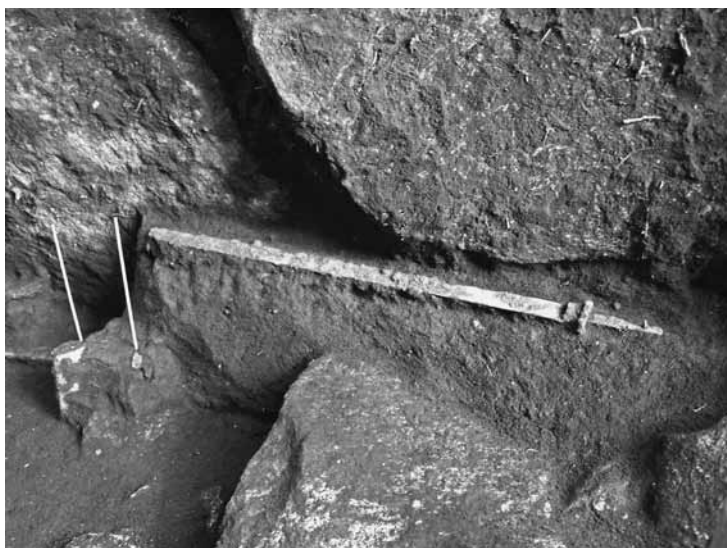
1 石室内遺物出土状況（南東側から）



2 石室内遺物出土状況（北西側から）



1 石室内奥壁部遺物出土状況



2 石室内入口部東壁下遺物出土状況

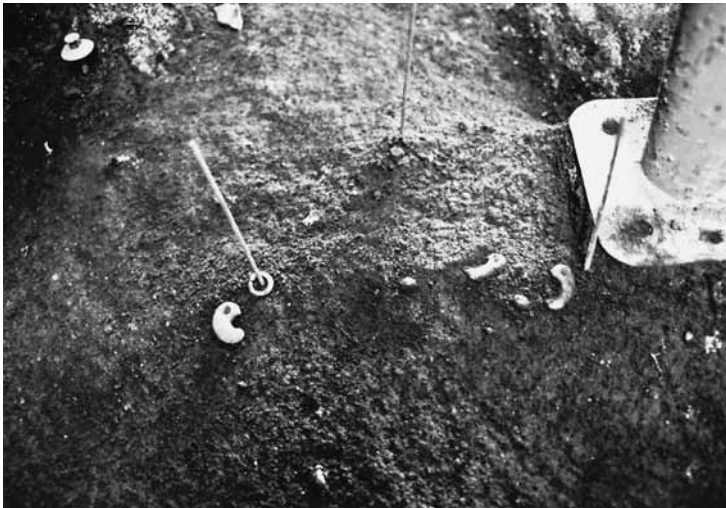


3 石室内中央部東壁下遺物出土状況

図版12



1 耳環・鉄鏃出土状況



2 玉類・鸚目金具出土状況



3 石室入口部土器出土状況



1 古墳保存復元工事（1）



2 古墳保存復元工事（2）



3 古墳保存復元工事（3）



4 古墳保存復元工事（4）

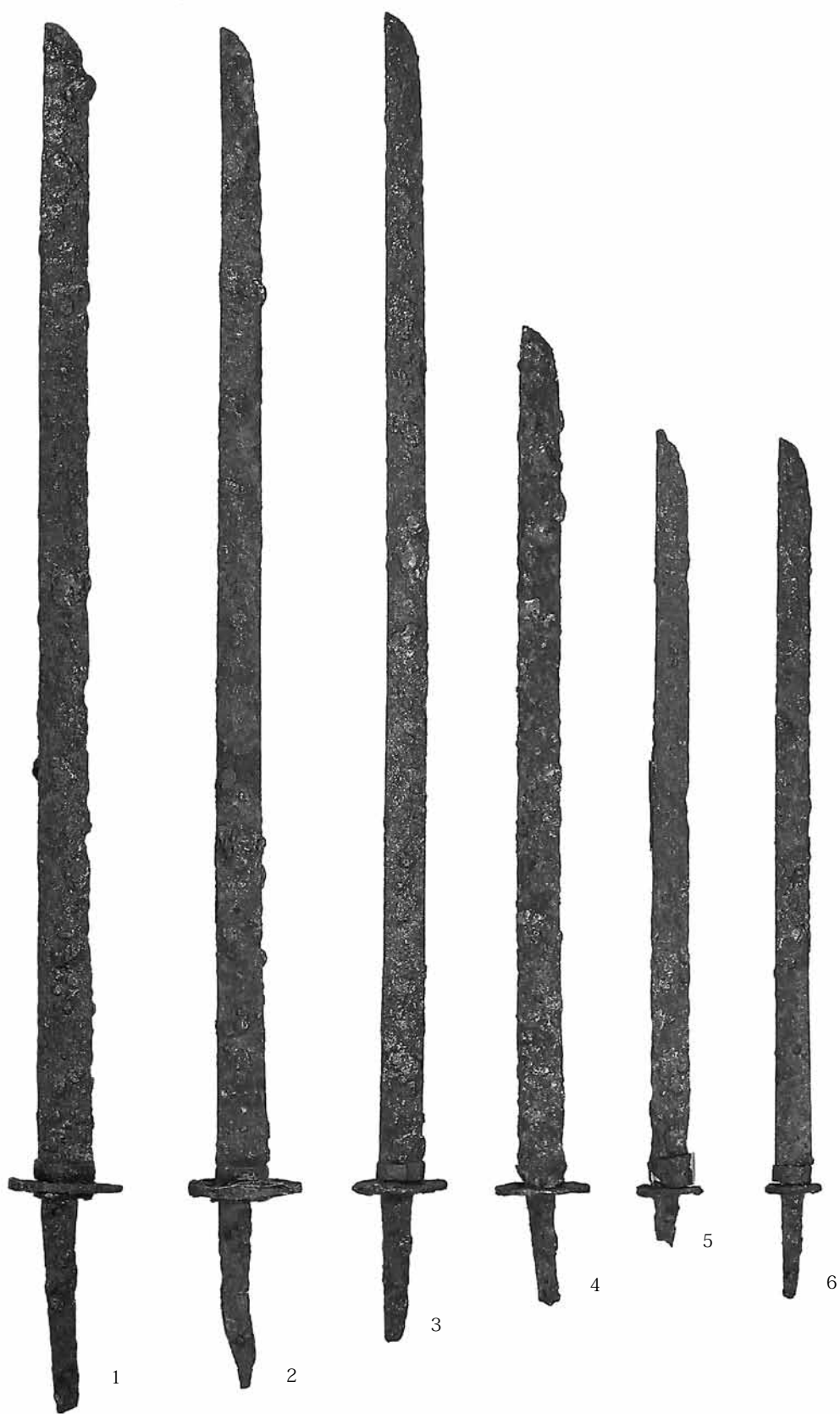


5 保存復元された永明寺山古墳

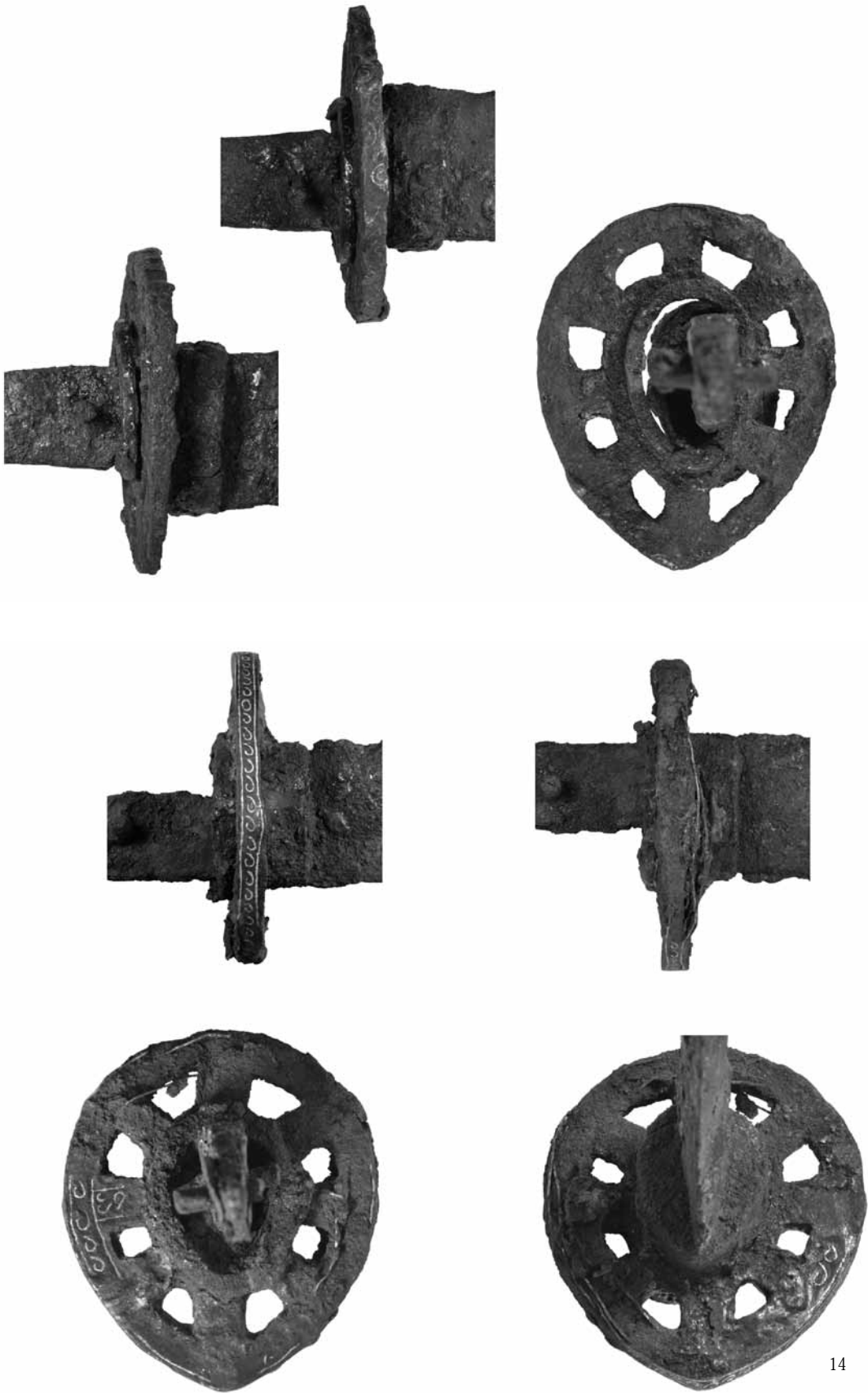
図版14



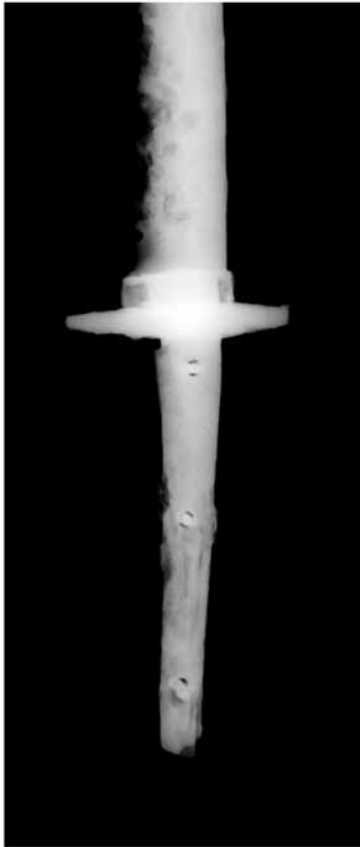
土師器・須恵器



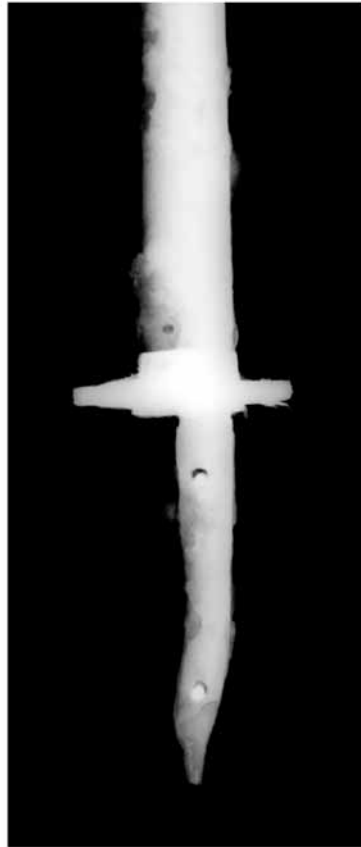
直刀



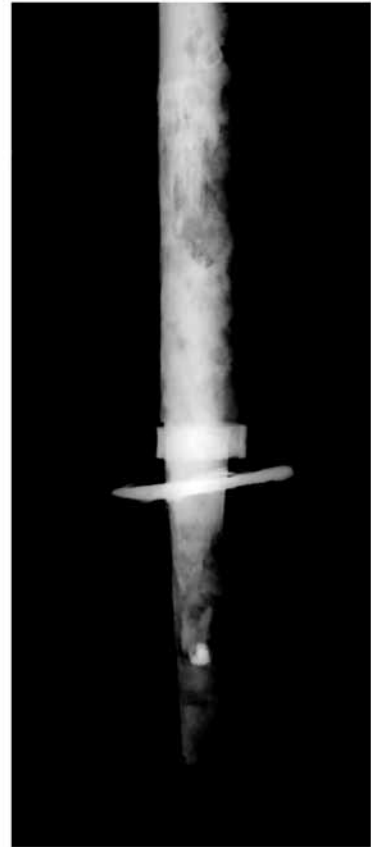
1号刀（上）・2号刀の銀象嵌文様



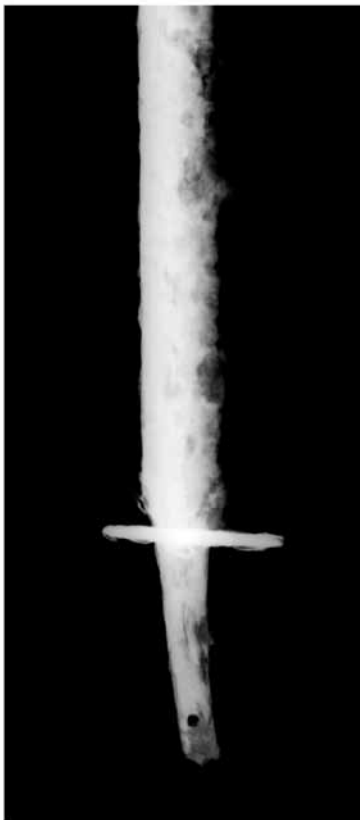
1号刀



2号刀



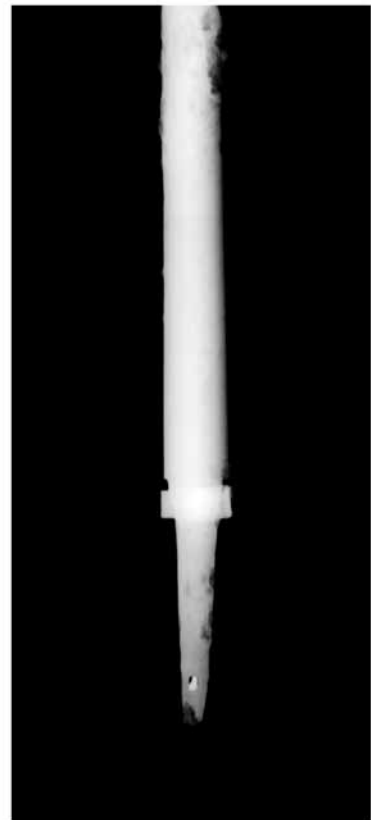
3号刀



4号刀



5号刀



6号刀

直刀のX線写真

図版18



1号刀



6号刀



3号刀



4号刀



13



10



12



11



15

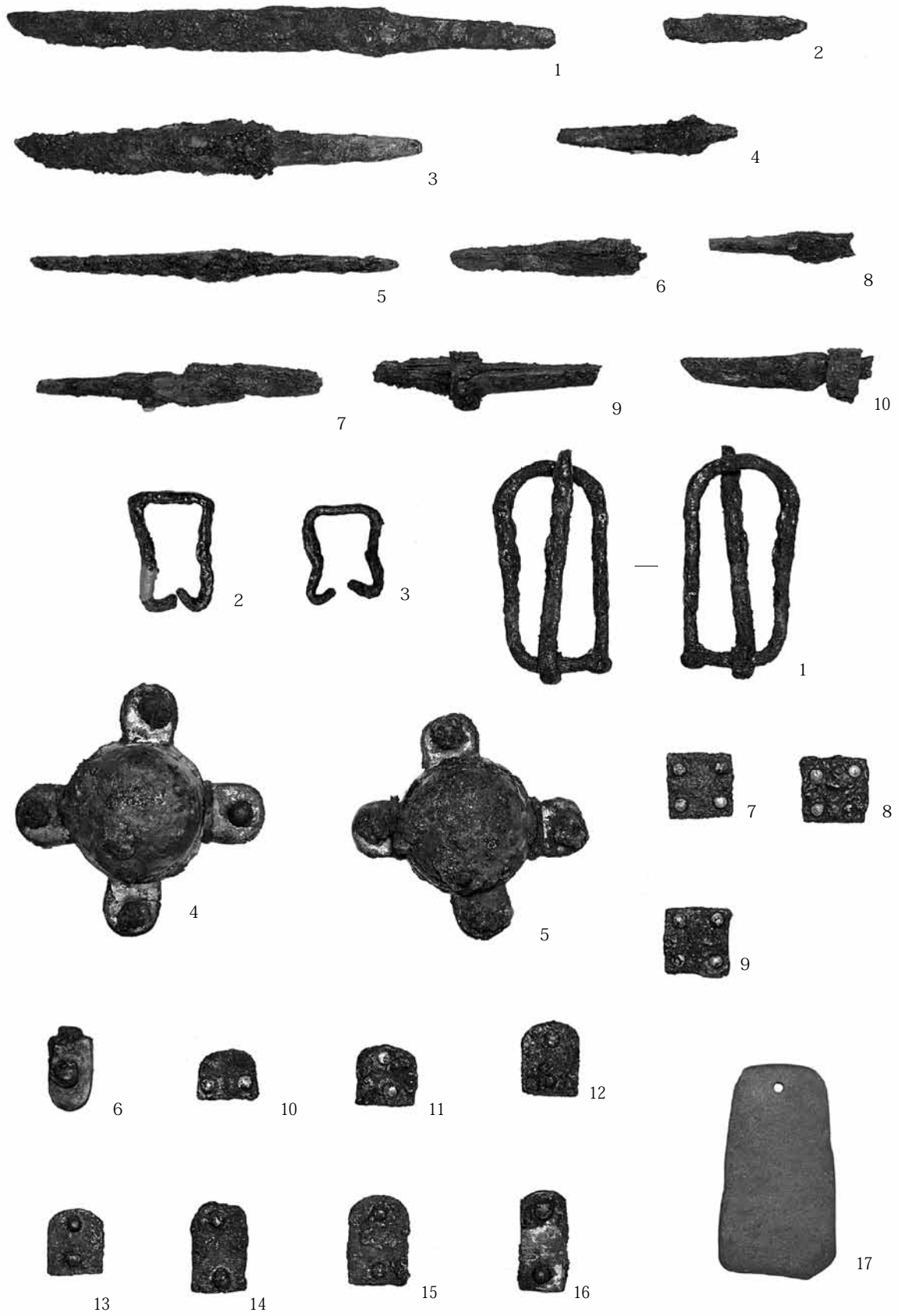


16



17

直刀の関付近及び刀装具



刀子·馬具·石製品

图版20



鉄鏃 1



鉄鏃 2

图版22

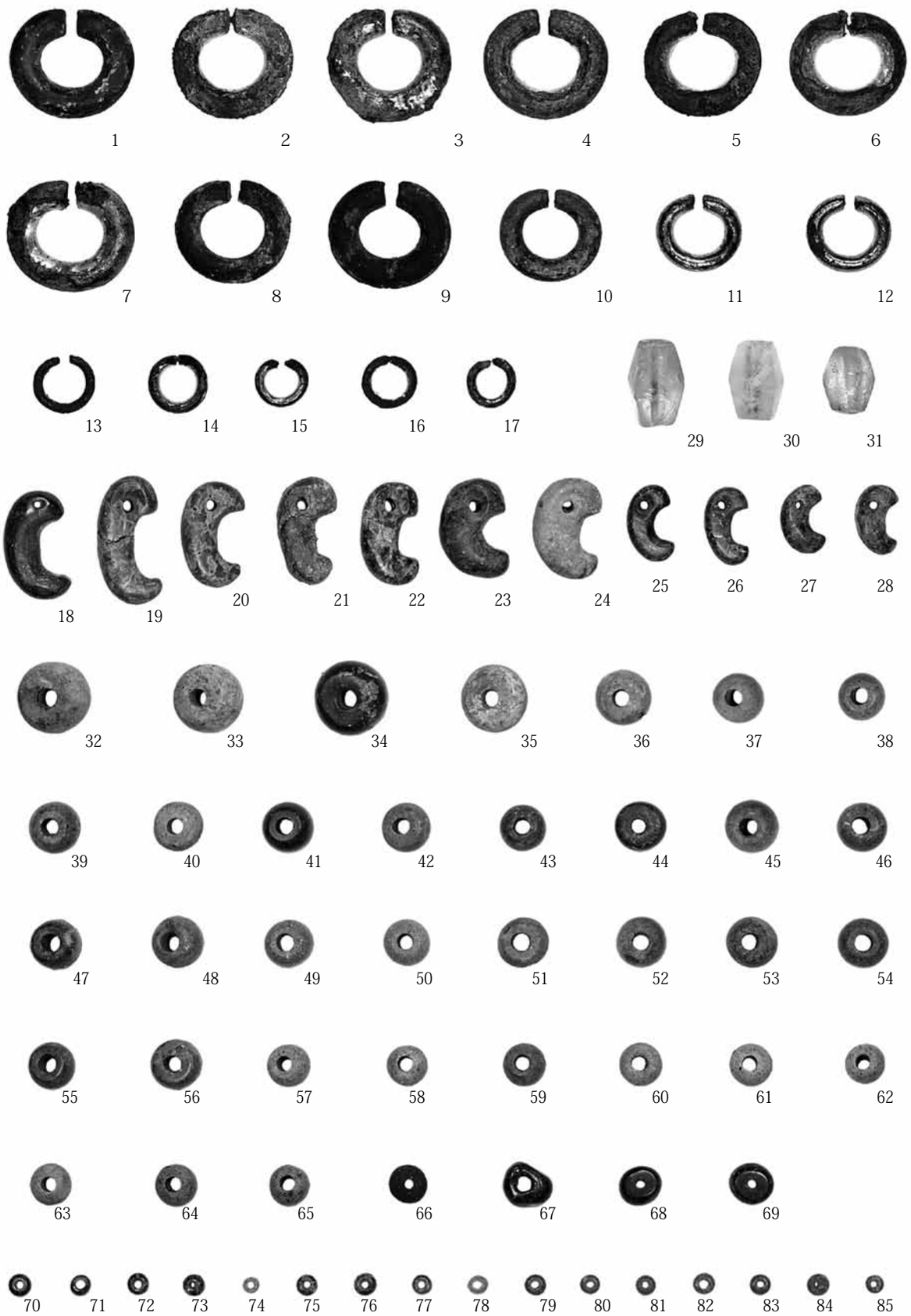


鉄鏃 3



鉄鏃 4

図版24



耳環・切子玉・勾玉・白玉・ガラス玉

報告書抄録

ふりがな	えいめいじやまこふん							
書名	永明寺山古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鵜飼幸雄・小林深志・塩澤恭輔							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番地1号 Tel.0266-72-2101							
発行年月日	西暦2016年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えいめいじやまこふん 永明寺山古墳	まのし 茅野市 ちの	20214	348	36° 00' 14"	138° 09' 18"	2013.4.16) 2014.11.28	78.5㎡	保存目的のための 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
えいめいじやまこふん 永明寺山古墳	古墳	古墳	古墳時代 古墳 1基	古墳時代 直刀6本、刀子17点、 鉄鏃108点、馬具、耳 環17点、玉類(勾玉11 点・切子玉3点・白玉35 点・ガラス玉22点)、須 恵器、土師器、砥石 平安時代 土師器	・外護列石がめぐる円墳 ・石室内からは直刀や鉄鏃、 玉類など良好な保存状態 で出土した ・2本の直刀鏢からは象嵌が 検出
要約	市営永明寺山公園墓地拡張工事に伴って新たに7世紀とみられる円墳が発見された。墳丘は流出していたが調査の結果、外護列石と石室が残っていることが確認され、石室内からは象嵌装飾の施された直刀の他、鉄鏃や馬具、玉類などの装飾品、土器類が出土した。出土遺物の内、直刀を含む鉄製品と耳環については保存処理を行った。古墳については現地にて復元保存されている。				

永明寺山古墳

平成28年3月25日 印刷

平成28年3月30日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 (0266) 72-2101(代)

印刷 永明社印刷所

長野県茅野市塚原2丁目12番30号
